

研 究 紀 要

第 6 2 号

「伝統文化教育を中心とした教科等横断的なカリキュラムの開発」（3年次）
ーグローバル社会に生きるために必要な資質・能力の育成を目指してー

令和2年

金沢大学附属中学校

はじめに

金沢大学附属中学校

校長 端崎 圭一

本校では、平成 29 年度と 30 年度の二年間、国立教育政策研究所の研究指定を受け「伝統文化教育を中心とした教科等横断的なカリキュラムの開発」に取り組みました。本年度は、研究指定を受けておりませんが、伝統文化教育研究のまとめの年と位置付けて、鋭意、研究を行なってまいりました。

本研究は、平成 26 年度から三年間行ないました E S D（持続可能な開発のための教育）を基盤としております。そこでは、生徒たちの代替案の思考力や多面的・総合的に考える力等の汎用的な能力を教科等横断的なカリキュラムの中で日常的に鍛えていくところに特色がありました。

この E S D 研究で得たものを活かしつつ、平成 29 年度と 30 年度の二年間は、各教科等のねらいを達成するために、どのような伝統文化に関わる実践が効果的であるのか、また、伝統文化を柱として、教科が連携して取り組むことのできる単元・題材にはどのようなものがあるのか等の検討を積み重ねてまいりました。さらには、「グローバル社会に生きるために必要な資質・能力」とは何であるのかの洞察を深め、これまで積み上げてきた多くの実践事例を基に、体系的な伝統文化に関する教育課程の編成を試みました。

本年度は、これら二年間の取り組みの精選を進めました。教育課程面においては、本研究を通して策定したグランドデザインを素地として、グローバル社会に生きるための資質・能力を育成するためのカリキュラムデザインの完成を目指しました。また、実践面においては、これまでの授業を振り返り、何が効果的で何が効果的でなかったかを考えつつ、全国の学校で活用してもらえるような実践例の開発を目指しました。

本研究に関しましては、たどり着くべき水準や必要な要素など、不明瞭で未整理なものが、まだまだ沢山ございます。皆さまからのご指導やご鞭撻をいただきながら、今後も成長をしていきたいと考えております。本紀要をお読みいただき、本校の研究に対する忌憚のないご意見を賜うことができれば幸いに存じます。

最後になりましたが、この三年間の研究に取り組むにあたり、懇切丁寧なご指導・ご助言をいただきました文部科学省調査官の藤野敦先生に厚く御礼申し上げます。

令和 2 年 3 月

目 次

1. 「伝統文化教育を中心とした教科等横断的なカリキュラムの開発」(3年次) ーグローバル社会に生きるために必要な資質・能力の育成を目指してー 令和元年度の研究・実践の概要(研究部)	1ー 30
2. グランドデザイン(学校・各教科等)	31ー 46
3. 学習計画表	47ー 52
4. 教科等	
(1) 国 語 科	53ー 60
(2) 社 会 科	61ー 72
(3) 数 学 科	73ー 84
(4) 理 科	85ー 94
(5) 音 楽 科	95ー101
(6) 美 術 科	102ー108
(7) 保健体育科	109ー117
(8) 技術・家庭科	118ー133
(9) 英 語 科	134ー148
(10) 学 校 保 健	149ー156
(11) 道 徳	157ー162
(12) 総 合	163

伝統文化教育を中心とした教科等横断的なカリキュラムの開発
—グローバル社会に生きるために必要な資質・能力の育成を目指して—

1. はじめに

(1) 研究テーマの設定について

- ①本校の教育目標と研究の経緯
- ②E S D 研究
- ③E S D 研究を基盤とした伝統文化教育研究

2. 研究の方針と目標

- (1) 教科等横断的なカリキュラムの開発について
- (2) 伝統文化教育について
- (3) 研究の方策・研究体制

3. 平成 29 年度（1 年次）の取組

- (1) 具体的な取組と実践
- (2) 成果と課題

4. 平成 30 年度（2 年次）の取組

- (1) 学校全体のグランドデザインを基にした各教科等の指導の工夫
- (2) 学校全体で育成する資質・能力の設定
- (3) 成果と課題

5. 令和元年度の取組

- (1) 各教科等の授業実践
- (2) 学校全体のカリキュラムマネジメント
- (3) 成果と課題

伝統文化教育を中心とした教科等横断的なカリキュラムの開発 —グローバル社会に生きるために必要な資質・能力の育成を目指して—

1. はじめに

本校は平成 29 年度より二年間、国立教育政策研究所の研究指定を受け、伝統文化教育に取り組んでおり、今年度は研究三年次である。本校が伝統文化教育に関する研究に取り組むことになった背景としては、次の二点があげられる。

- ・本校の学校教育目標と伝統文化教育との関連が深いこと。
- ・これまでの本校の教育研究の成果が伝統文化教育の研究に生かせること。

これらのことについて、次に説明を行う。

(1) 研究テーマの設定について

①本校の教育目標と研究の経緯

本校は、教育目標とそれを受けて目指す生徒像として以下のように掲げている。

学校教育目標：「自由闊達な気風の中で、広い視野と豊かな人間性を持ち、将来、社会的使命を果たす生徒を育成する。」

目指す生徒像：①自ら考え学ぶ生徒

②お互いに認め合い、助け合う生徒

③心身ともにたくましい生徒

学校全体の教育活動の中でこれらの実現を目指し、日々様々な具体的活動に取り組んでいる。また、これらを踏まえてこれまでも年度ごとにテーマを定め、教育実践研究を行ってきた。

②E S D 研究

平成 26 年度からの三年間は学校教育目標の「社会的使命を果たす生徒を育成する」をより効果的に達成する方策を開発するため、E S D 研究を進め学校の各教育活動に環境学習や国際理解学習を取り入れ、その成果と課題について考察を行った。特に平成 26 年度と 27 年度の 2 年間は国立教育政策研究所の研究指定を受け、研究発表会などを通して研究の成果を広く発信してきた。E S D 研究に取り組むにあたり、その前年度までの研究の成果と課題について平成 26 年度本校紀要では以下のように述べている。

「本校では昨年度まで、『思考力・表現力・判断力の育成』を目指し、その中でも特に『思考力』に焦点をあて、課題を解決するために必要な思考力を育成するために、1)『思考の型』を取り入れて、2)『思考するための手立て』を工夫するなど、実践を積み重ねてきた。しかし、生徒が課題を解決する方法を各教科等で学んだとしても、その方法が、教科の枠の中でしか使えなかったり、ある単元のみの特化したりするなど、学習したことの広がりが感じられなかった。昨年

度の本校研究紀要にも、『思考の型』や『思考の手だて』を統合するなどして、『思考力を育成する学校全体の取り組みをさらに深めていく必要性』が課題として取りあげられている。すなわち、生徒には、将来、社会の形成者として必要な、教科の枠を超えた課題解決の力が十分に身につけていないといえる。その中で、本校教員も、内容的に類似している取り組みをつなげたり、教科間で連携して共通して身に付けさせたい力を育んだりすることで、学習したことが広がりを見せ、生徒の教科の枠を超えた課題解決の力に総合的につながっていくのではないかと感じ始めていた。そこで、今年度より、教科の取り組みをつなげ、生徒の総合的な課題解決の力を育む方向で研究を行うことにしたが、そのために、教員全体が共通して取り組める課題解決のテーマとして、E S D (Education for Sustainable Development)を取りあげることにした。」

(金沢大学附属中学校 研究紀要第 57 号 2015)

つまり、E S D 研究に取り組むに当たっては、それまでの本校の教育研究の特長として各教科等が積極的に生徒の資質や能力を育成する手立てについて開発をしているということが長所でありながら、同時に教科間で連携して取り組むことや、教科の枠を越えることで育成をねらうことのできる資質・能力についての考察が不足しているという短所があるという課題があった。そこで、それらの長所・短所を踏まえて学校全体で取り組むものとしても、E S D 研究が適していると考え、取り上げることとなった。

③ E S D 研究を基盤とした伝統文化教育研究

前述のように、本校の教育目標と E S D との目指すところの共通点をスタートとし、総合的な学習の時間や特別活動のみではなく、普段の教科等の授業の中で展開できる E S D を目指して学校研究を始めた。それまでも、本校では、言語活動に注目した思考力の育成に関する研究や思考の型に関する研究を各教科等が取り組んでおり、学校全体をあげて研究に取り組む体制があった。そこで E S D を進めるに当たっては、全ての教科等が関わることを前提とし、教科等横断的なカリキュラムの開発を目指した。3 年間の E S D 研究の取り組みの成果と課題は以下のである。

E S D 研究の成果と課題

ア 成果

- ・本研究は、教科等の授業でこのように E S D の授業ができる、といった実践提案型の研究である。教材の「つながり」を図ったユニットや、E S D の実践事例を数多く完成できたことがまずは成果である。
- ・実践が多い能力・態度に関して、生徒も教科等の授業を通して自分に能力・態度が身に付いたことを実感している。
- ・教科等の授業を通して E S D を実践していく方向性が、教員で共通理解できたことも成果である。
- ・カリキュラムマップの作成により、実践の全体像を可視化できたことが成果である。今後、さらなるカリキュラムマネジメントにつなげていくことができる。

イ 課題

- ・能力・態度と教科等の力のさらなる整合性を図ることが今後の課題である。さらに、それぞれの能力・態度を、各教科等がどのように分担していくかを考え、実践していくことも課題である。
- ・カリキュラムマップをもとに実践が少ない分野や能力・態度の時期をどうするか、また、それぞれの実践を、能力・態度間のつながりも含めて、全体的につなげていくことが課題である。
- ・実践提案型の研究から、実際の諸問題解決の研究へと移行するかどうか、そのためにも、総合的な学習の時間との関係を考え、実践していくことが今後の課題である。

(金沢大学附属中学校 研究紀要第 59 号 2017)

E S D 研究の特長をまとめると、本校の特長として以下のことが挙げられる。

- ・各教科等がそれぞれの教科等の特質を踏まえつつ、継続して実践研究に取り組んでいる。
- ・学校全体のカリキュラムマネジメントに関して、全教科等が積極的に関わっている。

このような本校の教育研究に関する土壌を生かし、伝統文化教育を進められるような研究の体制や方策について考えた結果、以下のように研究テーマを設定した。

研究テーマ

伝統文化教育を中心とした教科等横断的なカリキュラムの開発
ーグローバル社会に生きるために必要な資質・能力の育成を目指してー

2. 研究の方針と目標

伝統文化教育を柱として学校の教育研究に取り組むに当たり、本校の特長を生かす研究とするため、次のように研究の方針と目標を設定した。

研究の方針：各教科等の連携による体系的な伝統文化に関する教育課程の編成，指導方法等の工夫改善に関する実践研究を行い，校内外に研究成果を発信する。

研究の目標：

伝統文化教育に関わって

1. 各教科等で学んだことを自分たちの現在や将来の行動につなげられる生徒を育てる。
2. 教科等横断的なカリキュラムの開発を目指す。
3. 伝統文化教育の推進と各教科等の思考力・判断力・表現力との関連性を明らかにする。

（１）教科等横断的なカリキュラムの開発について

これまでのE S Dの取り組みなどから、本校では教科等が連携して教育活動に取り組む素地がある。この特長を生かして、より効果的な教科等横断的なカリキュラムの開発に取り組みたいと考えた。教科等横断的なカリキュラムの開発に関しては、平成28年12月の中教審答申「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」に以下のように示されている。

「生きる力」の育成に向けた教育課程の課題

（１）教科等を学ぶ意義の明確化と、教科等横断的な教育課程の検討・改善に向けた課題

教育課程において、各教科等において何を教えるのかという内容は重要ではあるが、前述の通り、これまで以上に、その内容を学ぶことを通じて「何ができるようになるか」を意識した指導が求められている。特にこれからの時代に求められる資質・能力については、第5章において述べるように情報活用能力や問題発見・解決能力、様々な現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力など特定の教科等だけでなく、全ての教科等のつながりの中で育まれるものも多く指摘されている。重要となるのは“この教科を学ぶことで何が身に付くのか”という、各教科等を学ぶ本質的な意義を明らかにしていくことに加えて、学びを教科等の縦割りにとどめるのではなく、教科等を越えた視点で教育課程を見渡して相互の連携を図り、教育課程全体としての効果が発揮できているかどうか、教科等間の関係性を深めることでより効果を発揮できる場面はどこか、といった検討・改善を各学校が行うことであり、これらの各学校における検討・改善を支える観点から学習指導要領の在り方を工夫することである。

中央教育審議会 「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」文部科学省 2016

また、伝統文化教育を通して育みたい資質・能力について考えた時に、次期学習指導要領に向けた指針としての以下のまとめを参考とした。

平成28年8月 「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」

現代的な諸問題に対応して求められる資質・能力

(グローバル化する社会の中で)

○グローバル化する社会の中で世界と向きあうことが求められている我が国においては、自国や他国の言語や文化を理解し、日本人としての美德やよさを生かしグローバルな視野で活躍するために必要な資質・能力の育成が求められている。前述(4)で述べた言語能力を高め、国語で情報を的確に捉えて考えをまとめ表現したりできるようにすることや、外国語を使って多様な人々と目的に応じたコミュニケーションを図れるようにすることが、こうした資質・能力の基盤となる。加えて古典や歴史、芸術の学習等を通じて、日本人として大切にしてきた文化を積極的に享受し、我が国の伝統や文化を語り継承していけるようにすること、様々な国や地域について学ぶことを通じて、文化や考え方の多様性を理解し、多様な人々と協働していくことができるようにすることなどが重要である。

※「グローバル人材」…要素ⅰ：語学力・コミュニケーション能力

要素ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神、

協調性・柔軟性、責任感・使命感

要素ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー

(グローバル人材育成推進会議)

中央教育審議会 「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」 文部科学省 2016

これからの社会において求められる資質・能力の育成を、伝統文化教育を通して行いたいと考えた時、ここで示されている「グローバル人材」の要素ⅰ～ⅲの育成を具体的な目標とすることができる。また、これらの要素は各教科等で独立して育成できるものではなく、各教科等の枠を越えて育成をねらえるものとして適切である。そこで、本校の研究テーマの副題を「—グローバル社会に生きるために必要な資質・能力の育成を目指して—」とし、その育成に取り組みたいと考えた。

また、育成を求められる資質・能力については前掲の記述に続き以下のようにある。

(現代的な諸問題に対応して求められる資質・能力と教育課程)

○このように、現代的な諸問題に対応して求められる資質・能力としては、以下のようなものが考えられる。

- ・健康・安全・食に関する力
- ・主権者として求められる力
- ・新たな価値を生み出す豊かな創造性
- ・グローバル化の中で多様性を尊重しつつ、現在まで受け継がれてきた我が国固有の領土や歴史に関して理解し、伝統や文化を尊重し未来を描く力
- ・地域や社会における産業の役割を理解し地域創生等に生かす力
- ・自然環境や資源の有限性の中でよりよい社会をつくる力
- ・オリンピック・パラリンピックを契機に豊かなスポーツライフを実現する力

○これらが教科等横断的なテーマであることを踏まえ、それを通じてどのような資質・能力の育成を目指すのかを三つの柱に沿って明確にし、関係教科等や教育課程全体とのつながりの整理を行い、その育成を図っていくことができるようにすることが求められる。

「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」 文部科学省 2016

このまとめを参考に、本校でも教科等を越えた視点で教育課程を見直し、教育課程全体として効果を発揮できる場面について研究としたいと考えた。一年次（平成 29 年度）は全ての教科等が伝統文化に関する学習に取り組み、その中で育むことのできる資質・能力について仮に設定をし、実践研究を進めた。2 年次（平成 30 年度）はその仮説の検証とともに、各実践について検討と精選を進め、教育課程全体の工夫と改善を図った。

（２）伝統文化教育について

伝統文化教育は、これまでも各教科等や総合的な学習の時間などで行われて来た。平成 18 年 12 月に教育基本法が改正され、「伝統や文化を尊重し、それらを育んできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養う」と言及された。これを受けた平成 20 年 1 月の中教審答申「伝統や文化に関する教育の充実」では、以下のように述べられている。

国際社会で活躍する日本人の育成を図る上で、我が国や郷土の伝統や文化を受け止め、そのよさを継承・発展させるための教育を充実することが必要である。世界に貢献するものとして自らの国や郷土の伝統や文化についての理解を深め、尊重する態度を身に付けてこそ、グローバル化社会の中で、自分とは異なる文化や歴史に敬意を払い、これらに立脚する人々と共存することができる。また、伝統や文化についての深い理解は、他者や社会との関係だけではなく、自己と対話しながら自分を深めていく上でも極めて重要である。このため、伝統や文化の理解についても、発達の段階を踏まえ、各教科等で積極的に指導がなされるよう充実することが必要である。

中央教育審議会 「伝統や文化に関する教育の充実」 文部科学省 2008

伝統文化に関する学習内容は、各教科等で積極的に扱うことが改めて強調されている。またその目的は国際社会で活躍する日本人の育成であることとされている。

現行の学習指導要領の施行と並行して、様々な伝統文化教育に関する取り組みが行われている。その一つが平成 17 年より国立教育政策研究所が行った「我が国の伝統文化を尊重する教育に関する実践モデル事業」である。この事業では全国から 100 校程度を募集し、伝統文化に関する教育の教育課程における位置付け、指導の内容・方法などに関する実践研究、そして外部の人材や団体との効果的な連携の方策について研究の課題として設定した。その事業を経て、平成 24 年には同じく国立教育政策研究所が「学校全体としての各教科等の連携による体系的な伝統文化に関する教育課程の編成、指導方法等の工夫改善に関する実践研究」として研究指定事業を開始し、今年度に至るまで継続して事業を行っている。

また次期学習指導要領へ向けて、様々な動きがある中、伝統文化教育に関しては、平成 27 年 8 月「論点整理」に次のようにまとめられている。

日本のこととグローバルなことの双方を相互的に捉えながら、社会の中で自ら問題を発見し解決していくことができるよう、自国と世界の歴史の展開を広い視野から考える力や、思想や思考の多様性の理解、地球規模の諸課題や地域課題を解決し持続可能な社会づくりにつながる

地理的な素養についても身に付けていく必要がある。

中央教育審議会 教育課程企画特別部会 「論点整理」 2015

自国に関することと世界のこととを同時に広く捉えて、グローバル社会で生きるための素養を身に付けることの重要性が指摘されている。また平成 27 年 12 月の中教審答申の「2030 年を見据えて子供たちの育てたい姿」には「社会的・職業的に自立した人間として、我が国や郷土が育んできた伝統や文化に立脚した広い視野を持ち、理想を実現しようとする高い志や意欲を持って、主体的に学びに向かい、必要な情報を判断し、自ら知識を深めて個性や能力を伸ばし、人生を切り拓いていくことができること。」と述べられており、これからの社会で広く育成すべき内容について、伝統文化教育が担っていくことが示されている。

このような流れの中で、これまでも伝統文化教育に関する多くの実践が行われてきた。それらの実践の課題として、伝統文化教育を担うのは、総合的な学習の時間に集中しがちであり、各教科等での取り組みが希薄になりがちであるということや、目的が自国への愛着や自国の文化の理解に留まりがちであり、世界的な視野の獲得までに至らないということなどが挙げられている。これらの課題を踏まえた上で、これからの伝統文化教育として「互いの文化を尊重する発信型のグローバル化」を教育の中心に据える実践などが、これからの伝統文化教育が目指す方向として挙げられる。

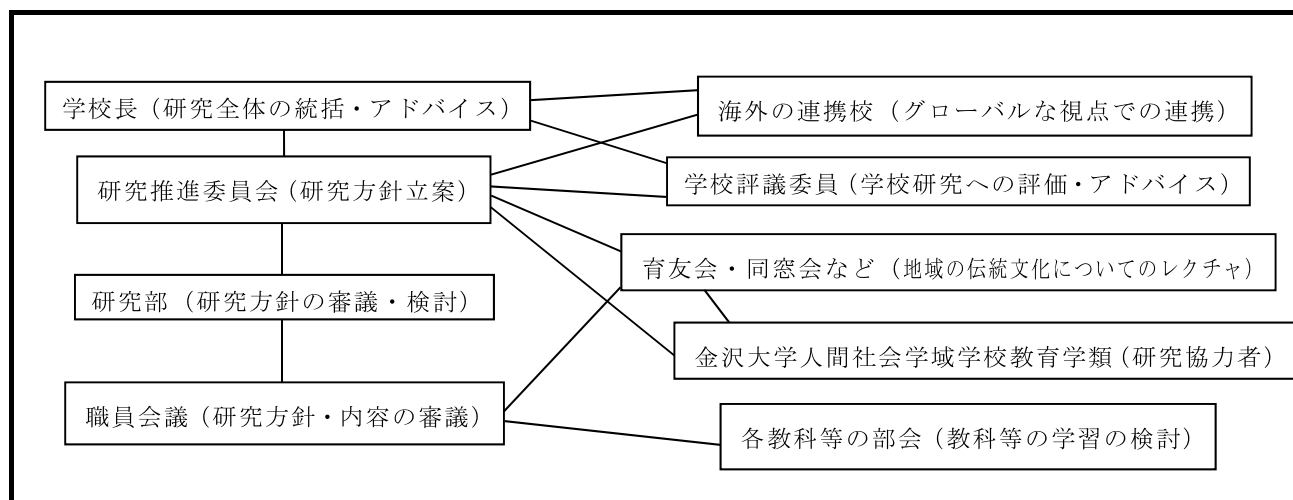
（３）研究の方策・研究体制

①研究の視点：全ての教科等が関わったこれまでの E S D の授業実践を基盤とする。教科等の学習をベースとしつつ、伝統文化教育にそれぞれの教科等がどのように関わることができるのかを明らかにし、教科等横断的な単元（題材）の開発をする。その上でそれらの学習の中で伝統文化教育を通して、一人一人の生徒がグローバル社会に生きるために必要な資質・能力をどのように身に付けていくのかを検証し、その育成のためにより有効な方策を開発する。

②研究の手立て：E S D 研究を通して得た、教科等の連携やカリキュラムマップ（全ての教科等の三年間の学習の内容やそれらの相互の関連等を一覧表にまとめたもの）の作成の経験を活かし、伝統文化教育に関して、全ての教科等が関わる 3 年間のカリキュラムマネジメントを行う。伝統文化教育を柱として、生徒の視点に立った学習計画の作成を試みる。具体的には以下の通りである。

- ・伝統文化教育に関するアンケート調査を生徒・保護者・教員を対象に行い、伝統文化や伝統文化教育に関する意識の変容について分析する。生徒の伝統文化に対する興味・関心がどのように高まり、どのような資質・能力が身に付いたのかを分析する。
- ・各教科等の授業で生徒の学習過程や思考の様子をワークシートなどの記入の内容から分析する。各教科等で育成したい資質・能力がどのように育まれているのか見取る。
- ・本校研究発表会の場で参会者から意見を求めるとともに、アンケート調査を行い本校の取り組みや生徒の実態について成果や課題を点検する。
- ・金沢大学人間社会学域学校教育学類等の研究協力者（大学教員・大学院生）、金沢大学教職大学院の職員・大学院生などから学校生活や授業での生徒の変容について評価を得る。

研究体制



3. 平成 29 年度（1 年次）の取組

（1）具体的な取組と実践

○校内研究会

伝統文化教育に取り組むにあたり、平成 29 年度に先駆けて前年度 2 月より準備を始めた。国立教育政策研究所の研究指定の申請にあたり、本校での取り組みの方向性を検討し二年間の研究の進め方について計画を立てた。

①平成 29 年度 4 月～11 月

学校全体で伝統文化教育を進めるに当たり、共通して理解しておくべきことを整理し、具体的な実践の在り方について検討を進めた。学校全体で育成をねらう資質・能力について設定をし手、考察を進め、各教科等の授業の中で取り組むことのできる実践の可能性を広げる時期となった。多くの実践を持つことを目標とし、全職員が実践にあたった。

4 月の校内研究会において、研究の計画について全教職員で確認を行った。はじめに、先行の伝統文化教育について概要を把握し、学習指導要領を参考にしながら、今なぜ伝統文化教育に取り組むことが重要なのか、ということについて全教職員が理解し今年度の研究に向けての基礎的理解とした。その中で、本校の研究では、①全教科等が連携して伝統文化教育に取り組むこと ②伝統文化教育を通して育成を目指す資質・能力をグローバル人材の要素 i ～ iii と仮定して実践に取り組むこと の二つを申し合わせた。学年別のグループに分かれてワークショップを行い、はじめに伝統文化について「生活文化」「伝統文化」「地域文化」「現代の日本文化」などの区分があることを踏まえて、それぞれの教科が伝統文化についてどのような文化を扱い、どのような要素の育成に関われそうかを各自が考えグループごとに表を作成した（図 1）。また、それらの実践の可能性の内容から、実際に今年度中に取り組むものを選び出し、各学年の年間計画表上において各教科等の取り組みを全体で可視化できる表とした（p 11 図 2）。これらの表を職員室の休憩スペースに掲示し、全教職員の目に触れやすいものとするにより、教科同士が連携したり、教科等横断的な実践について考えたりする材料とした。



図 1
要素 i ～ iii と関わって扱うことのできる
伝統文化の可能性をあげた表

二年間の研究計画（国立教育政策研究所に提出のもの）を基に、具体的な実践に向けた申し合わせを行い、動き出した。前年度までの E S D 研究で取り組んだ校内研究授業（詳細は p 12～）の形式を今年度バージョンに手を加えて利用し、どのような伝統文化に関する授業の中で、どのような資質・能力の育成をねらうのかを示せるものとした（p 11 図 3）。試みとして 5 月、6 月に行う校内研究授業について、そのねらいなどについて確認をし、各教科等の実践について検討する機会を設定した。

6 月に研究授業をともなで行われた校内研究会では、授業を全校教員が参観し、全体での授業整理会を設け、本校の伝統文化教育の方向性や連携の可能性などについて検討した。4 月より指導を受けている国立教育政策研究所の藤野敦調査官にも参加をいただき、これまでの本校の取り組みや本日の授業、今後の実践について講演会の形でレクチャーを受けた。また、本年度より研究に関する協力をより深めたいと考えている金沢大学教職大学院の教職員、院生にも参加をいただき、研究についての説明を行い、本日の実践やこれまでの研究に関する意見の交換の場となった。

その後、月に一回程度の校内研究会を設定し、実践の進捗状況や研究の方向性などについて、共有をし、各教科等の間の連携の可能性についてさらなる検討を行った。

例年 11 月に開催されている教育研究発表会では、学校保健を含む全ての教科で研究授業を行った。これまでの研究の状況を発信すると同時に、今後の研究や実践の在り方について、国内外の参会者と意見を交換する場となった。

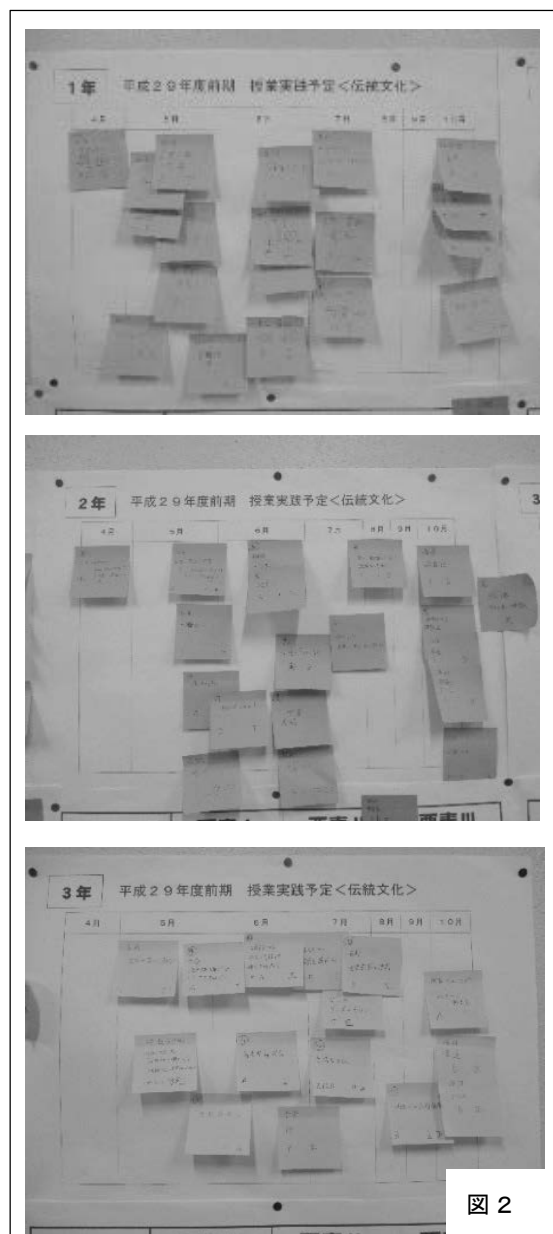


図 2

各学年での伝統文化に関わる実践を月ごとにまとめた表

授業者 橋本 正恵		授業日 5 月 日 () 3 限 ~ 6 限
授業の題名	1 年 1 ~ 4 組	
授業の目的	関係・連携の考えられる教科等 社会 (地理) 英語	
扱う伝統文化	授業内容 ・「6つの食事の役割」のなかの「食文化の伝承」について理解する。 ・自分の生活を振り返り、これからの生活の工夫につなげる ・地域文化 ・現代の日本文化 ・日本食の配膳の仕方について学ぶ。	
特に関わる要素Ⅰ～Ⅲ	教科等で身に付けたい力 (本時について) B (1) ア 「食事の役割」 ・食事の役割について理解する。 ・自分の食生活に興味を持ち、よりよい食習慣について考え、日常生活で実践しようとする 要素Ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神 協調性・柔軟性、責任感・使命感 要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ	
授業のポイント・流れ (見て欲しい部分、要素Ⅰ～Ⅲに關わるポイントなど)	前時までに食事の主な役割として以下の6つを確認しておく。 「生命や健康の維持」「エネルギー」「成長」 「生活のリズム」「人と人とのつながり」「食文化の伝承」 この中から、「人と人とのつながり」「食文化の伝承」を取り上げて扱う。 ともに食事をする事で、コミュニケーションがうまれる。同時に食文化の伝承ができる。 「インド」「ドイツ」「ニュージーランド」の食生活の壁面の写真 (「地球の食卓」より) ・三大食作法の割合グラフを提示し、日本の食生活との相違点について話し合う。要素Ⅲ ・和食の配膳の仕方について確認する。	
	食生活チェックリストを使い、自分の食生活について振り返る。 今後大切にしたい食文化の作法について、考えをまとめる。	

図 3

育成をねらう資質・能力や教科のねらいを示した実践の記録形式

②平成 29 年度 12 月～3 月

11 月までの時期は、伝統文化教育に関わる実践を、数多く重ねることを目標としてきた。それらの実践を受け、29 年度後半は、それらの実践が伝統文化教育として、ふさわしいものであったかや、どのような資質・能力の育成を期待できたのか、などについて考察と検討を行った。次年度へ向けて、実践の精選を行い、教科等間の連携を深めることを目標とした。

○研究授業

前述の校内研究会と共に、様々な形態での研究授業をもった。各学年で行った研究授業では、関係する教員が参観し、以降の連携へとつなげる機会となった。また、全校の職員が会し、行われた研究授業では、学校全体を通じて育成をねらう資質・能力について、設定した内容や育成のねらい方などについて検討をする機会となった。

このような研究授業においては、国立教育政策研究所の調査官を招いて指導を受けたり、金沢大学教職大学院の教員・院生の協力を得たりして、研究を多方面から捉える機会としている。

・授業実践

前述の通り、ESD 研究の取組の中では、伝統文化教育に関する研究にも共通する「全教科等で取り組む」「教科等横断的な実践を開発する」などの目的を持ち、カリキュラムマネジメントを行った。三年間をESD 研究の成果として、全教科等の指導計画を一枚表の形にした「カリキュラムマップ」があげられる。これらの開発のベースになったのが「プチ研」と校内で呼ばれている研究授業である。

「プチ研」は、各教職員が実践を行う際に、簡易な指導案（p11 図3）を作成して全教職員で共有し参観し合う趣旨から行われた。普段の授業について、様々な見方から意見を集めたい時や、他教科等との連携のヒントにしてほしい時などに、「気軽に行える小さな研究授業」という意味合いで「プチ研」と名付けて継承されてきた。伝統文化教育に当たってもこれらの取り組みを重ねて、試行錯誤を重ねながら大きな研究へとつなげていきたいと考えている。

（2）成果と課題

①成果

- ・日本の伝統文化について、生徒の意識や現状などについて明らかになった。
- ・全ての教科等で伝統文化に関わった授業実践を持つことができた。
- ・各教科等のねらいを達成するために、どのような伝統文化に関わる実践が効果的であるのかを検討することができた。
- ・伝統文化を柱として、教科が連携して取り組むことのできる単元・題材を検討することができた。

②課題

- ・生徒や保護者と学習の目標を共有したり、生徒自身がその成果を評価したりする仕組みができなかった。

- ・ 伝統文化教育を通して育まれる資質・能力の変容を明らかにするための、多様な評価について検討できなかった。

平成 29 年度の研究では、伝統文化教育に取り組む初年度として、第一の目標として、実践の数を多く持つことを掲げた。その結果、学校保健を含む全ての教科等で全ての教員による伝統文化に関わる授業実践を持つことができた。またそれらの実践は、複数教科等で連携が図られたものであり、今後、その成果を三年間の学習計画として形にしていく計画である。

また 5 月と 12 月に実施したアンケートによって、伝統文化に関する生徒の意識や実態を明らかにできた。一方、伝統文化教育によって生徒にどのような資質・能力の変容が見られたかということに関しては、明らかにできなかった。今後、アンケートの内容を始め、多様な評価の在り方についての検討が重要であることがわかった。

研究を進める中で、教育目標や研究活動を、その他の教育活動を俯瞰できるグランドデザインが必要なのではないかという議論が起きた。平成 29 年度は、年度の途中ではあったが、グランドデザインの作成に着手した。平成 30 年度は、この表をもとにして、学校教育の教育活動に関わる生徒・保護者・地域・教職員が目標を共有して日々の活動に臨みたいと考えた。

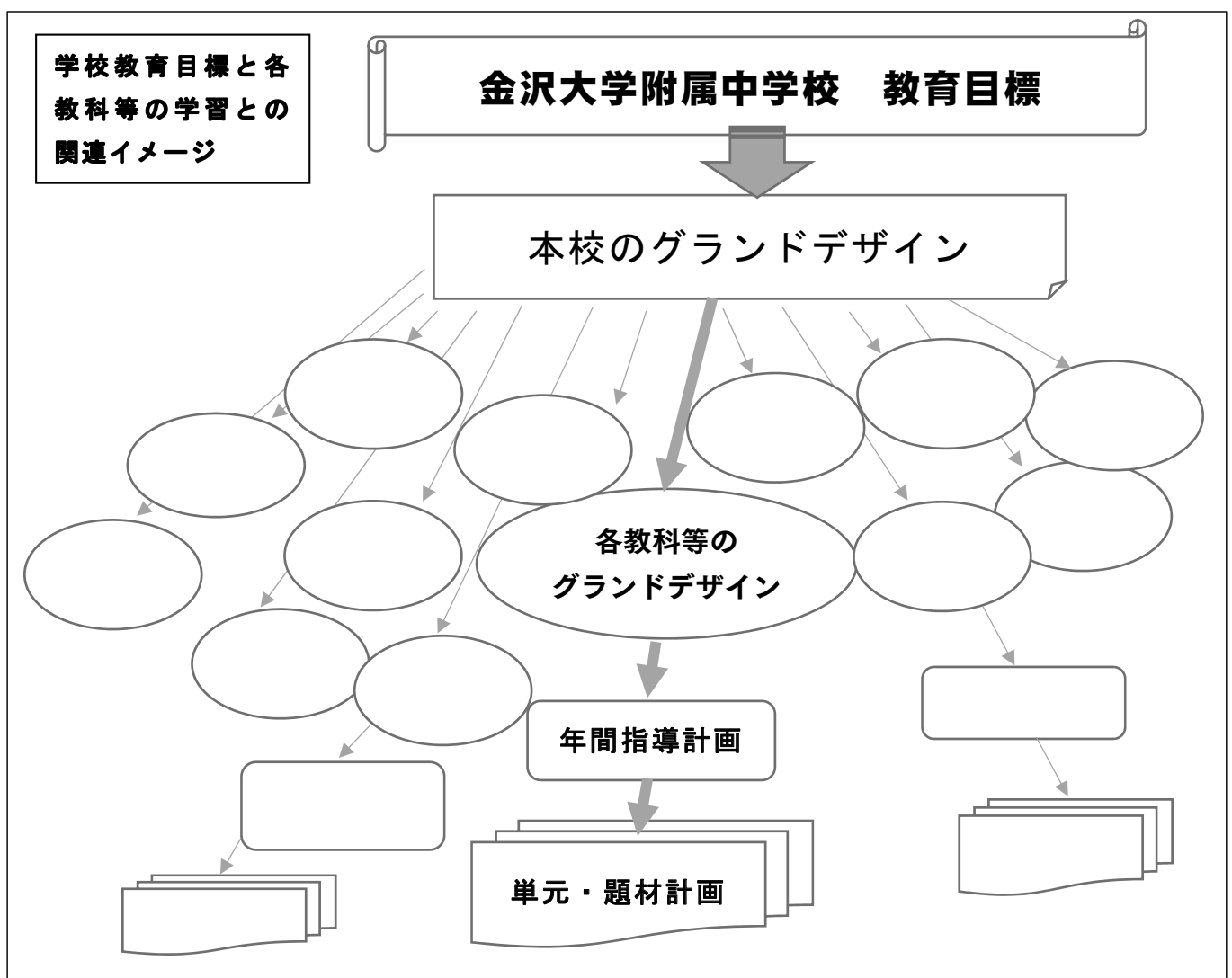
4. 平成 30 年度（2 年次）の取組

前年度の成果と課題を踏まえて、平成 30 年度は新たに以下の点を意識して研究に取り組むこととした。

- ・生徒や保護者と学習の目標や学びの過程を共有できる方策をつくる。
- ・伝統文化教育を通して育まれる資質・能力について、その内容についてより明らかにする。

（1）学校全体のグランドデザインを基にした各教科等の指導の工夫

前述のように、学校全体のグランドデザインを作成した（p 31～32）。学校の教育目標を達成するために、学校の全ての活動がどのように関わり、連携して目標を達成するのかを図示したものである。このグランドデザインを拠り所として、今年度は、各教科等がそれぞれの目標を設定し、学習指導の計画を作成し、そこに伝統文化教育も位置付けた。（p 33～46）。



また、これまでの学習指導案の形式にも大きく変更を加え、各授業の学校全体の教育活動上での位置付けを明確にし、後述（p 16）の学校全体として育成する資質・能力①～③と各授業との関連を示すものとした。各教科等の学習の中で、どのような資質・能力の育成をねらっているのかを明記し、学校全体として、どのように資質・能力を育成していくのかについて、イメージが持てる形式とした。実際に作成された学習指導案（p15）を例として詳細についての

説明を加える。

これまでは、本時の学習に重きを置きがちであった学習指導案形式に工夫を加えた。図で示したように、「学校全体で育成する資質・能力」「教科の年間指導計画」「単元の指導計画」の位置付けが明確になるような形式とした。教科の学習は、単なる知識や技能の寄せ集めではなく、スパイラルに積み上がっていく中で、様々な資質・能力の育成につながるものである。そのことを、各学習を計画する際に明確にすることを意識している。

4. 単元計画（3時間扱い、本時 は3時間目）			
次時	○学習内容（ねらい）・学習活動	指導上の留意点・他教科等との連携	
1	○俳句の特色などを知るとともに、そこに込められた心情や情景を読み味わう。 ・詠まれている情景を想像しながら、それぞれの俳句を音読する。 ・俳句に関する専門用語の意味を確認する。 ・筆者のものの見方や感じ方が表れている語句や表現などの意味を確認する。 ・解説を基に、俳句の表現の工夫とその効果について確認する。	・既習事項を確認するために俳句について知っていることや小学校で学んだことのある作品などを発表する。 ・俳句を作るときに心構えについて、筆者が述べていることを確認する。 ・目的意識を持つために第3時に句会をすることを伝える。 【3年英語】：英語で俳句を作ろう	教科名と連携しているところに、教科名が書かれています。
2	○「俳句を味わう」の句を音読し、それぞれの心情や情景を読み味わう。 ・俳句の大意を理解する。 ・季節や情景、作者の感動が表れた言葉を把握する。 ・最も気に入った俳句の一つを選び、心ひかれた言葉や表現についてコメントを書く。	・言葉に着目しながら俳句の大意、情景や心情を捉えるためにワークシートを用いる。 ・コメントで取り上げる言葉や表現は、一つに絞ることと季節や切れ字などに着目することを確認する。	教科名と内容が簡単に書いてあります。
3	○表現のしかたを工夫して俳句を作り、友達と感想を交流する。 ・俳句を作るときに観点を確認する。 ・ワークシートを使って俳句を作る。 二重線で囲まれているところが単元計画の中に位置づけられた本時となります。 ・作った作品を交流する。 ・各自、よいと思った一句を選び、そのよさを語で伝える。 ・各班から選ばれた一句を全体で紹介する。	・「歳時記」や国語便覧を活用し、参考にする。 ・セリトとなるように印象に残った出来事を自由に出し合うことを確認する。 ・語句を吟味し、定型になるようにする。 ・各班で出た意見を基に発表するようにする。	この時には、教科の評価が記入されています。
			育成する資質・能力 ①日本の伝統や文化に関する理解 ②伝統文化への理解に基づいた多様な文化を尊重する態度 ③文化の伝承・創造への主体性など という育成したい資質・能力の三つがどこで養われるか、教科としてどのようなことができるようになるかと捉えているかが書かれています。すべての時に入るわけではありません。
			各俳句の季節や季節感を押さえ、五句に詠まれた情景や心情を捉えることができます。【読むこと】
			作品の具体的な言葉や表現に即してコメントを書くことができます。【書くこと】
			感動の中心が伝わるよう、語句や語順、表現のしかたを工夫して俳句を作ることができます。【書くこと】
			【③文化の伝承・創造への主体性など】 表現を工夫して、日常生活の中での発見や感動を俳句にする。 教科として資質・能力に関わる場所について書いています。
			選んだ俳句のよさについて、そのよさを説明することができる。【話すこと・聞くこと】

平成30年度に新たに示した単元計画の形式

p15の単元計画は、平成30年11月に行われた三年生理科の天体の学習に関するものである。p16で挙げた複数の教科が連携して考えられた実践に関する内容である。二重四角で囲まれた一時間目の部分が「本時」を示し、p16の実践事例に当たる部分である。縦の列ごとの内容としては、四列あるうちの左端の列は、教科としての学習内容と活動、そしてそのねらいが示されている。その右隣りが指導上の留意点と他教科等との連携について、示している。その隣の列が教科としての評価規準を示している。伝統文化に関わった学習を計画するに際しても、教科等が目指すねらいを最優先にしつつ、実践に当たることを明確にしている。右端の列は、学校全体として育成する資質・能力＝グローバル社会に生きるために必要な資質・能力（p17）について、この学習で、どの部分の育成をねらうのかについて示している。例に挙げた計画では、1時間目に当たる部分のみに記載があるが、これは単元全体を通じて、前述の資質・能力の育成をねらう学習が冒頭の時間のみであることを示している。この資質・能力の育成に関しては、教科や単元・題材の内容によって、その扱いに違いがある。どのように分担・連携をしていけば、より効果的な資質・能力の育成につながるのかについての検討が必要である。

4. 単元計画（4時間扱い、本時 は1時間目）

次 時	○学習内容（ねらい）	・学習活動	指導上の留意点・他教科等との連携	評価規準	育成する資質・能力
一	1	○月の満ち欠けの規則性を知り、いくつかの情報から、今日の月の形や和歌に詠まれている月の形を予測する。 ・各班で模型を用い、天体の位置関係の変化と、月の満ち欠けの規則性について観察を行う。 ・学習した内容を基に、今日の月はどのような月なのかを予測する。 ・百人一首に出てくる月はどのような月なのかを予測する。	・家庭分野で学習した内容を振り返り、日本人が昔から自然との関わりを大切にしてきたことを思い出させる。 ・2年時に国語の授業で生徒が詠んだ歌を例に挙げ、興味を喚起する。 （3年家庭）：住まいの工夫 （3年国語）：いにしえの心と語らう	・地球から見える月の形や位置の変化を、月の公転と関連付けて捉えることができる。 【科学的な思考・表現】	【①日本の伝統や文化に関する理解】 ・昔から日本人は月の満ち欠けや、様々な時間帯に見られる月に着目し、そこに心情を重ね合わせていたことを知る。
	2	○太陽・月・地球の位置関係の変化によって、日食や月食などの天体現象が起こることを理解する。 ・映像やモデルを用い、天体の位置関係の変化によって日食や月食が起こることを知る。	・前回の授業で学習した月の満ち欠けの規則性について思い出させ、天体の位置関係の変化によって起こることを確認する。 ・日本書紀など、日本の昔の書物にも日食に関する記述があることを紹介し、興味を喚起する。	・日食・月食の現象を理解し、太陽・月・地球の位置関係によって起こることを理解する。 【自然現象への知識・理解】	
二	1	○地球から見た金星は、どのような動きをするのかを知り、その原因を考える。 ・太陽と地球、その他の惑星の位置関係について確認する。 ・地球とその他の惑星の位置関係から、金星がなぜ複雑な動きをして見えるのかを考える。	・明けの明星や宵の明星という言葉を知っている生徒がいれば、その言葉の意味について触れることで興味を喚起する。	・金星が星座の星の間を動いて見える原因について、地球と金星の位置関係と関連付けて捉えることができる。 【科学的な思考・表現】	
	2	○地球から見た金星は、どのような見え方をするのかを知り、その原因を考える。 ・模型を用い、太陽と地球、金星の位置関係を変えたときの金星の見え方について観察を行う。	・前回の学習内容を思い出させ、太陽と地球、その他の惑星の位置関係について確認する。 ・模型を用いた観察の際には、地球からの視点で観察するように伝える。	・金星の見え方の変化を、太陽・金星・地球の位置関係の変化と関連付けて捉えることができる。 【科学的な思考・表現】	

(2) 学校全体で育成する資質・能力の設定

平成 29 年度には、学校全体で育成を目指す資質・能力として、先述（p 6）の通り、グローバル人材の要素 i ～ iii を設定した。

※「グローバル人材」…要素 i：語学力・コミュニケーション能力

要素 ii：主体性・積極性，チャレンジ精神，
協調性・柔軟性，責任感・使命感

要素 iii：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー
(グローバル人材育成推進会議)

これらの資質・能力の育成をねらって、各教科等の指導を計画したところ、以下の二点の問題点が明らかになった。

- ・各要素の定義が具体的ではなく、学校教育に特化した設定ではないため、各教科等の学習目標や学習内容との関連を示すことに困難があった。
- ・どの要素も、一時間ごとの学習で育成をねらうことは難しく、単元（題材）や他教科等との連携、3年間を通した学習計画などの中で育成ねらわなければならないものである。

これらの問題点を踏まえ、平成 30 年度には、学校全体を通して育成したい資質・能力として、それまでの要素 i ～ iii をもとに、再度、育成を目指す資質・能力の設定をした。

学校全体として育成する資質・能力＝グローバル社会に生きるために必要な資質・能力

- ①日本の伝統や文化に関する理解
- ②伝統文化への理解に基づいた多様な文化を尊重する態度
- ③文化の伝承・創造への主体性など

これらを設定するために、グローバル社会で生きるために、中学生に必要とされていることはどのようなことなのか、という点に立ち戻り、育成をねらう資質・能力について検討を行った。「学習指導要領総則解説」では、グローバル社会に生きるために必要な資質・能力に関連して、以下のように説明している。

将来の我が国を担う中学生は、郷土や国で育まれてきた優れた伝統と文化などのよさについて理解を深め、それらを育んできた我が国や郷土を愛するとともに、国際的視野に立って、他国の生活習慣や文化を尊重する態度を養うことが大切である。また、国際社会の中で独自性をもちながら国際社会の平和と発展，地球環境の保全に貢献できる国家の発展に努める日本人として、主体的に生きようとする態度を身に付けていくことが求められる。

将来、グローバル化した社会の中で生きるためには、伝統や文化に関する理解，自他の文化を尊重する態度，主体的に生きる態度などが必要であるとされている。これらのことを踏まえて、本校が学校全体を通じて育成をしたい資質・能力について検討をしたところ、以下の三つに整理することができた。

①日本の伝統や文化に関する理解

前年度までの「要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー」を踏まえたものである。グローバル社会に生きるためには、まず一人一人がその立脚する文化を理解することが必要である。日本の伝統や文化のよさについての理解に基づいて、他国の伝統や文化を尊重する態度へとつなげていくことが求められる。

②伝統文化への理解に基づいた多様な文化を尊重する態度

「要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力」を踏まえて設定をした。「①日本の伝統や文化に関する理解」を基盤とし、自国の文化を発信したり、異文化との比較をしたりする上で、コミュニケーションは不可欠である。異なる文化を持った様々な人とのコミュニケーションを通して、互いの文化を尊重する態度を育むことができると考えられる。

③文化の伝承・創造への主体性など

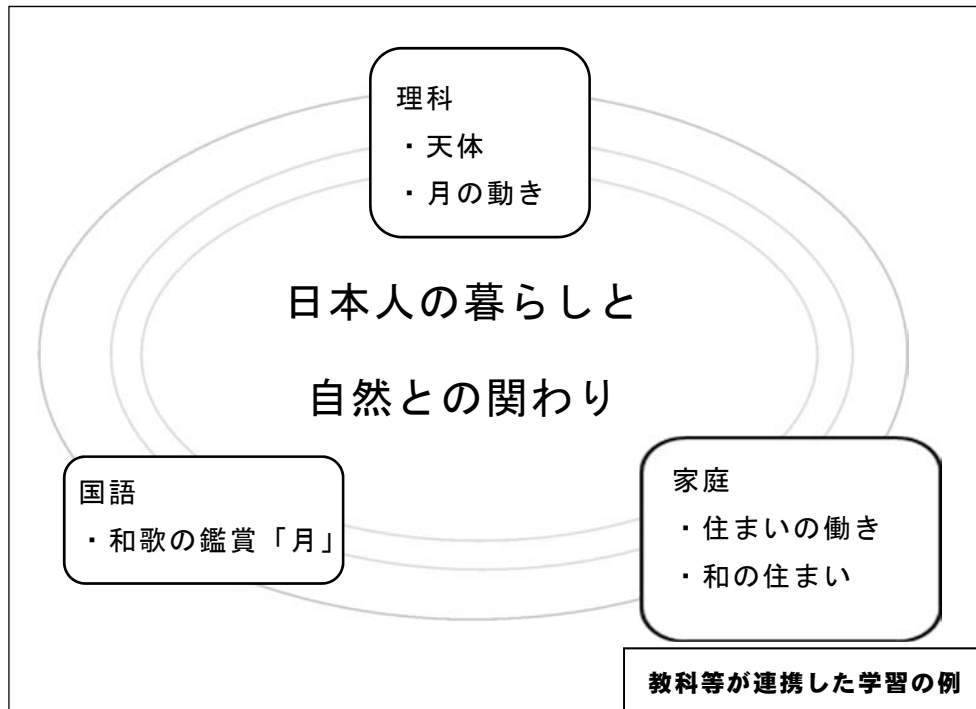
「要素Ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感」を踏まえて、設定をした。国際社会の中で独自性をもちながら国際社会の平和と発展、地球環境の保全に貢献できる国家の発展に努める日本人として、主体的に生きようとする態度を身に付けることが目標である。様々な文化を持つ人々と協働しながら、さらに新しい価値観や文化を創造するための主体性を育みたいと考えている。

これら三つの資質・能力は、単独の授業や教科等で育むことのできる性質のものではなく、学校全体の教育活動を通して、三年間を通じて育成していくものである。また、各教科等の学習内容と、これらの資質・能力の関り方には、それぞれ違いがあることも想定される。今年度の取組の一つとしては、各教科等の学習とこれらの資質・能力の育成にどのような関連性があるのかを明らかにすることを目指したい。そのためにも、先述（p15）の学習指導案の工夫において、単元（題材）指導計画の中で資質・能力の育成がどのように位置づけられているのかを明確にすることが、重要であると考えている。

学校全体で資質・能力を育成するために、前年度に引き続き、各教科等が相互に連携をして学習を構築することを進めている。実践記録にあるものはもとより、普段の学習から、連携を意識して、授業の計画に臨んでいる。

例えば、三年生の国語、理科、技術・家庭科（家庭分野）では、「日本人の暮らしと自然との関り」について、連携して学習に取り入れた。それぞれの教科で、教科としての学習のねらいを明確にしながら、相互に連携することを計画した。このような取組を重ねることにより、学校全体で育成をする資質・能力について、育成を期待できることはもちろん、各教科の学習のねらいの達成により迫れるのではないかと考えている。国語では国語の、理科では理科の、技術・家庭科では技術・家庭科のそれぞれの学習のねらいを明確にした上で、その達成のために用いるべき適切な題材を検討したときに、「日本人の暮らしと自然との関わり」という題材で実践を行うこととなった。時期的には、始めに技術・家庭科（家庭分野）の住まいに関する学習で、日本での伝統的な住まいの特徴について学び、身近な和室と洋室のそれぞれの長所と短所について考える学習を持った。その中で生徒は、幼児や高齢者にとって過ごしやすい環境について理解をしたり、日本人が昔から、暮らしの中に自然を取り入れて生活を楽しんできたことを理解したりした。その上で、月見や花見など、季節ごとに暮らしの設えに工夫を凝らしてきたことが、現代の日本の生活の中にも生きており、自分たちの生活にそれらの工夫を取り

入れていきたいという姿勢につながった。このような学習を生かして、国語と理科が並行して、学習を進めた。理科では、天体の学習の中の「月」の動きや見え方に関する学習で、技術・家庭科での学習を踏まえ、日本人が住まいの中から月を見ていたという状況の理解を生かした学習を設定した。国語では、「月」を読んだ短歌の鑑賞に関する学習を設定し、当時の人々が見ていた月はどのような月なのかということについて考えながら短歌の理解を試みるなど、技術・家庭科と理科での学習を踏まえた学習となった。



三つの教科が連携して学習を設定したことにより、それぞれの教科の学習に関して、より興味・関心が高まり、理解も深まった。各教科の成果と課題の記述にその成果が見られる。

また、各教科が連携する中心となる題材に伝統文化に関する事柄を置いたことにより、学校全体で育成する資質・能力の変容も見られた。学習後の生徒の記述によるアンケートから、その内容を見ることができた。

（３）成果と課題

①成果

○学校全体として、伝統文化教育を通して育成したい資質・能力について設定をし、各教科等で実践を重ねることができた。

平成 29～30 年度の期間で、伝統文化に関わって、資質・能力の育成を目指す授業をのべ 80 時間以上の実践を持つことができた。

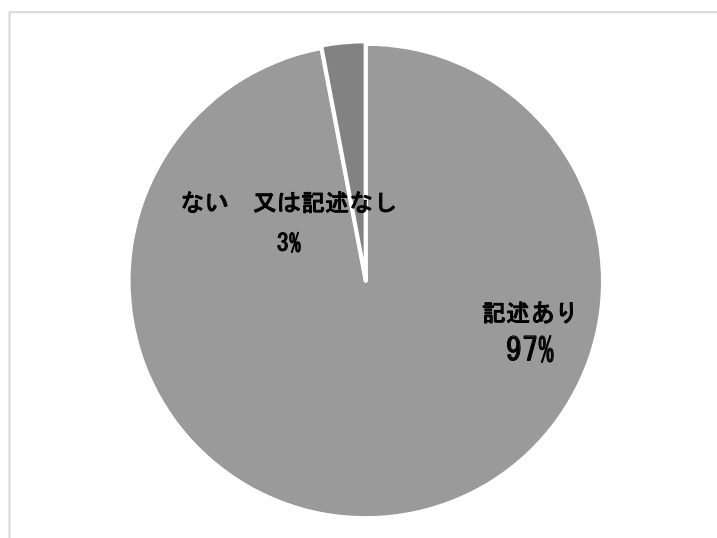
○伝統文化を柱として、教科等が連携して取り組むことのできる単元・題材を開発した。

先に挙げた実践のうちのほとんどが、他の教科等との連携を図ったものであった。

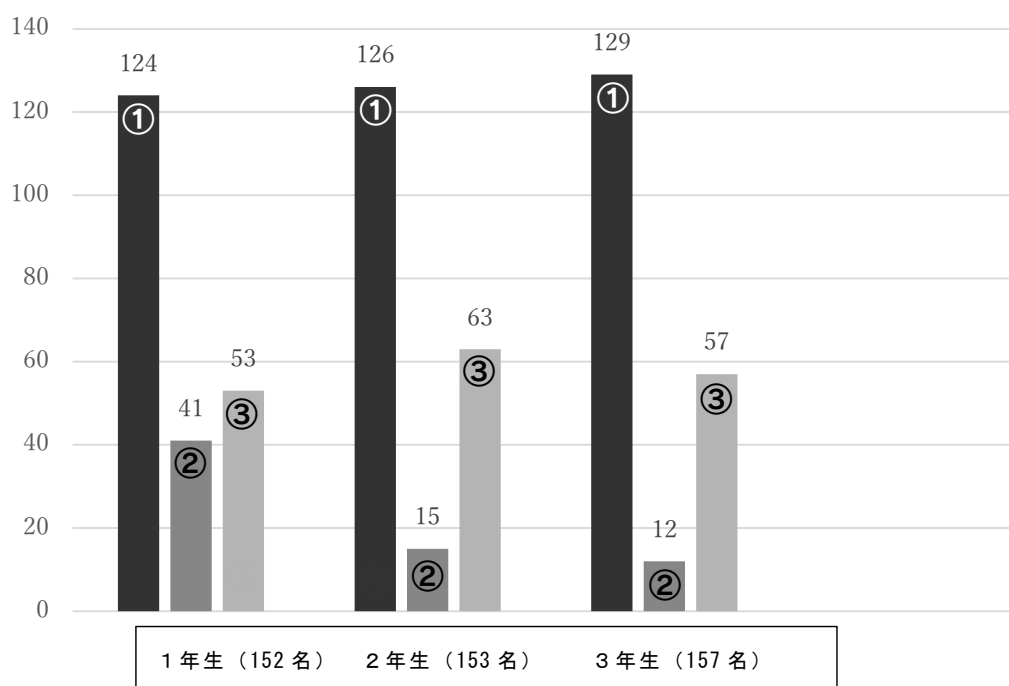
○開発したカリキュラムの実践において、生徒の資質・能力の育成につながる成果が見られた。

生徒の資質・能力の変容を見取るために、平成 31 年 1 月に、全校生徒 448 名を対象にアンケートを行った。伝統文化教育を通して、ほとんどの生徒に資質・能力の変容が見られた。

伝統文化に関する学習を行ったことで、どのような変化がありましたか。



記述にある、資質・能力①①～③③に関する内容ののべ数



- ①日本の伝統や文化に関する理解
- ②伝統文化への理解に基づいた
多様な文化を尊重する態度
- ③文化の伝承・創造への主体性など

記述例

日本に住んで14年間も経たのに、まだ「まだ」日本文化について知らないことがたくさんあることが分かった。

①
日常生活で、日本ならではの文化に出会ったとき、②他の国ではどうなのかを自然と考えるようになった。

これまであまり伝統文化について興味がいなかったけれど、興味をもつようになった。外国の伝統について気になった。伝統文化がなくならないようにしっかりと残しておきたいなと考えるようになった。

②課題

- 資質・能力の変容を、多様な視点から明らかにする評価方法についての検討には、至らなかった。

学校全体で育成する資質・能力について、具体的に設定をすることができた。来年度以降は、グランドデザインや各教科等の年間指導計画の改善を踏まえて、その変容を見取る方法について検討をしたい。上記のアンケート結果では、資質・能力①～③の記述に差がある。このことが、実際にどのようなことを意味するのかについて、今後、生徒へのフィードバックを含めて、再検討をしたい。

5. 令和元年度の取組

これまでの二年間の取組について振り返ると、一年次には伝統文化教育に関する実践を数多く積み上げ、二年次には、それらの実践が適切か否かを検討しつつ、新しい実践を積み上げた。三年次にあたる令和元年度は、二年間の実践を精選する段階とした。

	各教科等の授業実践	学校全体の カリキュラムマネジメント
平成 29 年度 (1 年次)	・伝統文化に関わる授業実践を数多く積み上げる。 ・伝統文化教育と教科等のそれぞれのねらいについて、関連を考える。	・教科等間のつながりや連携を模索する。 ・学校全体で育成をねらう資質・能力について検討する。
平成 30 年度 (2 年次)	・資質・能力①～③の育成にふさわしい実践について試行錯誤する。	・資質・能力①～③の育成に効果的な教科等の連携を模索し、三年間の学習計画を一覧にする。
令和元年度 (3 年次)	・各教科で、伝統文化教育に関わって、日本全国の学校で活用が可能な実践の事例を確定する。 ・各教科等の学習と伝統文化教育との関連を明らかにする。	・伝統文化教育に関する三年間の学習計画表を完成する。

(1) 各教科等の授業実践

平成 29・30 年度の二年間で積み上げた授業実践を、教科のねらいや学校全体で育成する資質・能力①～③の観点で検討をすすめている。教科のねらいと、資質・能力①～③を育成することの両方を達成できる、よりよい実践を目指し、日本全国の学校でも活用できる実践事例の完成に向けて、試行錯誤を繰り返している。以下、今年度の授業実践の作成とその検討について、具体的に説明を加える。

校内での研究授業などを通して、各々の教科等の実践を共有し、その改善に向けて、意見交換をしている。授業者はあらかじめ、育成をねらう資質・能力を設定し、学習を経て達成したい姿を具体的にし、学習を通してねらった資質・能力の育成が達成できたのか否かを見取り、授業の改善に生かしている。また、それらの授業実践を学校全体で共有することで、教科等間の連携に生かすことができる。

今年度行われた三年生音楽の学習を例として、授業検討の説明とする。P23～24 は、令和元年 10 月に行われた三年生音楽の単元計画案・学習指導案である。歌唱の学習を通して、「資質・能力③文化の伝承・創造への主体性など」を育成することをねらっている。授業者はあらかじめ、本時の学習を通して、「資質・能力③文化の伝承・創造への主体性など」が育った生徒の姿として、例えば、ワークシートの記を具体的に想定するなどして、などの具体的なものを想定し、授業を組み立てた。授業の参観者は、学習を通して生徒がどのような変容したのかを、資質・能力①～③に着目して、見取る取り組みをした。p28 に校内での授業検討に関する各教員の記述をまとめた。

3年3組 音楽科 学習指導案			
令和元年10月18日（金）		6時間目	音楽室
		指導者 鏡千佳子	
1. 題材名	「心の歌」を歌い継ごう		
教材名	「花の街」 江間淳子/作詞 團伊玖磨/作曲		
	「花」 武部聡弥/作詞 滝廉太郎/作曲		
2. 題材「心の歌を歌い継ごう」について	本題材での「心の歌」とは、教科書に載っている共通教材のことを指している。2. 3年下（教育芸術社）に掲載されている「花」「花の街」はそれぞれにつくられた背景がある。戦後、平和への思いを乗せた「花の街」や、開国後、西洋の音楽の様式で日本初となる合唱曲をつくった滝廉太郎の「花」は、当時の社会的・歴史的背景とも大きく関わっている。ただ情景を想像して歌う、強弱に注意して歌う、という学習に留まらず、背景を関わらせながら、どのように歌いたいのか、なぜこうした曲が教科書に掲載され、中学生が歌い学ぶこととされているのかについても考え、これまで歌い継がれてきた貴重な日本の歌曲を、さらに未来へ繋いでいこうとする意識を高めたいと考えた。		
3. 生徒の学びの過程	3年生はこれまで、1年時に民謡、2年時には歌舞伎、3年時には能、そして3年間通して箏の演奏や創作を通して日本の音楽を学んできた。本校の生徒は新たな発見や知識を得ることに大変興味があり、普段の生活の中ではあまり耳にする機会のない音楽でも、どれも興味をもって取り組む姿が見られた。新たな知識を得ることでこれまでの学習とのつながりが感じられ、学ぶことの楽しさにつながっているように思う。しかし「心の歌」に対しては、ただ「キレイな歌」「優しい感じがする歌」というような印象に留まっている。「なんとなく聴いたことがある」「日本人として1曲くらいは歌えたらいい」「別に知らなくてもいい」というような思いを持つ生徒が少なくない。事前アンケートでは、「心の歌」を学校で学ぶ必要がある・どちらかといえば必要と答えた生徒は86.8%で、どちらかといえば必要ない・必要ないと答えた生徒は13.2%であった。比較的多くの生徒が学ぶ必要性を感じているが、義務教育最終年度となる本年、「心の歌」のつくられた背景を学び、先人たちの思いを知ること、「心の歌」をより豊かに歌いたいと思える生徒を育てたい。また、なぜ教科書に載っているのか、なぜ中学校でこのような歌を歌うのか、についても思慮深く考える機会とし、「心の歌」を歌い継ぐ心を育みたい。		
4. 学習指導要領との関連	ア 歌唱表現に関わる知識や技能を得たり生かしたりしながら、曲にふさわしい歌唱表現を創意工夫する。 イ（ア） 曲想と音楽の構造や歌詞の内容及び曲の背景との関わりを理解する。 ウ（ア） 創意工夫を生かした表現で歌うために必要な発声、言葉の発音、身体の使い方などの技能を身に付ける。 〔共通事項〕 本題材において主に扱う音楽を形づくっている要素…音色、旋律		

6. 本時の展開		関係・連携の考えられる教科等 社会・国語
学年	3 年	
授業内容		
曲に込められた思いを汲み取り、ふさわしい歌唱表現を考える。		
教科等で身に付けた力（本時について）	育成したい資質・能力 ③文化の伝承・創造への主体性など	
音色、旋律を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、歌詞の内容や曲想を味わって曲にふさわしい音楽表現を工夫し、どのように歌うかについて思いや意図を持つ。【音楽表現の創意工夫】 《新学習指導要領との関連》 ア 歌唱表現に関わる知識や技能を得たり生かしたりしながら、曲にふさわしい歌唱表現を創意工夫する。 イ（ア） 曲想と音楽の構造や歌詞の内容及び曲の背景との関わりを理解する。		
授業のポイント・流れ		
1. 「花」「花の街」を歌う。 ・前時を思い出し、難しい旋律やリズムに注意して歌う。 2. 曲に込められた思いを汲み取る。 ・前時のアンケートから様々な考えを紹介し、なぜ「心の歌」を歌うのかに迫る。 ・「花」の歌詞を読む。 ・リズムの違い「花」を聴き、春の美しい情景だけでなく、ワクワクした気持ちがリズムで表されていることをつかむ。 ・特徴的なリズムを感じながら歌う。 ・「花の街」の歌詞を読む。 ・前奏や歌の旋律からどんな印象を受けるか考える。 ・「花の街」のつくられた背景を知る。 ・「花の街」に決められた思いは何か、なぜ教科書に載っているのかについて考える。 3. これまでに学んだことを生かし、「花の街」をどのように歌いたいと考え、歌う。		

5. 題材計画（ 3 時間扱い、 本時 は 2 時間目）

次 時	○学習内容（ねらい）・学習活動	指導上の留意点・他教科等との連携	評価規準	育成する資質・能力
一 1	・小学校からの既習の共通教材を数曲歌う。 ○「花」「花の街」を歌う。 ・「花」の軽快なリズムや「花の街」の旋律の流れの美しさを感じて歌う。 ・作詞者、作曲者について学ぶ。 ・それぞれの曲の特徴をつかみ、歌う。	・学年ごとに1曲ずつ選び、スライドに歌詞を映す。 ・なぜ学校で「心の歌」を歌うのか、なぜ教科書に載っているのかという質問を投げかけ考えながら歌う学習をすることを伝える。 ・前奏だけを弾き、どのような感じの曲か、これからどのような歌詞が出てくるか想像するような流れにする。 ・「花の街」と「花」を比較し、旋律の流れの美しさやリズムの軽快さといった特徴をつかんで歌うようにする。	・「心の歌」の歌詞の内容や曲想に関心をもち、曲にふさわしい音楽表現を工夫して歌う学習に主体的に取り組もうとしている。 【音楽への関心・意欲・態度】 《新学習指導要領との関連》 - ア 歌唱表現に関わる知識や技能を得たり生かしたりしながら、曲にふさわしい歌唱表現を創意工夫する。	
2	○曲に込められた思いを汲み取る。 ・「花」の歌詞を読む。 ・リズムの違い「花」を聴き、ワクワクした気持ちがあるリズムで表されていることをつかむ。 ・特徴的なリズムを感じながら歌う。 ・「花の街」の歌詞を読む。 ・前奏や歌の旋律からどんな印象を受けるか考える。 ・「花の街」のつくられた背景を知る。 ・「花の街」に込められた思いは何か、なぜ教科書に載っているのかについて考える。 ・これまでに学んだことを生かし、「花の街」をどのように歌いたいと考え、歌う。	・前時のアンケートの内容から、なぜ教科書に載っているのだろうということから、課題に迫る。 ・総書きの歌詞をスクリーンに映し、情景の美しさを表していることをつかませる。 ・リズムを変えて歌い、リズムに着目させる。 ・「花」は情景の美しさとワクワクした気持ちが表されていることをおさえる。 ・戦時中の日本の様子も考えながら、「花の街」がどのような思いでつくられたのかを作者の言葉と共に紹介する。 【社会：3年】国語	・音色、旋律を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、歌詞の内容や曲想を味わって曲にふさわしい音楽表現を工夫し、どのように歌うかについて思いや意図を持っている。 【音楽表現の創意工夫】 《新学習指導要領との関連》 - ア 歌唱表現に関わる知識や技能を得たり生かしたりしながら、曲にふさわしい歌唱表現を創意工夫する。 - イ（ア） 曲想と音楽の構造や歌詞の内容及び曲の背景との関わりを理解する。	【③文化の伝承・創造への主体性】 ・「花の街」を、思いを持って歌おうとしている。
3	○「花の街」にふさわしい歌い方を考える。 ・自分が歌いたいように表現するには、どのように歌えばよいのかを考える。 ・「花」と「花の街」の休符に着目し、休符を生かした歌い方を工夫する。 ・歌詞や背景、旋律から「花の街」にふさわしい歌い方をグループで考え、歌う。	・前時のワークシートを配り、どのように歌いたいと思っていたか確認する。 ・「花」と「花の街」の休符の部分に手拍子を入れ歌ってみて、どのような感じがするか、休符の役割や意味について考え、歌い方の工夫につなげる。	・歌詞の内容や曲想を生かした、曲にふさわしい音楽表現をするために必要な技能を身に付けて歌っている。 【音楽表現の技能】 《新学習指導要領との関連》 - ア 歌唱表現に関わる知識や技能を得たり生かしたりしながら、曲にふさわしい歌唱表現を創意工夫する。 - ウ（ア） 創意工夫を生かした表現で歌うために必要な発声、言葉の発音、身体の使い方の技能を身に付ける。	

3年生音楽 校内研究授業 参観記録

「資質・能力③文化の伝承・創造への主体性など」について、生徒にどのような変化が見られましたか。	「資質・能力③文化の伝承・創造への主体性など」の育成について、この授業はどのように携わっていましたか。	その他
・時代背景を知り、歌詞を理解することで、歌唱の時の姿勢が良く（やわらかく）なったように感じた。	・指導案から読み取れなかったが、「軍歌」を流すだけでなく、軍歌の歌詞を映すことで、より深められていた。	BGMとして、授業の際に音楽を流すことはあったが、歌詞を見せることで、より深められるということがわかった。
・曲の背景という視点が加わったことで、曲の意義や考えが浮かんではなかったのが、そこに込められた思いを想像できるようになっていた。 ・歌い継がれる理由や思いに言及していたのが印象に残った。最後の合唱にも、歌い方の意図を感じた。	・遺されていたから価値があるのではなく、価値があるから遺されたきたものが伝統文化であることを認識できる取り組みだった。 ・生徒の感じた思いに合わせて、リズムや曲調を変えて表現していた演奏は、気付きを促す活動だった。	
・少し「工夫して歌ってみたいかな」と思ったように見えました。顔が上向きになっていた。	・生徒の気持ちの面で、伝承への主体性を促す授業だった。伝承・創造への主体性は、「すげえな」などの感情がもたれていると思います。	全体的に最後、歌い方がやわらかくなつたように思います。
・事前のアンケートでは、「心の歌」に対し、ネガティブな意見であったが、歌詞の時代背景や思いを知った後、生徒の口から「感動する」という言葉が出た。その時代の人の気持ちに触れ、ただの古い歌ではないことに気付くことができたのだと思う。最後は、その時代に思いをはせて歌っていたように感じた。	・歌詞や曲調だけでなく、歌が作られた時代背景や思いに触れたことで、伝承の必要性について主体的に考えることができていたと思う。	普段の授業では、1時間で生徒の変容を見取することは難しいことが多いが、今回の授業では、生徒がわかりやすく変わっていた。表現をさせる点で、他の教科の授業でもアプローチの仕方を工夫したい。
・「花」がワクワクした気持ちがりズムで表現されていると自分で発言した時の「ハッ」とした感。まさに発見だったのだと思います。これが伝承につながっていくのでしょう。		体育（ダンス）でも、同じような流れで、そのダンスの作られた背景などを踏まえ、ステップの意味などにも結び付けられたらいいと思います。

（２）学校全体のカリキュラムマネジメント

p 47～52 の学習計画表は、全ての教科等の学習計画のうち、伝統文化教育に関わる部分を色付けし、育成をねらう資質・能力を示したものである。この表を拠り所として、学校全体として、資質・能力①～③を育成に取り組んでいる。この表を用いることで、生徒がいつ、何をどのように学ぶのかということ全体を全ての教師が共通して把握することができる。そのことを踏まえて、各教科等間の連携を計画したり、育成をねらう資質・能力について、その分担を検討したりした。

例えば、二年生の 11 月の各教科の学習を見てみると、12 の教科等のうち、8 の教科等で伝統文化教育に関わった実践が行われており、資質・能力①～③のいずれかの育成を各々の教科等が担っている。また、実際の実践として、理科・体育・家庭科が連携して学習の単元・題材を構築している。

令和元年度末には、これらの実践によって、資質・能力①～③がどのように育成されたのかを、生徒のアンケート等で分析したいと考えている。同時に、資質・能力①～③の育成のためによりよい実践の形を精選し、発信したいと考えている。

（３）成果と課題

①成果

○学校全体として、伝統文化教育を通して育成したい資質・能力について設定をし、各教科等で実践を重ねることができた。平成 29～令和元年度の期間で、伝統文化に関わって、資質・能力の育成を目指す授業をのべ 100 時間以上の実践を持つことができた。

○伝統文化を柱として、教科等が連携して取り組むことのできる単元・題材を開発し、その精選を行うことができた。

先に挙げた実践のうちのほとんどが、他の教科等との連携を図ったものであった。

○開発したカリキュラムの実践において、生徒の資質・能力の育成につながる成果が見られた。生徒の資質・能力の変容を見取るために、令和元年 1 月に、全校生徒 446 名を対象にアンケートを行った。

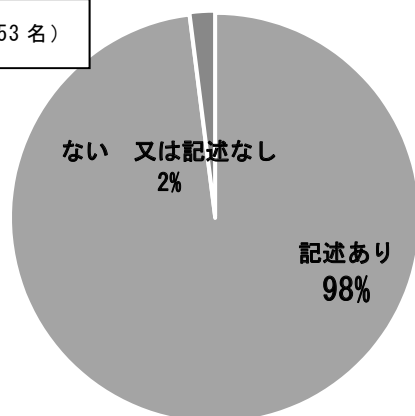
○昨年度からの課題であった、資質・能力の変容を、多様な視点から明らかにする評価方法についての検討を行った。研究授業において、参観者による生徒の行動観察を行ったり、授業者と参観者が共に授業評価・分析を行ったりした。

令和二年 1 月に、全校生徒にアンケートを行った。

記入の有無について

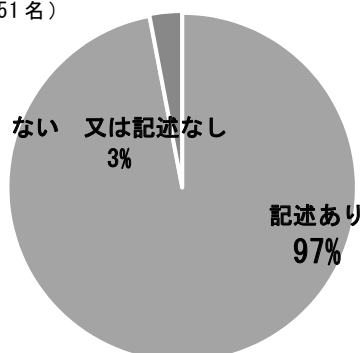
伝統文化に関する学習を行ったことで、どのような変化がありましたか。

全体（453 名）

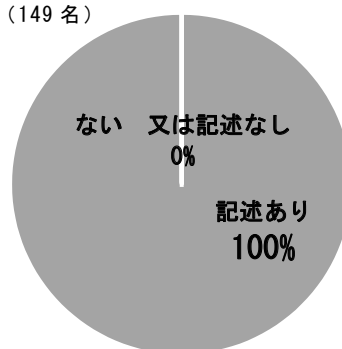


全校生徒 453 名に「伝統文化に関する学習を行ったことで、どのような変化がありましたか。」の問いでアンケートを行った結果、98%に当たる 444 名が何らかの記述をした。学年ごとに見ると、二年生は全ての生徒が何らかの変化についての記述があり、一年生の 4 名、三年生の 5 名が未記入または「なし」「わからない」と答えたものの、ほとんどの生徒が、伝統文化教育によって、何らかの変化があったと感じていることがわかる結果となった。

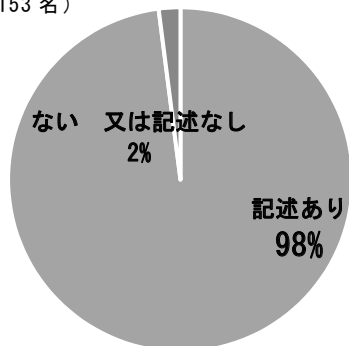
三年生（151 名）



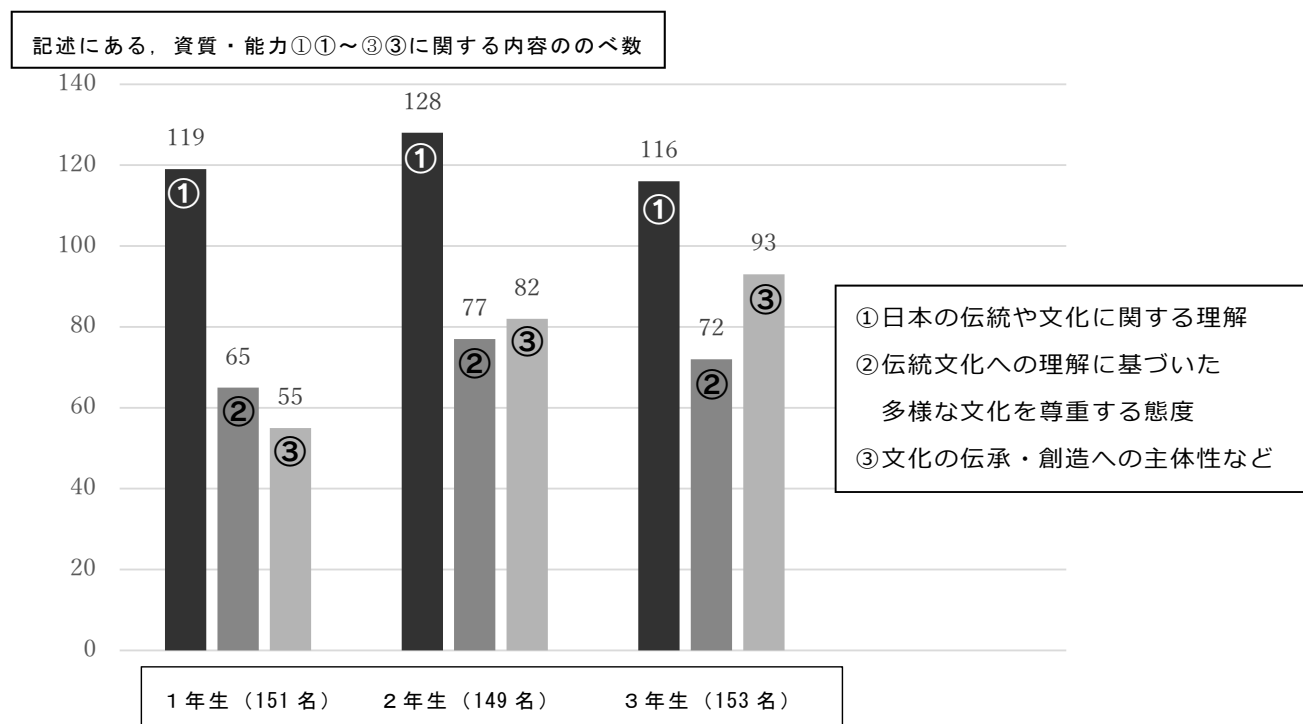
二年生（149 名）



一年生（153 名）



記述の内容について



昨年度との比較をするために、アンケートの内容・実施方法などは、昨年度と同様とした。資質・能力①～③が、各生徒の中で育まれているのかをアンケートの記述より見取り、学年ごとの記述数を示したのが、上のグラフである。以下に、記述の例を示す。

「① 日本の伝統や文化に関する理解」に関する記述

「② 伝統文化への理解に基づいた多様な文化を尊重する態度」に関する記述

「③ 文化の伝承・創造への主体性など」に関する記述

普段の生活の中で、伝統的なものと現代のもの、新しいものとも比べて物事を考えたり、ニュース等で報道されている伝統文化に関する内容に②興味をもつことが①多くなったように思う。

二年男子

・金沢には、沢山の伝統文化があるとわかった。^①
 ・伝統文化に詳しくなり、^③継承していきていと思、^②
 ・授業等で初めて知、た伝統文化などを、家族や
友達に話して。・外国人に^③伝統文化を教えて。
 ・金沢の伝統文化の体験に参加して。

二年女子

自分たちのところに
 こんな素晴らしい文化があるのなら、
^②他の国にも同じようにあるのかと
考えました。

1年男子

今まで伝統文化は古い物だなと思、ていたが、
 いろんな人が伝えてきたんだとか、こういう見方が
 あるのかと、③伝統文化に対する自分の見る目か、
変わったと思、います。
 ・②日本以外にも世界の伝統を知りたくなった。

1年男子

・①身近なものにも伝統文化が関係していること
が分かった。
 ・他の国の文化を知りたいと思うようになった。

1年女子

私はもっと他国の文化もして、お互いの理解
を深め合うことが大事だな、と思いました。もち
ろん自分の国の文化を知った上で、他国の人々
や、知らない人達に、自分の国の文化を発信
していくこともしたいと思いました。

1年女子

① 伝統文化に関して、なぜあのかいせきなんかが必要なのか
などを教科の学習を交えて考えることができる。

3年男子

その伝統文化に少し興味をもった。
② 伝統文化の継承について ちょい考えるようになった。
③ 能や狂言、歌舞伎を1回生で見たいと思った。

3年男子

覚えきれないほどたくさんの伝統文化が
世界にはあることがあった。
② それが消えないように、何いばしまいに
参加した。 ③

3年男子

「学校教育目標」と「令和元年度重点目標」に向けて

自由闊達な気風の中で、広い視野と豊かな人間性を持ち、将来、社会的使命を果たす生徒を育成する。

目指す生徒像

自ら考え学ぶ生徒 お互いに認め合い、助け合う生徒 心身ともにたくましい生徒

- ・ESD を基盤にしなが、各教科等の連携による体系的な伝統文化に関する実践研究のまとめを行う。
- ・生徒会活動・学級活動等の場面で生徒の自主的・主体的な取り組みを引き出す。
- ・学校教育学類、教職実践研究科との連携を推進しつつ、より一層充実した研究協力体制を目指す。
- ・校内の安全管理を徹底し、生徒が安心して活動できる環境づくりをより強化する。

豊かな人間性

自分を律しつつ、思いやりの心を持ち、よりよい人間関係を築いて共に生きて行こうとする態度で、将来に向けて自己実現を図っていく生徒。

- ・すべての教科等が連携して行う道徳教育の充実
- ・生徒会活動・学級活動・学校行事など生徒が主体となって行う活動
- ・地域や国内外の学校との交流

健康・体力

自他の安全に配慮し、心身の健康に対し主体的に関わる生徒。

- ・教育活動全体で行う安心・安全な環境の整備
- ・家庭や地域と連携した健康教育の推進
- ・教育相談の充実

資質・能力の育成

確かな学力

目指す子供の姿

グローバルな視点を持ち、他者と協働して問題を解決する姿。

●何ができるようにするか

○育成を目指す資質・能力

- 社会的使命を果たすことができる力
- 学んだことを社会生活のなかで活かすことができる力
- すべての学習の基盤となる汎用的な能力
- 現代的な諸問題に対処できる力

○**グローバル社会で生きるための資質・能力を育成する。**

●何が身に付いたか

○学習評価を通じた学習指導の改善

- 生徒自身が自らの学びを振り返る。
- 教育課程や学習・指導方法の評価と改善を行う。
- 多様な学習活動を対象とした、多面的・多角的な評価を行う。

子供の実態

学習全般に関する学習意欲は高いが、学んだことを他者と共有する力が弱い。

●何を学ぶか

○教育課程の編成

- 各教科等の枠組みを踏まえた学習内容を学ぶ。
- 伝統文化を題材として、各教科等を横断して学ぶことのできる教育課程を編成する。

●どのように学ぶか

○教育課程の実施

- 3年間で身に付ける資質・能力を明確にして学ぶ。
- 単元や題材を見通した学びの工夫をする。
- 伝統文化を通して、社会とつながる課題を設定する。

実施するために何が必要か

- ・校内研究会の充実
- ・国立教育政策研究所をはじめとした研究機関等との協力
- ・金沢大学との研究協力
- ・地域や家庭、海外提携校との連携・協働

子供の発達をどのように支援するか

○配慮を必要とする子供への指導

- 全職員の協働的な関与と支援
- 附属特別支援学校や金沢大学教員の協力
- 附属学校園との情報共有や連携
- 外部の専門機関との連携

安心・安全を守る

- ・いじめ防止基本方針の策定
- ・避難訓練などの実施と工夫改善
- ・計画的な安全計画
- ・各種講習会などにおける外部団体の協力
- ・保護者や外部の人材を活用した安全対策の充実

開かれた学校づくり

- ・オープンスクールや懇談会などを活用した、地域・家庭との連携
- ・学校教育学類、教職大学院との協働
- ・学校公開、学校説明会の充実
- ・学校評議会
- ・金沢大学（附属学校園運営委員会や学類教員など）との連携
- ・研究成果の国内諸学校、教員への提供

目指す子供の姿

- ・言葉がもつ価値を認識することで、多様な見方・考え方ができ、協同して課題を解決する生徒。

●何ができるようになるか

○各教科等で育成する資質・能力

- 言葉によって自分の考えを形成し、交流することができる力。
- 場面や状況に応じて、適切な言葉を選んで表現することができる力。
- 歴史や生活の中で継承されてきた言語の能力を向上させていこうとする姿勢。

●何が身に付いたか

○各教科等の学習評価

- 評価のさらなる充実を図り、生徒が学んでいくうえでの見通しを持てるように工夫する。
- 相互評価、自己評価を活用し、自らの学びを振り返るようにする。

子供の実態

- ・伝え合う力はあるが、多様な見方・考え方が苦手な傾向にあり、共有し深化させる面で課題が残る。

●何を学ぶか

○各教科等の教育課程の編成

- 言語文化や古典を題材とし、学年を追って自国の伝統文化に対する考えを深化させ、発信することができるよう学習する。
- ものの見方や考え方に触れ、他者と自分の考えを比べることで、より広い視野を持って自分の意見を形成できるよう学習する。
- 各教科等とのつながりを踏まえたカリキュラムを編成する。

●どのように学ぶか

○教育課程の実施

- 文章を読んで理解したことや考えたことについて、考えを伝えあったり、文章にまとめたりすることで自分の考えを広げ、深める。
- 言語活動の取組を通して、伝統文化に対する関心を深め、自らの考えを発信していく学習を実施する。

目指す子供の姿

- ・社会的事象を多面的・多角的に捉え、自らの視点を持つことができる。
- ・社会科での学びを生かし、新たな価値を創り出すことができる。

●何ができるようになるか

○各教科等で育成する資質・能力

- 広い視野に立って、社会に対する関心を高め、諸資料に基づいて多面的・多角的に考察する力。
- 我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を深め、公民としての基礎的教養。
- 国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質。

●何が身に付いたか

○各教科等の学習評価

- 評価のさらなる充実を図り、生徒が学んでいくうえでの見通しを持てるように工夫する。
- 相互評価、自己評価を活用し、自らの学びを振り返るようにする。

子供の実態

- ・多くの社会的事象をおおまかに整理し、他者と共有しながらつかむことが苦手。
- ・話し合い活動やレポートに意欲的に取り組むことができる。

●何を学ぶか

○各教科等の教育課程の編成

- 伝統文化を学ぶことを通して、「地理的要因」や「時間軸で歴史的事象」を捉え、これからの社会づくりにつなげることを学習する。
- 各教科等とのつながりをふまえたカリキュラムを編成する。

●どのように学ぶか

○教育課程の実施

- 自分の言葉でまとめたり、説明したりする活動を多く実施する。
- ペア学習やグループ学習を取り入れ、話し合い活動を多く実施する。

目指す子供の姿

- ・数学を発展させたり他の伝統文化に活用したりすることができる子供

何ができるようになるか

○各教科等で育成する資質・能力

- 数量や図形などについての基礎的な概念や原理・法則などを理解するとともに、事象を数学化したり、数学的に解釈したり、数学的に表現・処理したりする技能を身に付けるようにする。
- 数学を活用して事象を論理的に考察する力、数量や図形などの性質を見だし統合的・発展的に考察する力、数学的な表現を用いて事象を簡潔・明瞭・的確に表現する力を養う。
- 数学的活動の楽しさや数学のよさを実感して粘り強く考え、数学を生活や学習に生かそうとする態度、問題解決の過程を振り返って評価・改善しようとする態度を養う。

何が身に付いたか

○各教科等の学習評価

- 和算をはじめ日本の伝統や文化に対する知識及び理解
- 数学に関する伝統文化への理解に基づいた多様な文化を尊重する態度
- 数学という文化や他の文化の伝承・継承への主体性

子供の実態

- ・数量や図形などについての知識及び技能を習得している生徒は多い。
- ・知識及び技能を発展させたり活用したりすることができない生徒がいる。

何を学ぶか

○各教科等の教育課程の編成

- 日常の事象や社会の事象を数理的に捉え、数学的に表現したり、問題を解決したり、問題解決の過程や結果を振り返って考察したりすることを学ぶ。
- 数学の事象から問題を見だし解決したり、統合的・発展的に考察したりすることを学ぶ。
- 数学的な表現を用いて論理的に説明し伝え合うことを学ぶ。
- 数学が活用される伝統文化や科学技術を視座として、他教科等とのつながりを踏まえたカリキュラムを編成する。

どのように学ぶか

○教育課程の実施

- 伝統文化や科学技術に関する事象を含む日常の事象や社会の事象を数学化したり、問題解決の過程や結果を解釈したりする活動を通して学ぶ。
- 数学の事象から見通しをもって問題を設定したり、解決の過程や結果を振り返って統合的・発展的に考察したりする活動を通して学ぶ。
- 数学科における授業実践と他教科等における授業実践を連携してデザイン、実施、分析する。

目指す子供の姿

- ・理科での学びを活かし、主体的に自己改善することができる。

●何ができるようになるか

○各教科等で育成する資質・能力

- 自然の事物・現象を質的・量的な関係や時間的、空間的な関係などの科学的な視点で捉えることができる力。
- 身近な題材を科学的な視点でとらえ、説明することができる力。
- 自然事象に対する知識や技能を活用する力。

●何が身に付いたか

○各教科等の学習評価

- 身近な現象を科学的な視点で考察する。
- 自己評価を活用し、自らの学びを振り返るようにする。

子供の実態

- ・理科的な知識は豊富なものの、実生活との結びつきが弱い。

●何を学ぶか

○各教科等の教育課程の編成

- 身近な題材や伝統文化とのつながりを図り、日常生活の中で活用する力を育む。
- 各教科等とのつながりをふまえたカリキュラムを編成する。

●どのように学ぶか

○教育課程の実施

- 身近な事象を科学的な視点で考察する。
- 学習内容に伝統文化との関わりをもたせることで、理科的な興味・関心を高める学習を行う。

目指す子供の姿

- ・音や音楽を実生活と結びつけて考えることのできる生徒
- ・多様な音楽を尊重できる生徒

●何ができるようになるか

○各教科等で育成する資質・能力

- 生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力
- 曲想と音楽の構造や背景などとの関わり及び音楽の多様性について理解するとともに、創意工夫を生かした音楽表現をするために必要な技能
- 音楽表現を創意工夫することや、音楽のよさや美しさを味わって聴くことができる力
- 音楽活動の楽しさを体験することを通して、音楽を愛好する心情を育むとともに、音楽に対する感性を豊かにし、音楽に親しんでいく態度を養い、豊かな情操を培う。

●何が身に付いたか

○各教科等の学習評価

- 知識及び技能
- 思考力・判断力・表現力等
- 主体的に学習に取り組む態度

子供の实態

- ・音楽に対する関心が高い
- ・新たな知識を得て課題を解決することに意欲的
- ・自らつくり出すことに消極的

●何を学ぶか

○各教科等の教育課程の編成

- 3年間を通して、A 表現（歌唱、器楽、創作）B 鑑賞〔共通事項〕において示された内容を学ぶ。

●どのように学ぶか

○教育課程の実施

- 音楽に対する感性を働かせながら、表したい音楽表現を見いだす見通しをもって協働的に学習する。
- 比較したり関連付けたりして、要素の働きや音楽の特徴について他者と共有・共感したりして学習する。
- 生徒が見方・考え方を働かせることができるようにすることによって、音楽科の本質に迫る学習の実現を図る。

目指す子供の姿

- ・豊かな感性や情操を基盤に、美術を愛好する心情を持った生活を送ることができる。
- ・自分自身の能力・経験をもとに、課題に対する最適解を考えられる。

●何ができるようになるか

○各教科等で育成する資質・能力

- 美術に関わる基礎的・基本的な知識・技能を習得し、表現活動や鑑賞活動にそれを活用する力。
- 豊かに発想・構想する力。
- 身の周りの美しい事象に気づく感性と、それを愛好する心情。
- 素材、色、形、大きさ、構成などの造形要素のよさを感じ取る感性。
- 自国や郷土の伝統や文化を尊重、伝承し、新たな文化を創造しようとする態度と、他国の歴史や、異なる伝統や文化に対する敬意の態度。

●何が身に付いたか

○各教科等の学習評価

- 美術に関わる基礎的・基本的な知識・技能を習得する。
- 豊かな発想・構想で独自の考えを持つことができる。
- 身の周りの美しい事象に気づき、それを愛好する。
- 素材、色、形、大きさ、構成などの造形要素のよさを感じ取る。
- 自国や郷土の伝統や文化を尊重、伝承し、他国の歴史や、異なる伝統や文化に対しても敬意の態度を持つ。

子供の実態

- ・時代や多勢の流行に対する関心は高いが、自らの価値観で美しさを感じ、自己表現することが苦手。
- ・よりよいものを求める意欲は高いが、簡単に早く結果を出す方法を求め、試行錯誤することが苦手。

●何を学ぶか

○各教科等の教育課程の編成

- さまざまな事象の美しさに素直に感動する感性を学ぶ。
- 自分自身の考えや価値観をしっかり持つと同時に、異なる考え方や表現のよさを受け止めようとする姿勢を学ぶ。
- 美術の基礎的・基本的な知識・技能を学ぶ。
- 自分自身の感性を基にした発想・構想を学ぶ。
- 基礎的・基本的な知識・技能を活用して、自分の考えや意図を具体化する表現を学ぶ。

●どのように学ぶか

○教育課程の実施

- 表現活動においては、絵画、彫刻、デザイン、工芸等、幅広い領域を体系的、発展的に学習する。
- 自身の意図を視覚化する表現活動と、他者の意図やよさを理解しようとする鑑賞活動を柱とした学習。
- 実際の生活や現代社会の様相、さらに伝統文化を踏まえた学習の計画と実践を行う。

目指す子供の姿

- ・生涯を通して親しめる運動をみつけ、する・見る・支える・知るなどの多様な関わり方ができる。
- ・自分の考えを他者に伝え、相手の意見を認め、よりよい課題解決につなげることができる。
- ・自己の生活への関心を持ち、健康・安全への意識を高め、生涯を通じて心身の健康が保持増進できる。

●何ができるようになるか

○各教科等で育成する資質・能力

<体育分野>

- 運動の楽しさや喜び、最善を尽くす態度や生涯にわたって実践するための基本的な技能。
- 自他の課題を発見し、課題解決に向けて考えたことを他者と共有する力。

<保健分野>

- 心身の健康の保持増進を目指し、課題の発見や、その解決についての考えを、他者と共有する力。

●何が身に付いたか

○各教科等の学習評価

<体育分野>

- 運動を通して、その特性や魅力に応じた楽しさや喜びを味わう。
- 自他の課題を発見し、その合理的な解決に向けて考えたことを他者と共有する。

<保健分野>

- 自他の健康に関心を持ち、生涯を通じて健康の保持増進を目指す実践力の基礎を育てる。

子供の実態

- ・運動に親しむ意欲、時間の二極化。
- ・運動は“するもの”という認識であり、見たり、支えたりすることが苦手。
- ・知的好奇心が高いが、自己の生活への関心は低く、考えたり、まとめたり、他者と共有したりするのが苦手。意欲の二極化。

●何を学ぶか

○各教科等の教育課程の編成

<体育分野>

- 運動の行い方や楽しさ、喜びを味わい、基本的な技能と最善を尽くす態度を学習する。
- 運動についての自己の課題等を発見し、合理的な解決に向けて思考・判断し、他者と共有できるように学習する。

<保健分野>

- 自他の健康に関心を持ち、課題へのよりよい解決方法を考え、他者と共有できるように学習する。

●どのように学ぶか

○教育課程の実施

<体育分野>

- その競技について正しく理解させ、ゲーム等の活動を生徒主導で行えるようにする。
- ペア・グループ活動を通して、自分の考えを仲間に伝える機会を増やす。
- 競技をするだけでなく、見る・支えるなど、運動には様々な関わり方があることを伝える。

<保健分野>

- 自身の生活を振り返り、課題や解決方法をペア・グループ活動を通して仲間と共有し、将来へつなげられるようにする。

目指す子供の姿

- ・ 情報モラルに関するトラブルを未然に防ぐことができる。
- ・ 伝統技術を理解し、尊重することができる。
- ・ 複数の視点で物事を考えることができる。
- ・ 物事の本質を考えることができる。

など

●何ができるようになるか

○各教科等で育成する資質・能力

- 生活や社会の中から技術に関わる問題を見いだして課題を解決する力。
- よりよい生活の実現や持続可能な社会の構築に向けて、適切かつ誠実に技術を工夫し創造しようとする実践的な態度。
- 将来的に科学技術革新を生じさせることの素地である創造力。
- 我が国の伝統や文化に関する知識を習得し、自分とは異なる文化や歴史に立脚する人々と共存しようとする態度。

●何が身に付いたか

○各教科等の学習評価

- テスト
知識や技能の習得状況を評価する。
- 感想文
カリキュラムや授業実践を受けた生徒の意識を評価する。
- レポート
「なぜそのように考えたのか」などの生徒の思考を評価する。

子供の実態

- ・ 情報モラルが身に付いていない。
- ・ 伝統技術に触れる機会が少ない。
- ・ 知識の応用が苦手。(理, 数の活用)
- ・ 他者と情報を共有する力が不十分。
- ・ 批判的思考が不十分。
- ・ 学習意欲が高い。

など

●何を学ぶか

○各教科等の教育課程の編成

- 「材料と加工の技術」
- 「生物育成の技術」
- 「エネルギー変換の技術」
- 「情報の技術」

- 四つの内容を通して、それぞれの技術の原理・法則や技能、技術と生活や社会、環境との関わりなどを学習する。

●どのように学ぶか

○教育課程の実施

- Project Based Learning
プロジェクトを設定した、問題解決学習。
- 教科横断な学習
理科や社会科、数学科などに関わる題材の予習・復習・活用となる学習。
- 日本の伝統文化を意識した授業実践
日本の伝統的な技術を取り上げ、緻密なモノづくりの技が日本や世界に与えた影響について考えさせる学習。

目指す子供の姿

- ・学んだことを家庭や社会で生かすことができる。
- ・持続可能な社会の形成者としての意識を持てる。

●何ができるようになるか

○各教科等で育成する資質・能力

- 学んだことを生活で活かすことができる力
- 課題を見つけ、解決法を考えられる力
- よりよい社会をつくろうとする態度

●何が身に付いたか

○各教科等の学習評価

- 生活に関する基礎的な内容に関する知識や技能
- 知識と技能を活用して生活を工夫する力
- より良い生活をつくっていかようとする態度

子供の実態

- ・学習への関心・意欲は高く、知識も多い。
- ・学んだことを生活で活かす力が弱い。

●何を学ぶか

○各教科等の教育課程の編成

- 生活の中にある伝統文化を重視した題材を編成し、年間指導計画の工夫を図る。
- 「生活文化の継承」の視点を重視する。
- 「家族・家庭」「衣食住」「消費・環境」に関する学習内容に伝統文化に関する学習を取り入れる。

●どのように学ぶか

○教育課程の実施

- 一人一人の生活が、継承されてきた文化の上に立脚していることを踏まえて、学ぶ。
- 教科の学習と生徒の生活との結びつきが図れるように題材の工夫を行う。

目指す子供の姿

グローバルな視点を持ち，社会的な話題について，英語で他者と意見を述べ合ったり，解決策を提案したりできる生徒。

●何ができるようになるか

○各教科等で育成する資質・能力

- 英語の音声や語彙，表現，文法，言語の働きなどを理解し，これらを，実際のコミュニケーションにおいて活用できる力。
- コミュニケーションを行う目的や場面などに応じて，日常的，社会的な話題について，英語で情報や考えなどを理解し，表現したり伝え合ったりすることができる力。
- 英語の背景にある文化に対する理解を深め，相手に配慮しながら，主体的に英語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度。

●何が身に付いたか

○各教科等の学習評価

- 単元テスト
(知識及び技能)
- パフォーマンステスト，レポート，ワークシート
(思考力，判断力，表現力)
- 自己評価，振り返りシート
(主体的に学習に取り組む態度)

子供の実態

- ・英語に対する学習意欲は高い。
- ・相手を意識し，多様な表現で深く考え，伝え合うことが苦手。

●何を学ぶか

○各教科等の教育課程の編成

- 日本や世界の人々の日常生活，風俗習慣，物語，地理，歴史，伝統文化，自然科学などに関するものの中から，学年に応じ，生徒の興味・関心に即して適切な題材を効果的に取り上げる。

●どのように学ぶか

○教育課程の実施

- 聞くことの力や表現力を高めるために，基礎英語を聞く。
- 話すこと（やりとり・発表）のパフォーマンステストを定期的に行う。
- 3学年共通帯学習（BINGO，即興対話活動）を行う。

目指す子供の姿

- ・心の健康を保ち生活することができる。
- ・自他尊重のコミュニケーション能力を身につけ、よりよい人間関係を築くことができる。

●何ができるようになるか

○各教科等で育成する資質・能力

- 他者の気持ちを考えて自己の気持ちを表現できる力。
- 他者への想いを大切にしてきた日本の伝統文化を尊重する態度。

●何が身に付いたか

○各教科等の学習評価

- 非言語コミュニケーションに関する知識。
- 他者の気持ちを考えながら、思いやりのある言動について判断することができる。

子供の实態

- ・対人関係のトラブル等，精神面で課題を抱えている生徒が多い。
- ・問題解決の方法を自ら考え，対処していくことが困難な状況がある。

●何を学ぶか

○各教科等の教育課程の編成

- 「和菓子」を題材として，他者の気持ちを考えて自己の気持ちを行動で表現する方法を学ぶ。
- 各教科等とのつながりを踏まえたカリキュラムを編成する。

●どのように学ぶか

○教育課程の実施

- 「和菓子」に精通している専門家のインタビューを取り入れて，伝統文化の理解を深める。
- グループ活動を実施し，友達の考えと自分の考えを比較し，いろいろな考え方があることを知る。

目指す子供の姿

自由闊達な気風の中で、広い視野と豊かな人間性を持ち、将来、社会的使命を果たす生徒。

●何ができるようになるか

○各教科等で育成する資質・能力

〈道徳教育の重点目標〉

- 自分を律しつつ、自分に関わる人の思いに気づき、思いやりの心を持ち、他者との相互理解を図りながら、よりよい人間関係を築いて共に生きていこうとする態度を育てる。

●何が身に付いたか

○各教科等の学習評価

- ・自ら考え学ぶ態度
- ・お互いに認め合い、助け合う態度
- ・心身ともにたくましい姿
- 生徒がワークシートで1時間ごとの授業を振り返る。
- 教師が生徒の授業の様子を見取る。

子供の実態

- ・何ごとにも真面目に取り組み、自分で考えて行動できるが、周りを見て合わせて行動することができないところがある。

●何を学ぶか

○各教科等の教育課程の編成

〈各学年の重点目標〉

〔1年生〕

- ・自己を見つめ、自己の向上を図るとともに、個性を伸ばして充実した生き方を追求する。
- ・思いやりの心をもって人と接し、相手の立場や気持ちを考え、感謝の気持ちを持つ。
- ・より高い目標を立て、困難や失敗を乗り越えて着実にやり遂げる強い意志を持つ。

〔2年生〕

- ・集団の一員として、役割と責任を自覚し、自己の向上を図るとともに、集団生活の向上に努める。
- ・それぞれの個性や立場を尊重し、お互いを認め、寛容の心を持ち、謙虚に他に学ぶ。
- ・より高い目標を目指し、着実にやり抜く強い意志を持つ。

〔3年生〕

- ・思いやりの心を持って、相手の立場に立って、お互いのよさを認め、励まし合い、高めあう。
- ・より高い目標に向かってねばり強く取り組み、理想の実現を目指す。
- ・自分が決めた目標をめざし、自分を見つめ、自己の向上を図る。

〔全学年〕

- ・郷土の伝統と文化を大切に、社会に尽くした先人や高齢者に尊敬の尊敬の念を深め、地域社会の一員としての自覚を持って郷土を愛し、進んで郷土の発展に努める。
- ・優れた伝統の継承と新しい文化の創造に貢献するとともに、日本人としての自覚をもって国を愛し、国家及び社会の形成者として、その発展に努める。

●どのように学ぶか

○教育課程の実施

- 生徒がねらいとする道徳的価値を自分の課題として受け止め、豊かにいきいきと表現して、よりよく生きようとする意欲を自ら育もうとする道徳の時間をめざす。
- 特別活動や各教科等、学校教育活動全体で連携して取り組む。
- 家庭や地域との連携をオープンスクールやお便り等で行っていく。
- 豊かな体験活動の場を充実する。
- 生徒の豊かな心を育て、道徳的実践意欲を高めるような環境づくりをする。

各教科等のグランドデザイン

総合

目指す子供の姿

- ・自分が調べたことや各教科等の学習内容など、様々な情報をつなげ、地域や社会をよりよくする提言ができる。
- ・自己のキャリア形成に関わって、自分が社会の一員としてどのように特性を発揮していくか、見通しをもつことができる。

何ができるようになるか

○各教科等で育成する資質・能力

- 情報を収集し、必要な情報を取捨選択し、主体的に自分の考えをまとめ、情報を発信することができる力。
- 自分の将来をみつめるために、職業について主体的に調べたり考えたりすることができる力。
- 自分の興味・関心に基づいて課題を見つけ、その課題について主体的に調べたり、考えたりすることができる力。

何が身に付いたか

○各教科等の学習評価

- 正しくより良く分かりやすく、自分の考えを発信できたかを振り返る。
- 将来を見通して、現在の自分を振り返って、今、自分にできることを考える。
- 差別や偏見のない職業観と、働くことの意義や大切さを含んだ勤労観、社会や地域の一員としての自覚や責任感がどの程度身についているか評価する。

子供の実態

- ・情報の取り扱いについて、一部正しい知識の不足がみられる。
- ・自己決定力が弱い生徒が見られる。
- ・現状から課題を見だし、自分なりの解決策を考えることはできるが、それを分かりやすく伝えることが苦手な生徒もいる。

何を学ぶか

○各教科等の教育課程の編成

- 情報の取り扱いについての科学的理解と、情報を取り扱う際のルールやマナー、必要な情報を取捨選択する基準や方法を学ぶ。
- 自分の考えをまとめる手順と、情報を発信する方法を学ぶ。
- 職業に対する幅広い知識を身に付け、それぞれの職業に就いている人が持つ勤労観や職業観に触れる。
- 金沢や自分が住む地域が持つ特性や課題を踏まえ、自分の考えをまとめる際の根拠の示し方を学ぶ。

どのように学ぶか

○教育課程の実施

- 「附中事典をつくろう」などの調べたことをまとめるレポートの作成を通して、PCの基本的操作と、情報の取り扱いについてのルールやマナーを学ぶ。
- 附中検定の作成とそのプレゼン活動などにおいて、モデルファイルをもとにすることで、自分の考えをまとめ、発信する手順と方法を学ぶ。
- 職業人講話や職業体験を通して、身近な大人から、職業に対する考え方と、勤労観などを学ぶ。
- 教員がある程度まとめた金沢の特性や課題をもとに、自分でも金沢や自分が住んでいる地域の課題を見いだす。
- 提案書のテンプレートに従って、自分の考えを整理し、教員と話をしながら根拠を明確にしていく。また、様々な教科等からもまとめ方についてのアプローチを行う。

1 年																								
	4 月		5 月		6 月		7 月		8 月		9 月		1 0 月		1 1 月		1 2 月		1 月		2 月		3 月	
国語	言葉に出会うために	5	1 学びをひらく	12	2 新しい視点へ	16	3 言葉をつなぐ	7			4 つながりの中で	15	4 つながりの中で	7	6 視点を捉えて	11	6 視点を捉えて	8	7 自分を見つめて	11	7 自分を見つめて	8	7 自分を見つめて	8
			「花曇りの向こう」				「空を見上げて」						5 いにしへの心に触れる	8			読書に親しむ	1						
	楷書で書こう	2	楷書で書こう	2	楷書で書こう	2	読書生活を豊かに	3			行書で書こう	2	行書で書こう	2	行書で書こう	2	行書で書こう	4	生活に生かそう	2				
社会	1 章 世界の姿	9	2 章 世界各地の人々の生活と環境	11 ②	1 章 歴史の流れをとらえよう	6	②日本列島の誕生と大陸との交流	4			③古代国家の歩みと東アジア世界	10 ①③	3 章 世界の諸地域		③アフリカ州	5	⑤南アメリカ州	5 ②	⑥オセアニア州	5 ②	3 章 中世の日本		②東アジア世界との関わりと社会の変動	7 ①③
					2 章 古代までの日本						古代のまとめ	2 ①③	①アジア州	8	④北アメリカ州	6			4 章 世界のさまざまな地域の調査	6 ②③	①武士の台頭と鎌倉幕府	6 ①③	中世のまとめ	1 ①③
					①世界の古代文明と宗教のおこり	7 ②							②ヨーロッパ州	7 ②										
数学	第 1 章「正負の数」		乗法と除法	10	第 2 章「文字と式」						1 次方程式の利用	12	第 4 章「比例と反比例」		反比例	7	基本の作図	7	第 6 章「空間図形」					
	正負の数	4			文字を使った式	6	第 3 章「方程式」						関数	4	第 5 章「平面図形」				いろいろな立体	4	立体の体積と表面積	7	資料の分析	8
	加法と減法	8			文字式の計算	6	方程式とその解き方	8					比例	7 ③	図形の移動	6	おうぎ形	3	立体の見方と調べ方	11	比例と反比例の利用	2 ③	資料の活用	6 ①
			正負の数の利用	4 ①	文字式の利用	8 ①													第 7 章「資料の分析と活用」			近似値と有効数字	2	
理科	花のつくりとはたらき	7	水や栄養分を運ぶしくみ	6 ①	栄養分をつくるしくみ	2	光による現象	6			音による現象	6	力による現象	6	いろいろな物質とその性質	4	水溶液の性質	6	物質のすがたとその変化	4 ①	大地が火をふく	6	大地はかたる	4
			栄養分をつくるしくみ	6	植物のなかま分け	4					力による現象	6	いろいろな物質とその性質	6	いろいろな気体とその性質	8	物質のすがたとその変化	4	大地がゆれる	6 ①③	大地はかたる	4		
					光による現象	4																		
音楽	校歌	2	混声合唱	4	混声合唱	4	ジョーズのテーマ	2			アルトリコーダー	5	赤とんぼ・浜辺の歌	3 ①	日本の民謡	3 ①③	創作	4	箏	5 ①	卒業式の歌	4	春	3
	変声期	1					惑星	2					魔王	3										
美術	オリエンテーション	3	レタリング表札（下書き）	4	色の学習（三属性）	2	レタリング表札色塗り	4			テラコッタ（魔除け像）	4	鉛筆の表現（大人に…）	5 ①②	鉛筆の表現（大人に…）	4 ①②	鉛筆の表現（大人に…）	2 ①②	切り紙（ファイル背帯）	4	切り紙（ファイル背帯）	2	グラフィティ（名前シール）	3 ②
	手本転写の知識・技能	1			レタリング表札色塗り	2									落ち葉のスケッチ	1 ①	映像鑑賞	2			グラフィティ（名前シール）	2 ②		
保健 体育	体づくり運動（体力テスト）	4	体づくり運動（体力テスト）	4	男：サッカー、女：バレー	8	プール（クロール）	9			男：マット、女：ハードル	10	男：ハードル、女：マット	6	男：ハードル、女：マット	4	男：ダンス、女：柔道	4 ①②③	男：ダンス、女：柔道	6 ①②③	男：バドミントン、女：卓球	8	男：バドミントン、女：卓球	4
	共通：体育理論	2	男：サッカー、女：バレー	4	共通：バレー	4					保健：心身の発達と心の健康	4	保健：心身の発達と心の健康	3	男：ダンス、女：柔道	4 ①②③	保健：健康と環境	2	共通：バスケットボール	3	共通：バスケットボール	4	共通：バスケットボール	2
			共通：バレー	1											保健：健康と環境	4								
技術	ガイダンス	3 ③	コンピュータの構成	2	情報通信ネットワーク	2	情報モラル	3 ③			情報セキュリティ	1	等角図	1	のこぎりの仕組み	2 ①	のこぎりを用いた加工	3 ①	ボール盤を用いた加工	1	仕上げ（鉋の使用）	1 ①	設計	2
											材料の特性	2 ①	第三角方	1	罫書きの方法	2 ①			やすりを用いた仕上げ	1	デザインについて	2	まとめ	1
家庭	ガイダンス	1	食事の役割	2 ①	食品群別摂取量の目安	2	食品の保存	2 ②	食生活の点検	1	衣服のはたらき	1	衣服の表示	2	布の観察	1	郷土の料理	3 ①	郷土の料理	2 ②	住居の機能	2 ①②	地域に配慮した住まい方	3 ①③
			食品と栄養素	2	一日分の献立	2 ①	食品の表示	2			衣服の構成	1 ①	布の構成	2	布を用いた製作	2			行事食	1 ①③	災害への備え	1		
											洋服と和服	2 ②												
英語	Let's Start	3	アメリカからの転校生	4	アクションタイム、曜日の言い方	3	英語の掲示・標識など	2	由紀のイギリス旅行	7 ②	The Wonderful Ocean	7	Origami	7	A New Year's Visit	8 ②③	Mike's Visit to Washington, D.C.	8	Grandma Baba and Her Friends on a Sleigh	6 ②③	日記①	4	まとめ	4
	アルファベット	4	単語・文の書き方、数字の言い方	2	転校生への質問	3	国際フードフェスティバル	8 ②	月の名前と順番を表す言い方	2	持ち主をたずねる	2	依頼する・許可を求める	2	想像しながら読んでみよう	2	買い物①	3			英語のしくみ④	2		
	Classroom English	3	ウッド先生がやってきた	5	リサイクル活動	8 ②	時刻をたずねる	2			ラジオ放送	2	仮装パーティー	2	英語のしくみ③	2	知りたい情報を引き出そう	6						
総合 的な 学習	オリエンテーション	2	附属中の探究	4 ①③	附属中の探究	4 ①③	附属中の探究	2 ①③			シルエット劇	4 ①③	シルエット劇	13 ①③	附中検定	4 ①③	附中検定	3 ①③	キャリア学習	4	キャリア学習	4	キャリア学習	4
							シルエット劇	1 ①③									キャリア学習	1						
道徳	2「朝市の『おはようございます』」	1	4「自分の性格が大嫌い！」	1	20「席替え」	1	合唱コンクールに向けて	1			1「全てがリオでかみ合った」	1	私の四面鏡	1	7「ぼくのふるさと」	1 ③	21「その人が本当に望んでいること」	1	22「『看護する』仕事」	1	26「日本から来たおばさん」	1	27「花に寄せて」	1
	拓哉のなやみ	1	5「いじめに当たるのはどれだろう」	1	アクション	1	スマートフォンの危険性	1			11「短文投稿サイトに友達の名刺を置く」と	1			23「郷土を彫る」	1 ③	③「思いやりの日々」	1	10「新しいブライド」	1	28「落語が教えてくれること」	1	29「桜に集う人の思い」	1
			6「傍観者でいいのか」	1	25「全校一を目指して」	1					15「班での出来事」	1			30「古郡の鵜、菓子の心」	1 ③	13「古郡の鵜、菓子の心」	1	18「ごみ箱をもっと増やして」	1	8「楽寿号に乗って」	1	19「『どうせ無理』という言葉に負けない」	1
		「ふたつの心」	1	9「山に来る資格がない」	1					16「本が泣いています」	1			石川県の方言	1 ③	14「母はおしいれ」	1			24「火の鳥」	1			

2 年																																				
	4 月			5 月			6 月			7 月			8 月			9 月			1 0 月			1 1 月			1 2 月			1 月			2 月			3 月		
国語	1 広がる学びへ	12		1 広がる学びへ	11		2 多様な視点から	15		3 言葉と向き合う	8				4 関わりの中で	13		4 関わりの中で	11		5 いにしへの心を訪ねる	6		6 論理を捉えて	12		読書に親しむ	6		7 表現を見つめて	12		7 表現を見つめて	8		
				内「枕草子」	3	①				「短歌」「言葉の力」		①③			内「盆土産」(方言)	5	①	内「敬語」	1	①	「徒然草」「漢詩」		①②				7 表現を見つめて	7				内「方言と共通語」	2	①②		
										読書生活を豊かに	7							5 いにしへの心を訪ねる	4		6 論理を捉えて	8														
社会	世界から見た日本の姿			④世界と日本の結びつき	3		②江戸幕府の成立	4	①	日本の諸地域					②中国・四国地方	5	②③	④中部地方	6	②③	⑥東北地方	5	②③	身近な地域の調査	8	①②③	開国と近代日本の歩み			②明治維新	9	①	③日清・日露戦争	10	①	
	②日本の人口	3		近世の日本						①九州地方	5	②③														①欧米の進出と開国	9									
	③日本の資源・エネルギーと産業	7		①ヨーロッパ人との出会い	8	①	③産業の発達	8	①						③近畿地方	5	②③	⑤関東地方	5	②③	⑦北海道地方	5	②③													
数学	第1章「式の計算」			文字式の利用	2		連立方程式の解き方	4		第3章「1次関数」					1次関数と方程式	4		4章「平行と合同」			合同な図形	9		第5章「三角形と四角形」			平行四辺形	12		第6章「確率」			1年間のまとめ	4		
	式の計算	8		和傘の開き方	1	②				1次関数	8				1次関数の利用	4		説明の仕組み	4		伝統的建築物に			三角形	8				確率	8						
	第2章「連立方程式」			第2章「連立方程式」			連立方程式の利用	5						参動交代と1次関数	2	③	平行線と角	10		見る合同な図形	3	②						旗源平と確率	2	③						
理科	「物質の成り立ち」			「物質を表す記号」			化学変化と熱の出入り	6		「生物の体と細胞」	6				「電流の性質」			「空気中の水の変化」	8		「天気の変化と大気の動き」	6		「生命を維持するはたらき」	5		「動物のなかま」	12		「生物の移り変わりと進化」	5		「電流と磁界」	10		
	物質を加熱したときの変化	4		原子の記号と化学反応式	6		「化学変化と物質の質量」	7		「生命を維持するはたらき」	5				電流・電圧の規則性	9												電流のはたらきを表す量	3	①						
	水溶液に電流を通したときの変化	3		「さまざまな化学変化」	9	①									電圧と電流の関係	5		「天気の変化と大気の動き」	8		「大気の動きと日本の四季」	8	①	「感覚と運動のしくみ」	7											
音楽	荒城の月	2	①	混声合唱	4		混声合唱	4		サンタルチア	2				交響曲第5番「運命」	3		アルトリコーダーアンサンブル	4		オペラ「アイーダ」	3	②	歌舞伎「勧進帳」	3	①②	箏	4	①	卒業式の歌	4		日本の郷土芸能	2	①③	
美術	グラフィティ	2		樂茶碗（鑑賞）	1	①②	樂茶碗（制作）	4	①	樂茶碗（制作）	2	①			自画像（鉛筆の表現）	3		色の学習（トーン）	1	①	金沢千代紙（デザイン）	4	①③	金沢千代紙（デザイン）	1	①③	手本変形の知識・技能	2		表札（文字の変形）	4		表札（文字の変形）	2		
				樂茶碗（制作）	3	①												金沢千代紙（デザイン）	2	①③						表札（文字の変形）	2									
保健 体育	体づくり運動（体力テスト）	4		男：ソフトボール、女：幅跳び	8		男：幅跳び、女：ソフトボール	8		プール（平泳ぎ）	9				男：バレー、女：跳び箱	8		男：跳び箱、女：ソフトボール	6		男：跳び箱、女：ソフトボール	4		男：柔道、女：ダンス	4	①②③	男：柔道、女：ダンス	6	①②③	男：卓球、女：バドミントン	8		男：卓球、女：バドミントン	4		
	共通：体育理論	2		共通：体育理論	1		共通：体育理論	4							保健：健康な生活と病気の成り立ち	4		保健：健康な生活と病気の成り立ち	3		保健：健康な生活と病気の成り立ち	4		保健：傷害の防止	2		共通：バスケットボール	3		共通：バスケットボール	4		共通：バスケットボール	2		
	共通：ソフトボール			共通：ソフトボール	3																			保健：傷害の防止	2											
技術	ガイダンス	1		栽培する作物の選定	1	③	栽培に必要な管理作業	2		エネルギー変換のガイダンス	1		エネルギーの有効利用	1	電子部品の働き	4		電子部品の働き	1		植物工場のデザイン	3		植物工場の試作	3		植物工場の試作	3		植物工場の試作	2		バケットのデザイン	2		
	栽培に適した環境	1		栽培計画	1		持続可能な栽培	2	③	エネルギーの有効利用	2							植物工場のデザイン	2									植物工場の試作	1							
	栽培の準備			栽培の準備	2																															
家庭	肉の調理	2		肉の調理	2		献立作成	1		生活情報の活用	2				消費生活の仕組み	1		環境に配慮した生活	3		住まいのはたらき	1		衣服の入手	1		地域の食材	1	①②	食品の選択	1		保存食	2	③	
				魚の調理	2	①③	魚の調理	2							商品購入のプロセス	2					安全な住まい	1		衣服の手入れ	3		郷土料理	1	①③	食品の表示	1					
															購入方法と支払方法	1					住まいと地域	2	②						保存食	2	①					
英語	Classroom English辞書を読んでみよう	1		A Trip to Finland	8		What Can We Do for Others	8		Eigo Rakugo	3		ファーストフード店で	2	A Work Experience Program	8		If You Wish to See a Change	8		Friendship across Time and Borders	5		A Video Project	8		Yui-To Share Is to Live	8		観光ガイドの説明を聞き取ろう	1		CMを作ろう	8		
	Did You Enjoy Your Vacation?	8		天気予報	2		スキット作りを楽しもう	6		Gulliver's Travels	8				インタビュー記事を書く	2		スピーチをしよう	6		買い物②	2		So Many Countries, So Many Customs.	8		賛成意見・反対意見を言おう	3		英語のしくみ⑤	2		Her Dream Came True.	5		
	連休の思い出	2					電話「依頼する・誘う」	2							英語のしくみ③	2		英語のしくみ④	2													Maria Talks about Her Life	4			
総合 的な 学習	英語のしくみ④	2					英語のしくみ②	2									道案内①	2														まとめ	2			
	金沢探索	4	①	金沢探索	8	①	職場体験準備	6		職場体験	18				金沢探究	8	①③	金沢探究発表	12	①③	金沢探究	6	①③	金沢探究まとめ	4	①③	修学旅行	4	②	修学旅行	0		1年間のまとめ	2		
道徳	1「あいさつ」	1		4「私のせいじゃない」	1		6「ゴール」	1		10「私は十四歳」	1				12「許さない心」	1		15「なみだ」	1		アクション！	1		22「夜は人間以外のものとの時間」	1		「本当の私」	1		26「奇跡の一週間」	1		29「ごめんね、おばあちゃん」	1		
	2「ばなしの女王」	1		5「あの子のランドセル」	1		7「五手やつめた音楽」	1		11「祭りの夜」	1	①			アクション！	1		16「百十七年に感謝をこめて」	1		19「六千人の命のビザ」	1		23「人間の強さ・気高さ」	1		24「大切なものは何？」	1	③	27「妹に」	1		30「冬の使者『マガン』」	1		
	3「住みよい社会に」	1		「どんなことでも相談し合える仲間」	1		8「通足で学んだこと」	1							13「心でいいただく伝統の味」	1	①	17「みんなでとんだ！」	1		20「赤土の中の真実」	1				25「心に寄りそう」	1			「三つのいのちについて考える」	1					
							9「渡良瀬川の鮎毒」	1							14「田老の生徒が伝えたもの」	1		18「震災の中で」	1		21「今度は私の番だ」	1														

3 年																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																													
	4 月			5 月			6 月			7 月			8 月			9 月			1 0 月			1 1 月			1 2 月			1 月			2 月			3 月																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																											
国語	深まる学びへ	13		視野を広げて	12	言葉を見つめる	7	(俳句の可能性、俳句を味わおう) ③	(書写) 効果的に書こう	4	(書写) 生活に生かそう	3	読書生活を豊かに	2	状況の中で	2	状況の中で (「故郷」)	5	状況の中で (「故郷」の他)	8	いにしえの心と語らう	11	③	(書写) 書き初め	3	読解を促して (「作られた『物語』を超えて」) はあ	14	読書に親しむ	1	未来へ向かって	16																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																														
																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																													</

国語科

端名 秀雄

谷口 仁

早谷 憲子

共同研究者 折川 司（金沢大学）

1. 伝統文化教育を進めるに当たって

平成 26 年度から 28 年度にかけて ESD 研究「グローバル社会に生きるために必要な資質・能力の育成」を展開してきた本校において、国語科では思考力・判断力・表現力の向上を強化してきた。平成 29 年度に入ってから、ESD 研究の理念や手法を踏襲しつつ、伝統文化教育を中心とした教科等横断的なカリキュラムの開発「伝統文化教育を中心とした教科等横断的なカリキュラムの開発ーグローバル社会に生きるために必要な資質・能力の育成を目指してー」に取り組んできている。国語科においては、「言語文化や古典を題材とし、学年を追って自国の伝統文化に対する考えを深化させ、発信することができるように学習すること」、「ものの見方や考え方に触れ、他者と自分の考えを比べることで、より広い視野を持って自分の意見を形成できるように学習すること」に重点を置いた研究を進めてきており、こうした中で、生徒たちは古い時代と現代との文化的な接点や差異、時間の流れによる変容等を見付け、それらの面白さや価値、理由について自分なりに考えを深めたり、それを表現したりすることができるようになってきている。

伝統文化教育研究の 3 年次にあたる今年度は、本校の研究が目指す〈身に付けたい三つの資質・能力〉の中で国語科が担うことができる資質・能力を明らかにするとともに、それを育成する方法を三点に焦点化し、それぞれの有効性を検証した。育成する過程においては、生徒が思考・想像したことをどのように表現し、交流を重ね、言語感覚を豊かなものにしていくかという点に傾注している。

2. 能力・態度の育成に当たって

（1）学校全体として育成する資質・能力について

国語科では、言語活動を通して汎用的な能力を養うことに加えて、本校の研究が目指す身に付けたい三つの資質・能力を育成するために、以下のような構想を立てて研究を展開することとした。

「①日本の伝統や文化に関する理解」については、我が国の言語文化に関する学習を通して身に付けることができると考えている。各学年で目指す生徒の姿を設定し、目標とした。

1 年生「古典作品に触れ、古典の世界に親しむことができる。」

2 年生「古典に表れたものの見方や考え方を理解することができる。」

3 年生「歴史的背景などに注意して古典を読むことを通して古典の世界に親しむことができる。」

「②伝統文化への理解に基づいた多様な文化を尊重する態度」については、方言など、自国の言語文化を学ぶ中で養うこととした。言語活動を通して多様な考えを知ったり、課題を解決した

りする学習活動を編成していった。

「③文化の伝承・創造への主体性など」については、言語文化として学んだ短歌や俳句などを創作する活動を通して育成し、我が国の伝統と文化に対する関心や理解を深められると考えている。また、古典作品や日本の言語文化を理解し、自分の表現に生かすことができることも③の資質・能力に結び付くと見通している。さらに、これらを理解することから、言葉を根拠にして、自分と照らし合わせて作者の思いをまとめることができたり、感じたことや考えたこと、想像したことを表現できたりすることも③の資質・能力につながるとして学習計画を立てた。

①日本の伝統や文化に関する理解

「竹取物語」では、作品の現代語訳などを通して、作品に描かれた昔の人のものの見方や考え方が現代人にも通じることがあることを理解させた。〈1年〉

「枕草子」では、そこに表れた清少納言のものの見方や考え方、巧みな表現について分析することで季節感に対する考えを深めることをねらいとした。〈2年〉

「古今和歌集仮名序」では、音読や読解によって、古人が和歌をどのようなものとして捉えていたかを理解し、古文のリズムに親しんだ。〈3年〉

②伝統文化への理解に基づいた多様な文化を尊重する態度

「花曇りの向こう」では、祖母のつかう関西方言が会話文として作品の魅力にもなっている。本来、音声言語である方言が、このような形で文学作品に用いられることによって、さまざまな効果をもたらすことを作品を通して理解させ、方言の味わい深さを実感させた。

「空を見上げて」で、女川の中学生在が作った句に、自分たちが作った句を重ねていく活動を行った。そのような連句的な活動を通して、日本の伝統文化である「連句」「連歌」についても学習すると同時に、そのままでは無理だが、翻訳を通して、様々な国の人々とも通じ合える活動であるということを理解させた。〈1年〉

「方言と共通語」と「盆土産」の関連学習として、作品を金沢ことばで表現する活動を目指した。自分たちの住んでいる地域の言葉で作品を表現することにより、方言の特徴や他言語と比較していく考え方に目を向けるためのきっかけとすることを目指した。〈2年〉

「春に」では言葉に託された思いをどのように朗読で表現できるのかを考えた。合唱曲となっているので、音楽としての捉え方と朗読する自分たちの捉え方がどのように異なり、どこが共通しているのかなどを考え、日本人にとっての「春」という季節の捉え方なども踏まえて、言葉の連なりやイメージの連なりを味わうことをねらいとした。〈3年〉

③文化の伝承・創造への主体性など

「今に生きる言葉」では、故事成語の故事について学習するとともに、故事成語を用いた短文づくり等を通して、自分たちが言葉の使い手となる意識を持たせた。〈1年〉

「新しい短歌のために」では、物語の場面を描いた短歌を創作した。その際、選んだ語句・表現の意図や描こうとした場面の情景を互いに説明し合うことで、より伝わる作品に仕上げるための工夫や表現について助言や改善点を考えさせた。〈2年〉

金沢市で行っている観能教室に向けた学習として、平家物語に触れ、能「八島」で描かれている背景を理解し、能や狂言を鑑賞し、学んだことや感じたこと、考えたことを「魅力的

な紙面を作ろう」でまとめた。

「俳句の可能性」や「俳句を味わう」では、少ない字数で表現される情景や心情を味わい、自分の創作につなげることを目指した。自分の身の回りの風景や好きな時間、心に残る出来事などをテーマに、歳時記を活用し、有季定型の俳句を作った。

また、和歌の歌合をすることを通して、歴史的背景や作者が置かれた状況、表現の効果等の理解を図り、自分自身の言葉で語れることを目指した。〈3年〉

(2) 関連・連携を図った教科等について

〈1年生〉

- ・社会…方言と共通語について学ぶ。（「花曇りの向こう」）
- ・社会…連歌・連句の歴史を学ぶ。（「空を見上げて」）

〈2年生〉

- ・社会…定型詩の文化と、それによる表現の工夫と実践。（「新しい短歌のために」）
- ・社会…歴史や文化により登場人物や世界観への理解を深める。（「扇の的—『平家物語』から」）

〈3年生〉

- ・音楽…合唱曲の音楽の表現と詩の言葉の解釈について考える。（「春に」）
- ・音楽，社会…能・狂言の歴史や内容や謡，楽器について学ぶ。（古典芸能の世界）

3. 成果と課題

1年生では、「竹取物語」という生徒たちにもなじみのある古典作品を通して、古典は決して単なる「昔話」ではなく、作品中にみられる発想は、現代人のそれと比較してもそんな色のないものであることを理解させることができた。

日本の言語文化に関することとして、「花曇りの向こうに」に登場する関西方言と、自分たちの用いている「かなざわ言葉」との違いなどについても考えさせた。しかし、「かなざわ言葉」は使わないとか、表現しにくいなどという意見もあり、地域の言葉（伝統文化である方言）を尊重するという意識を持たせるためには、方言だけを学習する時間を設けるなど、何かしらの工夫が必要であることを実感した。

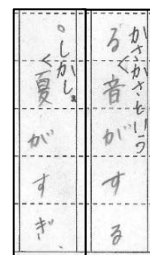
「故事成語」の学習では、同じ故事成語についていろいろな短文を作らせて比較することを通して、古典にまつわる言葉の使い手となる意識を持たせることができた。

2年生では、「枕草子」で自分流の「枕草子」を書く活動を行うにあたり、次の二つを課題とした。一つは清少納言の随筆に見られる視点や表現、特徴をとらえ、自らの作品に取り入れることと、もう一つは交流の中で得た助言をもとに、より伝わる表現を目指して改善することである。前者は、好ましくないものによる対比や数詞といったわかりやすい表現のほか、五感による捉え方や時間の変化、繊細な描写や言葉の選び方に着目し、自分の文章に活用する生徒の姿が見られた。（図1）後者は、読み手に分かりやすい文章表現としての指摘のほか、前述した筆者の随筆の特徴に近づけるための指摘や助言ができていた。交流・助言により「語彙」の獲得にもつながったと考える。（図2）

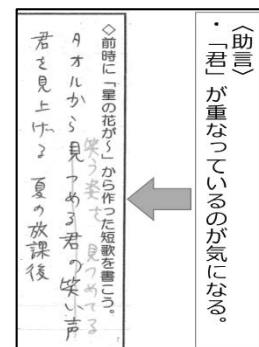


(図1) 語感や描写に注目した作品

「新しい短歌のために」では、物語の世界を表した歌集づくりを目標とし、短歌と解説文を併せて作る活動を行った。伝えたい場面や印象を明確にすることで、語句や表現が印象を伝えるために適切であるかどうかの評価や推敲を相互に行い、感じたことや考えたことを書く力を磨き、言葉に対する感覚を高めることを目的とした。グループ活動の助言により、生徒たちはより伝わる表現に向けて予期しなかった伝わり方に対する改善を行い、短歌やその解説文を改善していた。(図3) 一方で、解説文が短歌に対する解釈の妨げになったり、物語からの創作が伝えたい場面を切り取るという短歌のねらいが弱まったりといった課題が見られた。



(図2) 助言による改善の例



(図3) 助言による改善例

また、「自分が調べてきた『伝統文化』について意見文を書こう」とし、「伝統文化」に対して、自分が考えたことを意見文に書く活動を行った。自分の意見に対する根拠や具体例に対して、互いに考えを述べ合うことで、自分の文章に生かす活動に取り組むことで研究主題に迫った。また、漢語を中心とした抽象的な概念を表す語句を活用させることで、限られた字数で自分の考えをまとめるとともに、語彙に関する内容との関連を図った。生徒たちは意見に対する互いの考えを述べ合うことで、自分の意見や根拠の適切さを確かめ、見直して書くことができていた。また、「使う」という目的意識をもって語彙を増やそうとする姿勢が、生徒の文章や振り返りからも確認できた。

〈振り返りのワークシートより〉

- ・学習を通して、根拠が又聞きのようなあやふやなものでは駄目だと思った。説得力を上げるには、もっと事実に基づいた表現を取り入れ、誰が見ても理解でき、納得できるものを目指したい。
- ・反論を検討することで説得力を増すことができた。具体的な数字を使うと、誰が聞いても納得できる意見にできた。他の人の意見から、文章構成の重要性も感じた。
- ・もっと読者をひきつける書き方を考えたい。自分の語彙をもっと増やすと、相手に自分の考えが伝わりやすくなると思う。

3年生では、詩や俳句、短歌の学習において、なぜ、その言葉にしたのかに着目したり、その言葉を使うことによってどのような効果があるのかを考えたりした。言葉が持つイメージや微妙な言葉のニュアンスの違いを感じることができるようになってきた。

〈語彙ノートの子の記述より〉

- ・「いとまごい」には「礼儀正しく出発する行為」という意味があり、ただの別れではないことが分かる。
- ・筆者が「動作」ではなく、「挙動」を使ったのは単なる動きだけではなく、表情や座り方、手の置き方などすべてにおける喜助の様子を表すためではないか。



和歌の歌合の様子

また、和歌の歌合をした際に、歴史的背景や作者の人物像、表現技法の効果なども考えて、一つの和歌を理解し、和歌の世界に親しむことができた。歌合をするためには選んだ和歌をしっかりと調べ、自分で理解しなければならないので、生徒は相手にわかりやすく伝えるように表現を工夫してまとめていた。現代にも通じる思いや現代ならばどのような状況に通じるかなども考え、理解を深めていた。

また、社会科や音楽科との連携として、金沢市で行われている観能教室の鑑賞に向けて、能や狂言の学習を行った。社会科では歴史的な事項を、音楽科では実際に能楽師の方をお招きして講演を聞いたり、楽器に触れたりした。そこで国語科では学習したことをまとめて、後輩に向けて新聞記事を作成した。後輩に伝統芸能である能や狂言を紹介するとともに、伝統芸能に対する自分の考えも書くことができた。

さらに、日本人としてのアイデンティティーにつながる取組として「学校で古典を学ぶ意義」を考えた。高校生を相手として文章を書くことによって、今まで学校で学習した古典からの学びを振り返り、どのようなことが理解できたかやどのようなことに学びがつながっていくのかを考えることができた。書いた文章は班で推敲し、よいと感じた文章を高校生に送り、読んでもらうこととした。それらを用いて高校生と交流授業を行った。高校生から文章構成や内容についてわかりやすい言葉でアドバイスをもらうことによって、視野を広げて考えることができた。課題としては、資料の引用を行う際に使った著名な人や専門家の考えに流されて自分自身の考えとなっていないものが多々あったことが挙げられた。自分の考えを他者の考えや具体例と結び付けて書く際の注意点が明らかとなったので、次回はつながりの部分を丁寧に考える時間を設けたい。

〈振り返りのワークシートより〉

- ・班の人から参考文献の前後のつながりを意識した方がいいというアドバイスをもらったので、今回の学習を生かして、より説得力のある文章を書きたいです。
- ・説得力のある引用を使っても主張と結びつかない場合は意味がないとわかりました。また、今回の授業で引用としてもおもしろい古典を紹介してもらって、古典への興味がより湧きました。
- ・他者の考えを引用するとき推測で終わらないことが重要だと分かりました。そして、具体例を述べるとき、事実を述べるだけにならず、自分の考えを書くべきだと知りました。
- ・文章を書くときに参考資料が適切か念入りに調べたが、他者の意見よりも自分の言葉の方が大切だと改めて知りました。



高校生との交流授業の様子

実践事例

国語

学年 1 年	関係・連携の考えられる教科等 社会
授業内容 「花曇りの向こう」（瀬尾まいこ） 方言が文学作品に用いられることによって、様々な効果をもたらすことを作品を通して理解させ、方言の味わい深さを実感させる。	
教科等で身に付けたい力（本時について） ・登場人物の心情について、会話文をもとに考えることができる。	育成したい資質・能力 ②伝統文化の理解に基づいた多様な文化を尊重する態度。
授業のポイント・流れ 1 前時までの内容を振り返り、会話文に注目させる。（7分） 文章中の会話文に印をつけさせる。 2 印をつけた会話文の中から、方言を用いた会話文に注目させる。（15分） それらが共通語との会話の中で、どのような役割を果たしているのかを考えさせる。 3 祖母や友人の方言による会話文は、主人公の心を和ませてくれていることを理解させる。（10分） 心が晴れない主人公に対して、特に祖母の方言による一言が和ませてくれていることを実感させる。 4 方言による会話文を共通語に言い換えてみよう。（15分） 方言による会話文を共通語に言い換えさせ、対話の印象がどのように変わってくるかを考えさせる。 ・言葉がきつく感じられる。 ・冗談として受け止められにくくなる。など 5 方言には心情表現の手段としての素晴らしさや、味わい深さがあることを確認する。 方言の良さについて確認する。（3分）	

実践事例

国語

学年 2 年	関係・連携の考えられる教科等 社会
授業内容 「新しい短歌のために」馬場あき子、「短歌を味わう」 物語から創作した短歌を解説しよう。	
教科等で身に付けたい力（本時について） ・作った短歌や解説文を互いに読み合い，語句や表現の効果について交流し，自分の考えを広げている。【書くこと】	育成したい資質・能力 ③文化の伝承・創造への主体性など
授業のポイント・流れ 1 本時の課題を知る。（５分） ・前の時間に作った，物語の場面や様子を表す短歌の活動について，学習したことや意識して取り組んだことを確認する。 2 解説文を書くための観点を確認する。（１０分） ・ワークシートに記述した， ①三十一音に込めた物語や情景， ②想像を膨らませた内容， ③選んだ語句や表現とその意図 のほか，第１時で考えた解説文の要素も参考にする。 3 創作した短歌に解説文を書く。（１５分） ・短歌を見た人に想像してほしいことを言語化する。 ・ワークシート①の①～③の活動を，文章化する意識で取り組む。 4 短歌と解説文をグループで交流する。（１０分） ・短歌や解説文は観点を満たしているか評価する。 ・書き手の意図を理解したうえで，アドバイスや助言を行う 5 短歌を一つ選び，グループで出た感想や助言を紹介する。（１０分） ・短歌の作者ではなく，同じグループのメンバーが，話し合った活動をまとめて発表する。 ※短歌で伝えたい世界観を解説文により共有することで，短歌の語句や表現をより良いものになるよう助言しあったり，他の生徒の用いた工夫を取り入れたりして，より適切な語句や表現を限られた字数の中で検討し，言語感覚を磨くのが目的である。 この後，推敲・清書した短歌を一冊にまとめて，学級全体で鑑賞し合う活動へとつなげていく。	

実践事例

国語

学年 3 年	関係・連携の考えられる教科等 音楽・社会
授業内容 「魅力的な紙面にまとめよう」 能・狂言について学習したことや観能教室で感じたこと、考えたことを紙面にまとめる。	
教科等で身に付けたい力（本時について） ・情報を整理して文章にまとめ、伝えたいことをわかりやすく書くことができる。	育成したい資質・能力 ③文化の伝承・創造への主体性など
授業のポイント・流れ 1 本時の課題を知る。（5分） ・音楽科や社会科の授業で学んだことや観能教室で感じたこと、考えたことを構成を工夫して紙面にまとめる。 ・目的を示す。 →能・狂言の学習や観能教室で感じたこと、考えたことを観能教室を体験していない下級生に紹介する。よいものは図書室に掲示することを伝える。 ・書く時の視点として次の五つを示す。 ①内容が明確であること。 ②文章構成や表現の工夫をすること。 ③コラム、図表やイラストなどを活用すること。 ④見出しを工夫すること。 ⑤考えたことや感じたことを書くこと。 ※能・狂言に実際に触れてみて、どう感じたのか、考えたのかを書く。 ・（楽器を体験して）舞台の上で実際に楽器を弾く方々も仕事を楽しみながら深めていっているのかなと思った。こんな貴重な体験をさせてもらえるなんて運がよかったと思う。これから能を見るときは舞や謡だけではなく、音楽や楽器を弾いている人たちにも注目してみたいと思う。 ・私は能の魅力はすべてが関わり合って一つの舞台ができていることだと思います。（中略）現代のたくさんのものである舞台もよいけど、こういう能も残していくべきだなと思いました。 2 紙面にまとめる。（40分） ・見出しの工夫を新聞記事を例に確認する。 ・パンフレットを切り貼りしてもよいことを確認する。 3 次回の活動を確認する。（5分） ①互いに読み合い、評価し合う。 ②魅力的だと思った紙面を紹介する。 ・どこが、なぜよかったのかを明確に伝える。 ③伝統芸能に対する自分なりの考えを持つ。	

社会科

金田 哲也

水橋 長之

岡田 哲典

共同研究者 加藤 隆弘（金沢大学）

1. 伝統文化教育を進めるに当たって

社会科の目標として、次期学習指導要領では次のように記載されている。

社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追及したり解決したりする活動を通して、広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を次のとおり育成することを目指す。

（１）我が国の国土と歴史、現代の政治、経済、国際関係等に関して理解するとともに、調査や諸資料から様々な情報を効果的に調べまとめる技能を身に付けるようにする。

（２）社会的事象の意味や意義、特色や相互の関連を多面的・多角的に考察したり、社会に見られる課題の解決に向けて選択・判断したりする力、思考・判断したことを説明したり、それらを基に議論したりする力を養う。

（３）社会的事象について、よりよい社会の実現を視野に課題を主体的に解決しようとする態度を養うとともに、多面的・多角的な考察や深い理解を通して涵養される我が国の国土や歴史に対する愛情、国民主権を担う公民として、自国を愛し、その平和と繁栄を図ることや、他国や他国の文化を尊重することの大切さについての自覚などを深める。

上記の（１）は、学校全体として育成する資質・能力として設定した、「①日本の伝統や文化に関する理解」にあてはまる。同様に（３）は「②伝統文化への理解に基づいた多様な文化を尊重する態度」や、「③文化の伝承・創造への主体性」にあてはまる。このように、学習指導要領の求めていることをふまえ、研究を進めてきた。

過去２年間の実践を通して改めて実感したことが、社会科の授業実践の大半が伝統文化教育につながるものということである。教科等横断的な実践を考える上でハブとなる教科だからこそ、教科として付けたい力をふまえた上でできるだけ多く、様々な教科等との連携の可能性を探るとともに、内容の精選やより効果的で効率的な方法を模索してきた。

2. 能力・態度の育成に当たって

(1) 学校全体として育成する資質・能力について

学校全体として育成する資質・能力として昨年度、次のように設定した。またこれらは、グローバル社会に生きるために必要な資質・能力であるとも捉えられている(本校研究紀要第61号 p15)。

- ①日本の伝統や文化に関する理解
- ②伝統文化への理解に基づいた多様な文化を尊重する態度
- ③文化の伝承・創造への主体性など

地理的分野を例にとると、「世界各地の人々の生活と環境」の単元においては、伝統や文化そのものだけでなく、グローバル化のなかで伝統や文化が変容していくことも扱う。「日本の諸地域」の単元においては、中学校学習指導要領解説 社会編に、「地域の伝統的な生活・文化に関する特色ある事象などを中核として、地域的特色や地域の課題を捉えることが考えられる」と明記されている。歴史的分野においても、「歴史に関わる事象の意味や意義、伝統と文化の特色などを、時期や年代、推移、比較、相互の関連や現在とのつながりなどに着目して多面的・多角的に考察」と明記されている。ここでは、後述する資質・能力の「①日本の伝統や文化に関する理解」や、「②伝統文化への理解に基づいた多様な文化を尊重する態度」を育成することに重きを置くものである。

そして公民的分野では、「現代日本の社会は…いろいろな場面において伝統や文化の影響を受けていることを理解できるようにし、それらが現在と将来の政治、経済、国際関係に与える影響について多面的・多角的に考察し、表現できるようにするとともに、我が国の伝統と文化などを取り扱う中で、文化を受け継ぎ、創り出していくことの意義について考察し、表現できるようにする」とあるように、資質・能力の「③文化の伝承・創造への主体性」に関わるものである。

このように①、②がまずあって、その先に③がある、すなわちスパイラル型に育成されていくと考えていた。発達段階に応じて、初めは①や②が多かったものが、のちに③を中心としたものとなっていくのも自然な流れであろうと考えていた。

しかし実際には、①があって③につながる、または③があってより深く知ろうとする中で①につながるといった、様々なケースが見られた。

例えば後述する能に関する実践は前者にあたるだろう。社会科や国語科、音楽科における事前指導があって、それらのなかで①が育成され、また③の端緒が生まれ、その上で観能教室で実際に能に触れることによって③の育成につながると考えられる。また、「古くからあるものだから大切であり、残していかなくてはならない」といった、知識としてはわかっているのかもしれないが実感としてわかっていないのではないかと思われる生徒の発言や記述が見うけられることがある。このようなケースにおいては、知識を増やしていくことによってなぜ受け継ぎ、守っていかなければならないのかということに対する理解が深まることで、まず①があり③、そして①がより深まっていくという、連鎖が見取れた。

(2) 関連・連携を図った教科等について

今年度は特に、どこの学校においても取り組める実践というものについて意識した。社会科という

教科の目的をふまえた上で、伝統文化に関する内容を織り込むことで、本校での実践を取り入れやすくしようというものである。

そういった取り組みの中で、継続して行われているのが能に関する実践である。金沢市内の中学生が参加する観能教室が3年次に行われており、事前指導としての位置づけで国語科や音楽科においても能について学んでいる。しかし社会科で能を主に扱うのは1年次（歴史的分野）であり、どうしても観能教室までの時間差が出てしまう。3年間を見通した指導の中に位置づけて1年次で能を扱い、3年次につなげる意識を持つことで、1年次では要素①を、3年次の「私たちが生きる現代社会と文化の特色（公民的分野）」では要素③を意識し、さらに国語科や音楽科との連携によって深い学びにつなげることができた。

また、他教科からの連携を模索するアプローチに対して、社会科が関わることができた。技術分野におけるガイダンスの内容として、技術が進展することによる光と影の部分の両面を見るという実践が行われた。これに対して、社会科からも世界各地の人々の生活と環境の学習において、技術の進展などが人々の生活を変えていき、利便性などを求めた結果として伝統的な生活が失われていくという実践を行うことができた。時期的に近いこともあり、社会科の授業の中で生徒から「技術の時間にも学んだ」という発言が出てくるなど、双方向で学習内容を再確認することができ、より深い学びにつながったのではないかと考えられる。

一方、教科間の連携だけでなく、総合的な学習の時間との連携を多く模索することができた。例えば1年次、本校ではシルエット劇を行っているが、昨年度は日本の歴史や神話を題材とするものであった。これに関連して、ギリシャ神話との共通性を模索するなど、日本の伝統や文化に関する理解だけにとどまらない実践を行うことができた。

4. 成果と課題

（1）教科横断的な視点から

本校社会科では12月に、全校生徒を対象にアンケートを実施した。アンケートの設問要旨としては、次のとおりである。

- 設問1 社会科の学習内容のなかで、他教科との学習内容との関連を意識したことがあるか
設問2 設問1の具体例についての自由記述
設問3 教科横断的な学習について
① 新たな気づきや学びがあったか
② 興味・関心がより高まったか
設問4 「伝統や文化に関する教育」についてどのように感じ、行動に移しているか

設問1の結果は、次のとおりである。なお、カッコ内は前年の数値である。

	1年	2年	3年
意識したことがある	33.8% (43.0%)	81.9% (87.2%)	71.7% (58.8%)
意識したことがない	66.2% (57.0%)	18.1% (12.8%)	28.3% (42.2%)

1年から2年への変化として、「意識したことがある」と答えた生徒の割合が大幅に増加した。その一方で、3年については前年度の3年よりも増加しているものの、前年度の2年と比較すると低下している。2年の数値が高くなる要因として、地理的分野で日本地理を学習しており、このことが他教科等の伝統や文化に関する内容と結びつきやすいことが考えられる。また3年に関しては、日本の伝統や文化を全体として網羅する単元があることから、学年全体としての深まりは2年ほどではなかったようである。しかし一部の生徒には強い深まりを感じたことが、次のような記述からもうかがえる。このような学習全体の深まりを、どのようにして学年全体に広めるのかが、これからの課題であろう。

設問2の自由記述欄 3年生徒の一部抜粋

- ・社会はすべての教科の集大成。
- ・一番大切な教科なんてない。すべて大切だ、そう思いました。

設問2の自由記述欄では、他教科との学習内容が関連しているものの具体例として、特に下表のようなものを挙げる生徒が多かった。これらはそれだけ印象に残りやすいとも言えるだろう。教科間連携をさらに深めることができた一方、年度初めの実践は印象に残りにくい傾向があることもわかった。改めて、教科間連携の必要性や重要性を感じている。社会科だからこそ伝統文化ありきになってはいけない、通常の授業の中で意識させていくことを大事にしてきたと思うが、むしろ逆に社会科から積極的に仕掛けていった方がより教科間連携が活かされたのかもしれない。

英語科における、日本の伝統的な文化を紹介する活動のように、年間を通して継続的に取り組める活動との連携を進めることも必要だと考えられる。また、雨温図の読み取りなど気候の分野を苦手とする生徒が多いが、理科との連携を図ることで、より理解しやすくなったと考える生徒や、その逆に社会での学習によって理科がより理解しやすくなったと考える生徒も見られた。

【表 社会科の学習のなかで、他教科との学習内容の関連を意識したことの具体例】

1年	国語	古文が書かれた当時の様子や文化について
	英語	日本の伝統的な文化を紹介する活動
2年	国語	伝統文化についての意見文を書く
	理科	気候や、地震などの自然災害 単位（ワット）の由来について
	英語	日本の伝統的な文化を紹介する活動
	家庭	伝統的な食文化（保存食品など） 伝統工芸品
3年	国語	歴史の時間に学んだ作品を、学習するとき 古典（和歌・短歌・俳句） 方言
	理科	日本の地域ごとに特色ある気候が見られる理由 焼畑農業
	音楽	世界の民族音楽 伝統的な音楽
	美術	日本の文化（模様について）
	技術	Society5.0 持続可能な社会 伝統工芸 情報社会
	家庭	地域社会
	総合	多文化社会
	道徳	戦争体験 公正公平や差別、人権に関すること

設問 3 の結果は、次のとおりである。

教科横断的な学習について	1 年	2 年	3 年
「新たな気づきや学び」が、たくさんあった。	35.8% (43.0%)	61.7% (53.8%)	65.1% (47.7%)
「新たな気づきや学び」が、少しはあった。	53.6% (55.1%)	38.3% (44.2%)	34.2% (48.3%)
「新たな気づきや学び」は、ほとんどなかった。	4.6% (1.3%)	0.0% (1.9%)	0.0% (3.3%)
「新たな気づきや学び」は、なかった。	6.0% (0.6%)	0.0% (0.0%)	0.7% (0.7%)

教科横断的な学習によって	1 年	2 年	3 年
興味・関心が、とても高まる。	50.3% (58.9%)	60.8% (50.6%)	53.8% (52.0%)
興味・関心が、ある程度は高まる。	41.1% (37.3%)	35.8% (46.2%)	41.4% (44.1%)
興味・関心は、あまり高まらない。	5.3% (2.5%)	2.7% (3.2%)	4.1% (4.0%)
興味・関心は、高まらない。	3.3% (1.3%)	0.7% (0.0%)	0.7% (0.0%)

学年が進むにつれて、新たな気づきや学びが増える傾向が見られるが、これは3年間継続して研究に取り組んだ成果であると考えられる。また、特定の教科間における連携というよりは、すべての教科がつながっているという気づきを得たと思われる記述も多くなる傾向があるように感じた。新たな気づきや学びに関するものとしては、次のような記述が見られた。

【1 年】

- ・苦手意識を持っている社会科の学習のなかで、好きな理科との関連性を見つけることができとてもうれしい。
- ・同じ内容の学習でも、違った方面から、違ったことを中心（目的）としているので、その学習についてより詳しくわかることができるからいいと思う。また、その内容を何度もすることで、確実に覚えられると思う。
- ・ほかの教科でもするということは、それだけ大切なことなんだと思った。

【2 年】

- ・京都の観光事情を通して、どうあればよいのかを考えた。地理の時間で勉強していたので、総合での活動がスムーズに感じた。
- ・特に江戸時代は、様々な教科の伝統に関する部分と関連が深いと感じた。
- ・学習にムダはない。すべてのことがつながっている。
- ・教科ごとに視点を変えることによって、違う見方や考え方ができると思った。
- ・社会科の知識が多少たりなくても、ほかの教科の知識とつなげて考えるとわかることがある。多面的に考えることもできる。

【3年】

- ・関連している事柄を通して、その単元への理解がより深まった。
- ・ほかの教科とも関連していることで、ほかの教科の視点から見ることで腑に落ちるということがあって、おもしろかった。
- ・教科につながりがあることで、興味を持ちやすくなる。
- ・それぞれの教科で習ったことを生かせるなと感じたり、視野が広がったりした。

(2) 社会科としての視点から

アンケートの設問4、『昨年度からの授業（全教科）を通して、「伝統や文化に関する教育」について、どのように感じていますか』に対する結果は、次のとおりである。

伝統や文化の大切さを、	1年	2年	3年
ある程度理解することができ、何らかの行動に移すことができた。	7.4% (7.6%)	11.4% (3.9%)	11.4% (18.3%)
ある程度理解することができた。	86.5% (87.3%)	83.9% (87.7%)	83.9% (76.5%)
あまり理解することができなかった。	5.4% (3.8%)	4.7% (8.4%)	4.7% (5.2%)
理解することができなかった。	0.7% (1.3%)	0.0% (0.0%)	0.0% (0.0%)

また、行動の具体例としては、次のような記述があった。知識や経験が増えていくことで何らかの行動に移したい、移そうという意欲が高まるのか、学年が上がるごとに行動の具体例を書く生徒が増えていることがわかる。

【1年】

- ・輪島塗のはしを買って使っている
- ・伝統的な食べ物を作ってみた
- ・はしの使い方について意識した

【2年】

- ・伝統的な食べ物を実際に食べてみた
- ・AFSのプログラムの時、日本の食文化について外国の人にプレゼンテーションをした
- ・数学から、旗源平について調べた
- ・普段の生活で、金箔に関連する商品を買うことがあった
- ・伝統工芸に興味を持ち、いろいろ調べました。家に伝統工芸品があったりして、実際に触れることもできたり、九谷焼づくりも体験した。
- ・他県に住んでいる知り合いに、地元のいい場所を言えた
- ・伝統やその魅力について、人に話して伝えた
- ・茶道を習った

【3年】

- ・金沢のことを外国人に紹介した
- ・学校で習ったことを家の人に「ねえ知ってる？」と自慢した
- ・街中で外国人に説明できた
- ・伝統工芸品に触れ、自分でも実際に作ることができた
- ・伝統文化というものを、いろいろと考えるようになった
- ・どの伝統に対しても批判的な考えが減り、逆にそういうことを知るのが楽しくなった
- ・よく神社に行くようになった
- ・地域の行事に参加したり、楽しんだりするようになった

- ・金沢のものを買ったり使ったりするようになった ・昔のことについて調べた
- ・自分の伝統文化に対する考え方を，国語の作文で表現することができた。
- ・臨時で，箏の発表会に出ました。
- ・体育の柔道や社会の地理などで学んだ伝統や文化と，自身の体験が合致したり，これからしてみようと思えた ・美術の時間に知った，伝統的な模様について調べた
- ・湯飲みをつくったり，輪島塗を見たりした ・伝統や文化を守ろうと行動できた
- ・伝統食を作る，伝統を親から受け継ぐ ・日本の文化である将棋についてのスピーチを行った

多くの生徒はおおむね，伝統や文化の重要性を認識していることが設問4からもうかがえる。また，それがグローバル社会で生きていくために必要なことであるという認識も，ある程度持っている。例えば自由記述欄からは，次のような意見が見られた。

【1年】

- ・あまり伝統などに関心がなく，知識もなかったけれど，今でも伝統文化を伝えている人がいることや，昔の人々の知恵がわかってすごいと感じた。
- ・自分の町の伝統や文化に，今まで以上にふれてみたいと思った。また，自分たちが守って受け継がないといけないと思った。
- ・自分の当たり前は，他の人から見たら当たり前ではないんだなと思った。
- ・日本の伝統は，守らないといけない大切なものなんだなと実感した。他の国とは全く違ったり，似たような文化のところもあったりして，いろいろな国の文化があっておもしろいなと思った。
- ・外国人に適切に伝えるためにも，もっと日本の文化について知りたいと思った
- ・日本の文化を詳しく知れただけでなく，英語でも伝えることができた

【2年】

- ・実際に日本で行われていたり，取り組まれていたりすることなどをより深く知ることができたから，普段の生活でもそういうものを見つけていきたいと思いました。
- ・いろいろな教科と関連があることを学ぶにつれて，やはり伝統文化は後世に残していくべきだと思うようになった。

【3年】

- ・社会で昔の人々の暮らしを，国語で昔の人々の感性を知ることができた。
- ・昔の知恵を現代のものに利用していて，昔の知恵はすごいなと思った。
- ・戦争経験者や被爆者の話から，当時の人々の思いやつらさを，社会の学習内容とあわせてより深く感じることもできた。

校区という概念がない学校だからこそ，伝統や文化に関する教育に取り組んでいくことの意義があることを今更ながら再認識している。地域社会との結びつきが希薄化している現代だからこそ，その課題に社会科として向き合う方法のひとつが，伝統や文化に関する教育だったのかもしれない。

実践事例

社会

学年 1 年	関係・連携の考えられる教科等 技術・家庭
授業内容 寒帯に住むイヌイットの暮らしについて、衣食住を軸に調べる。その後、伝統的な生活とそうでない生活に関することに分けて整理し、生活の変化についてまとめる。	
教科等で身に付けたい力（本時について） イヌイットの生活の変化がどのような要因によってもたらされているのかを考察し、発表することができる【思考・判断・表現】	育成したい資質・能力 ②伝統文化への理解に基づいた多様な文化を尊重する態度
授業のポイント・流れ 導入 1. 雨温図を読み取り、寒帯のイメージを持つ(10分) ・デジタル教科書で、イカルイト（カナダ）の雨温図を見る ・札幌の雨温図と比較することで、寒帯の寒さのイメージを持つ 課題の提示 イヌイットは、どのような暮らしをしているのだろう 展開 2. 衣食住に分けて調べ、ノートに整理していく(15分) ・読み取れること(教科書本文や写真などを見れば調べられること) ・考えられること 3. 整理したことを確認する(13分) 伝統的な生活と、そうでない生活に分けることで、生活の変化を知る 4. イヌイットの暮らしが、なぜ変化してきているのかを考察する(7分) ・便利さを求めた結果なのではないか ・政府の方針によるものではないか → なぜそのような方針が出されるのだろう？ ・こうした変化は、日本人にもあてはまるのではないか まとめ(5分) 寒帯に住むイヌイットは、冬は雪でできたイグルーに、夏はあぎらしの皮で作ったテントに住み、移動しながら狩りをしてあぎらしやカリブーを食べて生活してきた。現代では定住が進み、伝統的な生活も見られなくなっているが、伝統的な食生活は残っている。	

実践事例

社会

学年 1 年	関係・連携の考えられる教科等 国語・音楽・美術
授業内容 書院造と能を中心に，室町文化の特色について扱う。書院造は現代の和風建築の源流になった。また能は，現代にも受け継がれている芸能であり，特に金沢市においては中学生を対象とした観能教室も開催されていることを理解する。	
教科等で身に付けたい力（本時について） ・武家政治の展開や民衆の成長を背景とした社会や文化が生まれたことを理解し，現代にも結び付いているといった知識を身に付けている。	育成したい資質・能力 ①日本の伝統や文化に関する理解
授業のポイント・流れ 導入（7） 銀閣や書院造，龍安寺の石庭に関するデジタル教科書の動画を見る。 雪舟の水墨画や，現代の能の写真を見る。 課題 室町時代の文化は，これまでの文化とどう違うのだろう 展開 活動その1（15） 能や書院造について調べたことをふまえて，4人のグループで，課題の答えについて話し合う。 観能教室を終えた3年生が書いた新聞も参考にする。 活動その2（10） 4人グループの半数を入れ替え，相手に自分たちが調べて話し合ったことを伝える。 （能を調べた生徒が書院造を調べた生徒に説明し，書院造を調べた生徒は能を調べた生徒に説明する。） 活動その3（10） 書院造と能に共通する，これまでの文化との違いについて考えたことを発表する これまでの文化は自分たちの生活に直接深く関わっているとは言えないものが多かったが，室町の文化は書院造や能のように，自分たちの身近にも見られたり関連したりする点が見られる。 まとめ（8） 能や，その継承への取り組みに関する映像を見る。 感じたことや考えたことなどについて，ペアで意見交換し，発表する。 ・音楽の時間に学んだ民謡と共通する点がある気がする。	

実践事例

社会

学年 2 年	関係・連携の考えられる教科等 国語
授業内容 「幕府政治のまとめ」 江戸時代には、様々な改革が行われてきた。それぞれの改革の特色を整理し、まとめることで、時代の流れを整理する。また、浮かび上がった特色を川柳・狂歌とすることにより、三大改革等への理解を深める。	
教科等で身に付けたい力（本時について） ・江戸幕府の政治改革と政治の行き詰まりについて関心を高め、それぞれの政治改革の特色をとらえ、表現することができる。 【思考・判断・表現】	育成したい資質・能力 ①日本の伝統や文化に関する理解 政治改革の特色を川柳にすることで、江戸時代より、庶民に親しまれてきた川柳の良さについて理解する。
授業のポイント・流れ 導入 1 幕府政治のまとめ（20分） 既習の幕府政治について、各自でまとめる。 ・徳川綱吉…財政難，貨幣改鑄，生類憐みの令 ・新井白石…正徳の治，貨幣改鑄，長崎貿易の制限 ・徳川吉宗…享保の改革，上米の制，新田開発，目安箱，公事方御定書 ・田沼意次…株仲間の奨励，印旛沼干拓，商工業の活性化，賄賂の横行 ・松平定信…寛政の改革，棄捐令，困米の制，（ラクスマン来航） ・水野忠邦…天保の改革，株仲間の解散，上知令，（アヘン戦争） 展開 課題：特色をとらえた川柳・狂歌をつくろう 2 川柳・狂歌（10分） まとめた特色をもとに，川柳・狂歌をつくる。 ・「役人の 子はにぎにぎを 良く覚え」 ・「白河の 清きに魚の 住みかねて もとの濁りの 田沼恋しき」 3 グループで交流する（15分） グループで交流し，グループのベスト1を決定する。 クラスで共有する。 まとめ 4 本時の振り返り（5分） 生徒作品より ・じいちゃんの 政治まねする 孫の愛 ・質落とし 我らの収入 急上昇 ・身分秩序 推した朱子学 人よりも 犬が上なの 犬公方様 ・インフレか 犬とお寺で お手上げた ・二千両 沼に捨てれば お奉行に ・人返し 結局自分が 替えされる ・やめるんだ 犬のけんかに 水さすな 冷やすべきものおまえの頭 ・金銀銅 何を混ぜても 金は金 今の裕福 幻影となり ・異国船 調子に乗って 打ち払い 英（はな）が開けば ビビリ水やり	

実践事例

社会

学年 3 年	関係・連携の考えられる教科等 音楽・美術・技術・家庭・保健体育
授業内容 ・前時から「文化」とは何か、「文化」の役割はなにか？と考えてきた。その中で日本らしいものは何かと考え、そこには多くの「伝統文化」といわれるものが関わっていることを確認した。そこで、本時では、日本文化の独自性ともかかわりの深いであろう伝統文化の保存や継承について、地域や国の文化の独自性の観点から、自分の考えを持ち、日本文化を多面的（地域・世界視点）・多角的（経済・観光・文化など）に考察する。	
教科等で身に付けたい力（本時について） ・伝統文化の保存や継承の意義について、日本文化の独自性や地域的多様性などの観点から、自分なりの意見を持ち表現している。 【思考・判断・表現】	育成したい資質・能力 ①日本の伝統や文化に関する理解 ③文化の伝承・創造への主体性など
授業のポイント・流れ（配時） 導入 1. 「観光」から国の魅力を考える。（5） - 旅行会社の旅行先ランキングと旅行目的のデータを参考に、観光地としての人気は、その地域の独自性などから生まれていることを確認し、独自性を生み出す文化に着目させる。 課題：なぜ「日本」の「伝統」的な文化を残していくのか？ 展開 2. 「文化」（10）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・① - 前時で確認した身の周りの文化から、「日本らしい」文化といえるものを挙げて、2つに分類する。分類：「現代」の文化と「伝統的」な文化 - この「日本らしさ」の範囲は様々あるが、自分の中で他の国と違う「日本らしさ」を持っていることを認識させる。 - 伝統的な文化の中でハイカルチャーと生活文化に分類し、時代を経て存続が危ぶまれる文化もある。 ※ハイカルチャーは、生活文化に根差しながらも、より専門的に継承されてきた文化ととらえて行った。 3. 伝統文化の継承と保存の意義（20）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・③ 「伝統的な文化を守るべきか？」と聞かれればほとんどの生徒が肯定するが、「なぜ必要なのか？」を問いかけ、持続可能な発展とも関連付けてその必要性を考えさせる。 - 日本の伝統文化に魅せられた外国人の例、導入時の資料などを使い、グループで話し合う。（ジグソー法または通常のグループ活動） - 伝統を守る事例や日本の伝統文化に対しての海外からの評価の資料などを見て、伝統文化を守ることが持続可能な社会の形成にどのような役割を果たすのかを考えて、伝統文化の価値を改めて考える。 4. 発表（10） - 文化を形作ってきた自然環境や歴史、自国へのアイデンティティ、観光などにかかわるものを取り上げる。 5. まとめ（5）	

実践事例

社会

学年 3 年	関係・連携の考えられる教科等 総合・技術・家庭・美術・体育・音楽
授業内容 金沢市の課題をもとに伝統や文化が果たす役割を踏まえて、その保存や継承のための取り組みを提案することで、身近な地域の政治・まちづくりに自分がどのように関わることができるのか考える。	
教科等で身に付けたい力（本時について） 主権者としての政治参加の在り方について多面的・多角的に考察，構想し，表現している 【社会的な思考・判断・表現】	育成したい資質・能力 ①日本の伝統や文化に関する理解 ③文化の伝承・創造への主体性など
授業のポイント・流れ 導入 1. 金沢の魅力と課題を知る(5) - 旅行会社の旅行先ランキングと旅行目的のデータを参考に，観光地としての人気は，その地域の独自性などから生まれていることを確認し，独自性を生み出す文化に着目させる。 展開 2. 課題の分析と解決の取り組みを考察する(30)・・・・・・・・・・①，③ - どのような課題とその原因があるのか資料から読み取る。 旧城下町区域の世帯人員，高齢世帯数，空き家の増加の資料を提示し，旧城下町区域が現在少子高齢化が進んでいることを読み取る。 歴史的建築物の消失，伝統的行事や営み，伝統産業の減少の資料を提示し，旧城下町区域の少子高齢化と関連付けて理解する。 - 上記の課題と原因から，どのような取り組みが考えられるか話し合う。 3. 発表(10) - 歴史的建造物の消失や伝統的行事や営みが減少していることを中心地の人口増加などから取り組むことを提案したり，自らが伝統的な文化に触れることからでも自らができることを共有する。 4. ふりかえり(5)	

数学科

北村 悟朗

戸水 吉信

北室 好章

共同研究者 伊藤 伸也（金沢大学）

1. 伝統文化教育を進めるに当たって

数学は、古代文明よりその形跡が残り、現代においてもなお続く、数量や図形とそれらの関係や構造に関する人類の伝統文化の一領域である。数学の始まりは、経済活動における記録と計算、土地・建物などの測量・設計、暦に関わる天文観測などを行う際に、数を用いて計算したり図形を考察して量を測定したりする技法が積み重ねられ発展したことによる。その過程で、計算のアルゴリズムや測定の関係が公式や法則として認識され、数学の学問としての歩みが始められたとされる。

また、数学は、それ以外の領域において活用され様々な豊かな伝統文化の創造に寄与してもきた。人文・社会・自然科学、工学や医学等の諸学問、芸術やスポーツ、更には農林水産、製造・建築・工業、情報通信・金融・サービスをはじめとする諸産業等、様々な社会生活において、数学は、洋の東西を越え古くから多様に活用されてきた。こうした数学の創造とその活用の活動は、単純に二分することができるものではなく分かちがたく行われてきたともいわれている。

数学と伝統文化のこのような関係を踏まえると、数学科における伝統文化教育は、主に次の二つの教育を意味している。すなわち、数学という伝統文化の教育と、数学を伝統文化に活用する教育である。

数学科における伝統文化教育を進めるに当たって、伝統文化としての数学の教育においては、生徒が、数学が創られた歴史的な過程を追体験することを目指すこととする。つまり、数学の教育を、数量や図形等に関する出来上がった知識体系の伝達ではなく、そうした内容を生徒が見いだし発展させ整理する一連の活動の支援ととらえる。

数学を伝統文化に活用する教育においては、生徒が、数学を伝統文化に活用する歴史的な過程を追体験したり、今日的視点から活用したり、伝統文化のよさを数学的に解き明かしたりすることなどを目指す。

数学科におけるこのような伝統文化教育でなされる生徒の活動は、日常の事象や社会の事象として伝統文化に関するものが主となるとはいえ、平成 29 年告示中学校学習指導要領における次の「数学的活動」と整合的である。

- ア 日常の事象や社会の事象を数理的に捉え、数学的に表現・処理し、問題を解決したり、解決の過程や結果を振り返って考察したりする活動
- イ 数学の事象から見通しをもって問題を見いだし解決したり、解決の過程や結果を振り返って統合的・発展的に考察したりする活動
- ウ 数学的な表現を用いて論理的に説明し伝え合う活動

したがって、数学科では、この「数学的活動」の実現と新たな具体的提案に取り組むこととする。

2. 能力・態度の育成に当たって

(1) 学校全体として育成する資質・能力について

数学科における伝統文化教育を通じて、「学校全体として育成する資質・能力」を踏まえた、次の「数学科として育成する資質・能力」の育成を目指す。

- ① 和算をはじめとする日本の伝統や文化に対する知識及び理解
- ② 数学に関する伝統文化への理解に基づいた多様な文化を尊重する態度
- ③ 数学という文化や他の文化の伝承・継承への主体性

また、数学科において生徒が数学を発展させたり伝統文化に活用したりすることを目指すとき、平成 29 年告示中学校学習指導要領における数学科の目標として示された次の「数学的に考える資質・能力」は、その基礎となるものであり、また軌を一にする資質・能力である。

- (1) 数量や図形などについての基礎的な概念や原理・法則などを理解するとともに、事象を数学化したり、数学的に解釈したり、数学的に表現・処理したりする技能を身に付けるようにする。
- (2) 数学を活用して事象を論理的に考察する力、数量や図形などの性質を見いだし統合的・発展的に考察する力、数学的な表現を用いて事象を簡潔・明瞭・的確に表現する力を養う。
- (3) 数学的活動の楽しさや数学のよさを実感して粘り強く考え、数学を生活や学習に生かそうとする態度、問題解決の過程を振り返って評価・改善しようとする態度を養う。

したがって、数学科では、この「数学的に考える資質・能力」の育成をも目指すこととする。

数学科において、伝統文化である数学を発展させたり他の伝統文化に数学を活用したりする経験を重ねる機会を設け、伝統文化に関する「数学科として育成する資質・能力」や「数学的に考える資質・能力」を育成することで、数学科で学んだことを伝統文化に関わる現在や将来の行動につなげられる生徒を育てることができる。

(2) 関連・連携を図った教科等について

【第1学年 「算木」】

算木の発祥は中国であるという説もあり、社会科との関連が期待できる素材の一つだ。ここでは、算木がそろばんの基になって、現在はそろばんのほかにも便利な計算機器等が発達していることから、当時の技術の高さやその発展過程にも目を向けさせ、生徒の日本の伝統や文化に関する理解を育てたいと考えている。

【第1学年 「地震」】

P波やS波を直線とみなしてグラフをかき、このことを利用して緊急地震速報を知らせる仕組みを考える授業である。理科1年で震源・震央・初期微動・主要動・P波・S波などの用語を習い、地震について学ぶ。緊急地震速報の仕組みが数学と関係しているところを理解することがこの授業のポイントであり、理科と連携した授業を考えた。

【第2学年 「和傘」】

直角三角形を回転させてできる円錐を、和傘が閉じたときと開いたときの形に見立てて、その体積と側面積を比較し、分かることを考察する授業を行った。便利なものを考える力として、技術・家庭科との連携や、和傘の歴史の面で社会科との連携、また、総合的な学習の時間に行っている「金沢調べ」との連携が考えられる。

【第2学年 「旗源平」】

サイコロを2つ振って簾のやりとりをする、金沢の伝統的遊戯「旗源平」を題材に、確率の授業を行った。総合で地元金沢の調べ学習を行っていることと連携ができると考えている。また、道徳の「郷土の伝統と文化の尊重」との関連があると考えている。

【第2学年 「和菓子」】

江戸時代の参勤交代の際、徳川将軍家に献上された大きな和菓子の値段を求める授業。「和菓子」という伝統的な食文化を扱うことで、家庭との連携が考えられる。また、江戸時代や参勤交代を扱うので社会との連携が考えられる。さらに、和菓子に込められた思いをもとに授業を行った学校保健との連携が考えられる。

【第3学年 「最後の晩餐」】

レオナルド・ダ・ヴィンチの「最後の晩餐」を題材に、絵に隠れた図形の相似を考えさせる授業を行った。遠近法は美術科で学ぶ技法であり、連携していると考えている。また、2年国語科で「君は最後の晩餐を知っているか」という題材があり、関連があると考えている。

3. 成果と課題

各実践事例ごとに、本研究の成果と課題を述べる。

(1) 第1学年・算木

◎成果

学校全体として育成する資質・能力に関しては、①和算をはじめとする日本の伝統や文化に対する知識及び理解に関わって、生徒のワークシートの記述に次のようなものが見られた。

- ・算木の仕組みがわかってよかった。
- ・新しい知識が増えてうれしかった。
- ・そろばんは算木に似ていて、筆算は算木に似ていることがわかった。
- ・指では表せない数を算木では表して、わかりやすかった。
- ・棒を使うということは、数を使うより分かりやすい考え方だなと思った。

授業時の生徒の様子から、算木のきまりについての理解を深め、それを使って正負の数の加減の計算をすることが、ほとんどの生徒ができていたと感じている。また、中には赤い算木と黒い算木が合わさって0になる点を見つける生徒もいて、和算に対する知識及び理解の育成につながったと考えている。

また、数学的に考える資質・能力の育成に関わって、次のような感想も見られた。

- ・乗法や除法ができるのか気になった。
- ・小数や分数はどう表すのかが気になった。
- ・昔の人は計算を簡単にするために、こんなやり方を生み出したのがすごいなと思いました。
- ・昔の人々の計算をやってみて、ちょっとめんどくさかった。なぜなら、今の計算方法が発見された計算の中で最もやりやすいものだからだ。でも、昔の人はこれでやっていたんだと感心した。

・算木は難しく計算も大変だったので、電卓は便利で、僕たちは恵まれているなと思った。

このように、数学的活動を通して新たな課題を見つけたり、既存のものの良さを感じ取ったり、問題解決の過程を振り返る中で評価・改善しようとする姿勢を育てることができたのではないかと考えている。

◎課題

生徒の感想から、算木を使った計算方法に理解を示しつつも、その利点をほとんど感じることはできなかった生徒も何人かいることがわかった。算木を扱うよさを感じ取らせ、そこから自分たちの現在の計算方法について再考させる場面を、きちんと設定することが課題である。

(2) 第2学年・和傘

◎成果

学校全体として育成する資質・能力に関しては、②数学に関する伝統文化への理解に基づいた多様な文化を尊重する態度の育成に関わって、生徒のワークシートの記述に次のようなものが見られた。

- ・私たちが普段使っている傘（洋傘）と和傘の違いがわかった。
- ・洋傘は外側に布が、和傘は内側に布が折りたたまれることを知った。
- ・和傘は布がきれいに中に折り込まれ、より持ち運びがしやすい。和傘の技術はすごい。

生徒の様子を見ると、和傘と洋傘を比較することで、和傘の技術のすばらしさに気づく生徒が多くいた。また、同時に和傘が高価であることにも気づき、洋傘が手軽に手に入ることへの気づきもあった。本授業は、「和傘という伝統文化の理解に基づいた、西洋の傘のよいところも尊重する態度」の育成につながるものではないだろうか。

また、数学的に考える資質・能力の育成に関わって、次のような感想も見られた。

- ・今まで学習してきた文字式の計算が、様々なことを分かりやすく説明するのに役立つことが分かった。数学ってすごい。
- ・他に身近なものや伝統的なもので、数学で解明できるものを探したい。

生徒の様子から、傘を円錐とみなし、数学を活用してその性質を論理的に考察する力や、数学を生活や学習に生かそうとする態度の育成につながったと考えられる。

◎課題

同じ直角三角形を短辺と長辺をそれぞれ軸にして回転させたものが、同じ傘を開いたときと閉じたときに見立てられるかどうかは、正直分らないところである。生徒には、母線の長さが同じで、傘の骨の長さも変わらないから、と説明し、一応生徒は納得していた。しかし、身の回りの問題を数学的にモデル化する際には、どこまでを正しいと認めるか、課題の残るところである。

(3) 第2学年・旗源平

◎成果

学校全体として育成する資質・能力に関しては、③数学という文化や他の文化の伝承・継承への主体性の育成に関わって、生徒のワークシートの記述に次のようなものが見られた。

- ・金沢の文化にも確率が隠れていて驚いた。
- ・他のゲームの中の確率も気になりました。
- ・旗源平は実際にやってみるとすごく盛り上がった。もっとやる機会が増えるとよい。
- ・旗源平は運が作用するゲームで、技能の差があまりなく遊べるゲームです。金沢のゲームと知っ

てとても誇らしく思いました。多くの人に知ってもらいたいです。

授業後の生徒の様子から、現在あまり遊ばれなくなったこのゲームを、家でもやってみたい、他の人にも広めたいという雰囲気が伝わってきた。サイコロのどの目の出方も同様に確からしいことに基づいて、技能の差がなく遊べることに気づいた生徒もいて、文化の伝承・継承への主体性につながったと考えている。

また、数学的に考える資質・能力の育成に関わって、次のような感想も見られた。

- ・チンがでやすいと思っていたが、やはり $1/4$ と、出やすい確率だった。
- ・何かがもらえる確率が $2/3$ と、おもったより高くてびっくりした。
- ・カンカンドとゾロ目の確率が $1/6$ で同じ、もう 1 回振れる確率と何ももらえない確率が $5/18$ で同じなど、一見違うように思える確率が実は同じで驚いた。

このように、感覚で思っていたことを数値化して自分の考えを述べる力、すなわち、事象を数学的に表現・処理する技能につながったと考えている。

◎課題

1 時間の中で、旗源平のルールを説明し、実際に遊び、様々な出目について数学的に考えるのは、時間が足りなかった。それぞれの意見を発表する場面が教師主導になり、せっかく生徒から出た様々な意見を深め合うまでには至らなかった。次に実践を行う際には、2 時間続きで、生徒達が自分たちの言葉で深め合う授業を目指したい。

(4) 第 2 学年・和菓子

◎成果

学校全体として育成する資質・能力に関しては、③数学という文化や他の文化の伝承・継承への主体性の育成に関わって、生徒のワークシートの記述に次のようなものが見られた。

- ・和の心と数学はつながっていることが分かった。数学が身の回りの問題を解決するのに役立つことを実感した。
- ・今売られていない献上品だった長生殿の値段を、今まで習った知識を用いて求めるのが楽しかった。様々な視点を取り入れながら、他のものでもやってみたい。

本授業は、和菓子職人に払われる人件費を考えることから、伝統的な技術の伝承に必要な事柄を考えるきっかけにすることをねらった。しかし生徒は、昔、徳川幕府に献上された大きな和菓子の値段を、数学を用いて論理的に求めることにワクワク感を覚え、単純に授業自体を楽しんでいた。上記のような感想もあったが、「楽しかった」「またやりたい」「やりがいを感じた」などの感想が大多数を占めていた（約 9 割）。課題を解決する必然性を感じさせることが、特に数学科では難しいと考えているが、この授業では、それは達成できたように思う。文化の伝承・継承への主体性につなげることは、本授業の課題としたい。

数学的に考える資質・能力の育成に関わっては、次のような感想が見られた。

- ・初めは比例しているのではないかと思い 1g あたりの値段を求めていたけど、全然つじつまが合わなくなり、1 次関数ではないかと思い、グラフに表してみるとドンピシャで、求めることができた。b にあたる 300 円は何なのだろうと思った。
- ・1g あたりの値段を求めたり、手数料まで考えたりして求めることがとても面白かった。論理的な考え方ができた。
- ・最初、b にあたるものが箱代だと思っていたので高いなと思ったが、手数料だと思ったら、逆に

安すぎると思った。

- ・比や連立方程式、1次関数など、値段の求め方に色々な考え方があって面白かった。

これらの感想を見ると、比例する予想がうまくいかず、1次関数を用いるなど、数学のよさを実感して粘り強く考える力や、bにあたるものをもう一度実際の事象にあてはめて考え直すなど、問題解決の過程を振り返って評価・改善しようとする態度につながったのではないかと考えている。

◎課題

先述の通り、文化の伝承・継承への主体性につなげることをまずは課題として挙げておきたい。また、2点の情報だけで、それを1次関数とみなしてよいか、という疑問を残したまま授業を終えたことが課題である。実際に1次関数になるかどうかかわからない題材を取り扱い、2点の情報しか得られないまま、授業づくりを行った。改めて「伝統文化を数学的に扱う」ことの難しさを実感した。それでも本時は、「1次関数とみなした場合はこういった数値になるよ」「他の方法も考えられるが、今は既習の考えで解決してみよう」ということで授業を締めくくりたかったのだが、それが生徒に伝えきれなかった。身の回りの問題を生のデータで取り扱う場合は、きれいな数学モデルにならないことが多く、生のデータを扱うのか、どの程度モデル化するのか、いつも悩んでいるところである。他の授業も含めて、数学科としてのねらいは外さないように、授業を組み立てていくことを再認識して、今後の課題としたい。

（5）第3学年・最後の晚餐

◎成果

学校全体として育成する資質・能力に関しては、②数学に関する伝統文化への理解に基づいた多様な文化を尊重する態度の育成に関わって、生徒のワークシートの記述に次のようなものが見られた。

- ・遠近法について知れてよかったです。
- ・西洋の絵と日本の絵の違いについて知れた。

本授業は、「伴大納言絵巻」と「最後の晚餐」を比較して、どこが違うかを考えさせた。生徒からは、西洋の絵は日本の絵に比べて、だんだん小さくなっているという意見や、遠近法が使われていて、消失点もあるなどといった意見があった。日本の絵の技法を理解しつつ、西洋の絵の遠近法といった技法も尊重することにつながるのではないだろうか。

また、数学的に考える資質・能力の育成に関わって、次のような感想も見られた。

- ・三角形では2つの角が同じであれば相似であるのに、すべての角が等しい四角形は相似ではないことを知り、面白いと思った。
- ・相似かどうかを判断するとき、辺の比や高さの比も等しいかどうかを考えることが大切である。

既習事項を利用し、説明する生徒の様子から、数学を活用して事象を論理的に考察する力、数学的な表現を用いて事象を簡潔・明瞭・的確に表現する力の育成につながったと考えられる。

◎課題

授業の進め方について、次のような課題が考えられる。

- ・伝統文化に関連して、日本画と西洋画との違いに目を向けさせたかったが、あまり時間をかけることができず、その点の指導は生徒に伝わりにくく難しい面があった。
- ・授業では「相似である」ことの証明を多くしてきたが、「相似ではない」ことを説明することは、ほとんどしておらず、指導の難しさを感じた。
- ・50分の授業の中に取り入れたい内容を多く入れすぎたため、課題を解決させるための時間が少なく

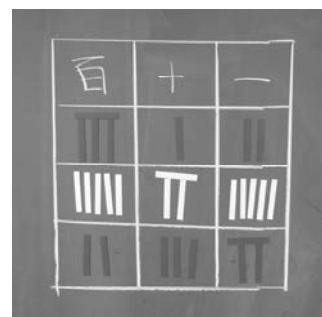
なった。

今後、生徒の実態にあった課題の設定，問題解決の時間配分，グループ活動の必要性などを考えた授業づくりが必要である。

実践事例

数学

学年 1 年	関係・連携の考えられる教科等 社会
授業内容 - 算木の発祥とその歴史について理解し、算木を使った数の表し方について確認する。 - 算木を使った正負の数の加法と減法について、その既習を活かしながら解決する。	
教科等で身に付けたい力（本時について） - 算木を使った正負の数の加法と減法について、既習を活かしながら考えることができる。【見方・考え方】 - 算木を使った数の表し方について理解している。【知識・理解】	育成したい資質・能力 ① 日本の伝統や文化に関する理解
授業のポイント・流れ - 本時の課題を知る。（５分） - 算木について、知っていることを生徒から聞き取り、情報を整理する。 - 算木の発祥とその歴史について、一説から確認する。 （①日本の伝統や文化に関する理解） <正負の数の加減を計算するとき、算木を使うとどのように表せるだろうか> - 算木を使った数の表し方と、算盤を使った数の表し方について理解する。（５分） - 算盤を使って正負の数を算木で表す。（５分） 「算木の本数を数えるだけで解決できそうだ。」 「赤い算木と黒い算木が合わさるということは、０になるということだ。」 - 算盤を使って、正負の数の加法と減法（繰り下がり計算なし）を算木で計算する。（３分） - 自分の考えを学級全体に向けて発表し合う。（２分） - 算盤を使って、正負の数の加法と減法（繰り下がり計算あり）を算木で計算する。（１５分） 「上から下の数を引くことはできないから、どうしたらよいかなあ。」 「赤い算木と、黒い算木が混じった答えになった。これでよいのかなあ。」 - 計算をしてわかったことを、学級全体に向けて発表し合う。（５分） - 考察・感想を記入し、学級全体に向けて発表し合う。（１０分） 「赤い算木と黒い算木が合わさって０になるところにとっても納得がいった。」 「後にそろばんをつくる基となったことを聞いて驚いた。」 「算木を使って計算するのは、正直やりにくかった。だから、そろばんやそれ以外の計算方法に移り変わっていったのかもしれない。」 「算木があったからこそ、現在の生活（そろばんや電卓など）があるのかもしれないと思った。」	



図：本時で扱う算木の一例

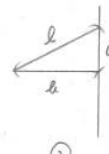
実践事例

数学

学年 2 年	関係・連携の考えられる教科等 社会・技術・家庭・総合
授業内容 ・ 直角三角形を回転させてできる円錐を，和傘が開いたときと開いたときの形に見立てて，その体積と側面積を比較し，わかることを考察する授業。	
教科等で身に付けたい力（本時について） ・ 回転体の体積と表面積を文字のまま計算できる技能。 【数学的な技能】 ・ 文字式の計算（単項式の乗除）を用いて，図形の性質を説明することができる力。 【見方・考え方】	育成したい資質・能力 【②多様な文化を尊重する態度】 和傘と洋傘の比較により，それぞれのよいところを理解するとともに，側面積の変化が，和傘と洋傘でどんなところに出ているかを理解する。
授業のポイント・流れ < 同じ図形を軸を変えて回転させた立体の体積と表面積を比較しよう > - 長方形の長辺，短辺をそれぞれ軸として回転させる。そのときできる 2 種類の円柱の体積と側面積を比較する。（20 分） - できる立体をロールケーキとホールケーキに見立てる。 - 体積は違うのに，側面積が同じであることを文字式を使って説明する。 - 直角三角形を，斜辺以外の 2 辺（長辺，短辺とする）をそれぞれ軸として回転させる。そのときできる 2 種類の円錐の体積と側面積を比較する。（20 分） - できる立体が何に見立てられるか，円柱をケーキに見立てた経験をもとに考える。 - 傘を開いたときと閉じたときに見立てられることに気付く。 - 和傘と洋傘を実際に見せながら，和傘が開いたときに綺麗な円錐になっていることを確認し，和傘の技術のすばらしさを実感する。 - 円錐は体積も側面積も長辺を軸として回転させた方が小さいことを，文字式を使って説明する。 < 体積や側面積の変化が何を表しているか考えよう > - 体積や面積の変化が傘の何に表れているか考える。（10 分） 「閉じているときに体積が小さいので持ち運びしやすい。」 「開いているときに側面積が大きいので，より雨を防ぎやすい。」 「閉じているときに側面積が小さいので，布や紙が余るはず。洋傘ではそれが外に出ているが，和傘ではそれがきれいに中に折り込まれ，より持ち運びがしやすい。和傘の技術はすごい。」 ◎ 授業後の生徒の感想より - なぜ布が余るのか数学を使って説明できて良かった。それにしても和傘の技術はすごい。 - 他に身近なものや伝統的なもので，数学で説明できるものを探したい。	



☆ 直角三角形 $a < b$



①の体積は $\frac{1}{3}\pi a^2 b$ で②は $\frac{1}{3}\pi a b^2$ である。

この2つの式の共通部分を消去し、

$$\frac{1}{3}\pi a^2 b < \frac{1}{3}\pi a b^2$$

$a < b$ と仮定して、①よりも②の方が体積が大きくなる。

①の側面積は $\pi a l$ で②の側面積は $\pi b l$ である。

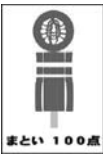
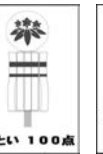
この2つの式の共通部分を消去し、

$$\pi a l < \pi b l$$

$a < b$ と仮定して、①よりも②の方が側面積が大きくなる。

実践事例

数学

学 年		関係・連携の考えられる教科等	
2 年		総合・道徳	
授 業 内 容			
・金沢の伝統的な遊び「旗源平」を実際に体験する。 ・実際に旗源平を体験して、興味を持った出目や様々なことがらが起こる確率を計算で求める。 ・確率を比較することで分かることを考察する。			
教科で身に付けたい力（本時について）		育成したい資質・能力	
・サイコロを2つふった時の様々な確率を正しく求めることができる。 【数学的な技能】 ・確率を比較することで、ことがらの起こりやすさを数学的に比較することができる。 【見方・考え方】		【③文化の伝承・創造への主体性など】 金沢の伝統的な遊戯である「旗源平」のルールについて数学的に考える中で、この遊びが長きに渡り伝えられてきた理由を考え、こういったものを後世に伝えていこうとする態度につなげる。	
授 業 の ポ イ ン ト ・ 流 れ			
1. 旗源平のルールを理解する。（5分） ・旗の種類（左が源氏、右が平氏）と本数・  1本  1本  5本  10本  1本  1本  5本  10本 ・平氏側と源氏側に分かれ、交互にサイコロを振る。 ・サイコロの出目によって、旗のやり取りをする（右図）。もう一度サイコロを振ったり、旗を返す出目もある。 ・点数によって、旗の交換をする。 ・まといを先に取ったほうが勝ち。			
2. 実際に旗源平で遊ぶ。（25分） ＜旗源平の様々な確率を計算で求めよう。＞			
3. 各自が調べたい確率を考えて、計算で求める。（10分） ・「シノニの出る確率（1／18）」「もう1回振れる確率（5／18）」 「旗がもらえる確率（2／3）」「旗がもらえない確率（5／18）」 「チンという確率（1／4）」「カンカンドの確率（1／6）」 など。			
4. 全体で色々な確率を共有し、さらに考えを深める。（10分） 「もう1回振れる確率と何も起こらない確率が同じ。（5／18）」 「ゾロ目が出る確率とカンカンドが出る確率が同じ。（1／6）」 「（1，1）などゾロ目の場合は目の出方が1種類しかないが、（2，3）などのゾロ目以外は目の出方が2種類あるので、それぞれの出目の出方は同様に確からしいといえないのではないか。」 （関連して）「出目の種類が21種類なので、分母を21と間違えそうになる。」			
◎授業後の生徒の感想			
・金沢の文化にも確率が隠れていて驚いた。 ・旗源平は運に頼るゲームだが、それでも盛り上がるよいゲームだと思う。 ・金沢市の伝統の遊びが授業として学べて楽しかったです。誰かに伝えたいです。			

実践事例

数学

学年 2 年	関係・連携の考えられる教科等 家庭・学校保健・社会
授業内容 ・金沢の伝統的和菓子「落雁」の重さと値段の関係性を，一次関数を用いて考察する。 ・江戸時代に参勤交代で献上された大きな落雁を，今売るとしたらいくらになるか考える。	
教科等で身に付けたい力（本時について） ・具体的な事象を一次関数を用いて捉え，表，式，グラフを用いて説明することができる。 【数学的な見方や考え方】	育成したい資質・能力 【③文化の伝承・創造への主体性など】 和菓子職人の技術に見合う手間賃を考えるきっかけにしたい。
授業のポイント・流れ 1. 金沢の伝統的和菓子について知る。（10分） ・江戸時代から今に伝わる落雁で，日本三銘菓の1つであるものがある。 ・参勤交代の際に，大きな落雁が前田家から徳川將軍家に献上されている。 現在売られている落雁と，徳川家に献上された落雁の模型 <徳川家に献上された大きな落雁を，今売るとしたらいくらだろう> 2. 本時の課題を知り，必要な情報を整理する。紅白2個セットの値段を考える。（10分） ・落雁は，均一に混ぜられた材料を木型に入れて職人の技で固められる。今も手作業で作られている。 ・現在はミニサイズ 3g 6個入り 500円。通常サイズ 14g 4個入り 1000円。 ・大きな落雁は，50丁掛という木型で作られた。体積が通常サイズの落雁の50倍。 ・材料が均一に混ぜられているから，重さは体積に比例しそう。よって重さも50倍。 3. グループで協力して課題を解決する。（20分） ・「重さは体積に比例したが，値段は重さには比例しなさそう。」 ・「値段と重さの関係を知りたい。」「表やグラフを使ってみようか。」「式で関係性を表せそうかな。」 ・式できちんと求めると 19473.6…円になるが，約 20000円くらいである解答を目指す。 ・式は難しいから，グラフも有効活用する。 4. それぞれのグループの考えを発表し，説明に用いた数学的根拠を確認する。（10分） ・人件費などの定量に，材料の重さに比例して値段が加えられており，一次関数のようになっている。 ◎授業後の生徒の感想 ・今売られていない献上品だった長生殿の値段を，今まで習った知識を用いて求めるのが楽しかった。様々な視点を取り入れながら，他のものでもやってみたい。	

実践事例

数学

学年 3 年	関係・連携の考えられる教科等 美術・国語
授業内容 ・レオナルド・ダ・ヴィンチの「最後の晚餐」を見て，相似な図形を見つける。見つけた2つの図形が相似であることを説明する。	
教科等で身に付けたい力（本時について） ・2つの四角形が相似の位置にあることから，2つの四角形が相似になることを説明することができる。	育成したい資質・能力 ② 伝統文化への理解に基づいた多様な文化を尊重する態度
授業のポイント・流れ 1 導入（10分） ・「伴大納言絵巻」と「最後の晚餐」の絵を見せ，書かれた時代などについて紹介し，2つの絵の中の図形等を考える。 「伴大納言絵巻には，長方形や平行四辺形や三角形がある。」 「最後の晚餐には，台形がある。遠近法が使われている。消失点がある。」 （② 伝統文化への理解に基づいた多様な文化を尊重する態度） ・ワークシートを配付する。 2 遠近法の書き方を考える。（10分） ・2等分，3等分の線のひき方を発表する。 3 本時の課題を知り，相似の定義を確認する。（5分） ＜「最後の晚餐」に隠れた図形の相似とは？＞ 相似とは ・形を変えずに一定の割合に拡大または縮小して得られる図形。 ・相似の中心からの距離の比がすべて等しい。 4 四角形A B C Dと四角形A' B' C' D'が相似かどうかをグループで考える。＜図1＞（15分） 「辺と高さの比が違うので，相似にはならない。」 「相似の中心からの距離が違うので，相似にはならない。」 5 相似な四角形を探す。＜図2＞（5分） 「$OA : OA' = OB : OB' = OC : OC' = OD : OD' = 1 : 2$になっている。」 「2つの四角形が相似の位置にあるから，四角形A B C D ∽ 四角形A' B' C' D'となるよ。」 6 今日の授業で学んだことをワークシートに書く。（5分） ・三角形では2つの角が同じであれば相似であるのに，すべての角が等しい四角形は相似ではないことを知り，面白いと思った。 ・相似かどうかを判断するとき，辺の比や高さの比も等しいかどうかを考えることが大切である。 ・相似ではなくてびっくりした。遠近法について知れてよかったです。	

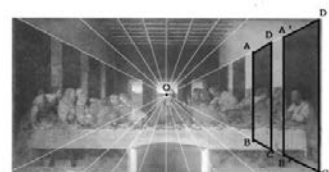


図 1

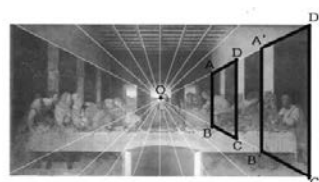


図 2

理科

兵地 梓

横山 雄介

北村 太郎

共同研究者 松原 道男（金沢大学）

1. 伝統文化教育を進めるに当たって

本校理科では平成 26 年度より、学校教育目標の目指す生徒像「自ら学ぶ生徒」の実現を目指し、これまでの研究成果をもとに、継続的に「科学的な思考力」の育成を行ってきた。その方法の一つとして、より日常生活や社会・環境の問題を捉えた課題設定や教材の選び方の工夫に取り組んできた。さらに、他教科との教材のつながりを意識した授業を計画的に行うことで、より課題に対する関心を高めるとともに、科学的な思考力の育成を図ってきた。平成 28 年度には、ここまでの実践を踏まえ、学習した知識や技能を日常生活や身近な科学技術を対象として活用し、学びを深めていけるよう工夫した。昨年度は、これまでの研究で培ってきた、課題・教材の工夫や他教科とのつながりの場面で、日本における様々な地域の伝統文化を用いるように取り組んだ。

理科の授業を通して育てたい力は科学的な見方・考え方であり、このときに扱う題材は自然に関する事象である。したがって、ここまでの取り組みも踏まえながら、理科の授業では主たる題材として伝統文化そのものを扱うことは難しいと考えている。しかし、伝統文化として残っているもので自然に関わるものについては、何かしら科学的な背景や根拠のあるものもあると考えられる。そこで、昨年度は、それらを学習内容に関連付けることで、学習に対する興味や意欲、さらに学習内容の意味や有用性を高めることにより、科学的な見方・考え方の育成を行うとともに、日本の伝統や文化についての科学的な視点からの理解を深めることを目的とした。

本年度は伝統文化を扱うときに、他教科とのつながり、題材として扱う単元や授業の中での扱い方を検討した。伝統文化は理科だけに関わっているわけではないので、教科横断的に扱うことができる伝統文化を題材にすることに取り組んだ。そうすることで、学習に対する興味や意欲を高め、理科で学習したことと、他教科で学習したことを結び付け、伝統文化に関する理解をよりいっそう深めることを目指した。また、一年次、二年次では、主に関心・意欲を高める題材として伝統文化を扱ってきたが、三年次は扱う単元や授業の中での扱い方を工夫することで、伝統文化を科学的な知識を用いて説明する、知識の活用で扱えないか検討した。

2. 能力・態度の育成に当たって

（1）学校全体として育成する資質・能力について

①日本の伝統や文化に関する理解

伝統文化となっているものには、科学的な妥当性（根拠）があるものが多いと感じており、これらを授業の中で扱うことで、伝統文化への科学的な視点からの理解を深める。

②伝統文化への理解に基づいた多様な文化を尊重する態度

自分たちの伝統文化の背景にある自然事象への理解を通して、自然を背景とした文化の崇高さを知り、畏敬の念を深め、自然を大切にし、尊重する態度を育てる。

③文化の伝承・創造への主体性など

授業で学んだ自然事象についての知識・理解が活用されている、自然を背景とした文化やものづくりを扱うことで、学習内容への興味・関心を高めるとともに、知識の活用力の育成を行う。また、授業で扱った伝統文化に関係する最新の科学的な情報を扱うことで、今後の自分たちの生活と結び付けて考える態度を育成する。

(2) 関連・連携を図った教科等について

「1. 伝統文化教育を進めるにあたって」でも述べたように、理科の授業を通して育てたい力は科学的な見方・考え方（例えば、因果、分類、定性的、定量的、時系列、空間的な視点とした思考）であり、扱う題材は自然に関する事象である。他教科でも自然が題材として扱われているものはあり、関連・連携を図ることができる。また、伝統文化の中にも自然に関わるものがあり、他教科と関連させて扱うことは可能である。ただし、自然と伝統文化が重なる題材で他教科と連携を図れるものは限られる。例えば、

- ・国語科の「古典」の作品に読まれる天体の様子を、3学年の【地球】宇宙の中の地球で扱う。
- ・社会科の「日本の様々な地域」で学習する日本に暮らす人々の生活・文化、地域の伝統や歴史的な背景を、2学年の【物質】化学変化と原子・分子、【地球】地球の大気と天気の変化で扱う。また、「世界各地の人々の生活と環境」で学習する焼畑農業を3学年の【物質】化学変化とイオンで扱い、焼畑農業の科学的な利点を考える。
- ・技術・家庭科の「材料と加工の技術」「衣食住の生活」で扱う木材の加工、金属加工、衣服の材料と性質、室内環境の工夫（季節のくらしの工夫）などを、1学年の【生命】植物のくらしとなかま、【物質】身のまわりの物質で扱う。また、「食生活と自立」で扱う調理方法を3学年の【物質】化学変化とイオンで、食品の選択と保存を3学年の【生命】生命の連続性で扱うことで科学的な理解を深める。
- ・音楽科で学習する「和楽器」を、1学年の【エネルギー】音による現象で扱う。
- ・美術科の「身近な地域や日本の文化遺産」で扱う刀鍛冶、金箔、九谷焼などを、1学年の【物質】身のまわりの物質、3学年の【物質】水溶液とイオンで扱う。

このような内容と関連を図ることで、伝統文化を科学的な見方・考え方から捉えることができ、理科の学習の目的と日本の伝統や文化に関する理解の両方を効果的に育成できると考えている。

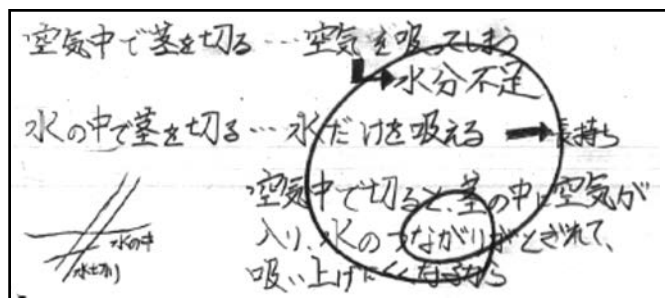
3. 成果と課題

理科の授業では、伝統文化そのものを題材にして授業を行うというよりは、関心・意欲を高める目的で、導入やまとめの場面で扱うことが多かった。授業の内容によっては、学習内容と関連付けて紹介するだけになってしまうものもあったが、既習事項と関連付けて説明させる時間を設けることで、より生徒たちの興味を引き出し、理解を深めることができた。しかし、伝統文化に関わる内容を扱うには、準備も含め、時間がかかることや、すべての内容に伝統文化に関わる内容を取り入れられる訳ではないため、効果的な題材を精選する必要があることなどの課題もある。今後は、この3年間で行った実践の中から、特に効果的であったと思われる実践を中心に、伝統文化に関わる内容を取り入れていきたいと考えている。また、学校全体で育成を目指す資質・能力に関しては、「①日本の伝統や文化に関する理解」を扱うことが多く、「②伝統文化への理解に基づいた多様な文化を尊重する態度」や「③文化の伝承・創造への主体性など」に関してはほとんど扱うことができなかった。理科だけでは育成が難しい資質・能力もあるため、これらについては他教科と連携する中で育成を目指していく必要があると思われる。

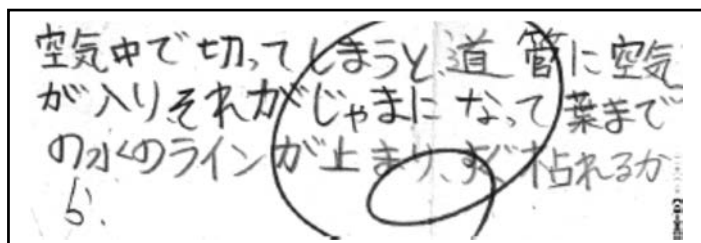
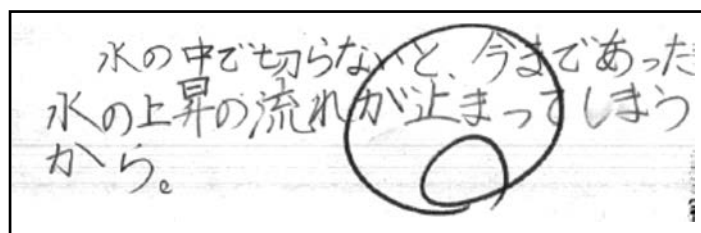
<1年生>

1年生では、「植物のくらしとなかま」の単元において、昨年度に引き続き、植物が根から葉まで水を吸い上げるしくみから、生け花で行われている水切りのしくみについて考えさせる授業を行った。昨年度は授業のまとめの場面で水切りを紹介したが、今年度は、授業の最後に「なぜ生け花では茎を水の中で切るのか」について生徒自身の言葉で説明させることで、既習事項を活用できるように工夫した。

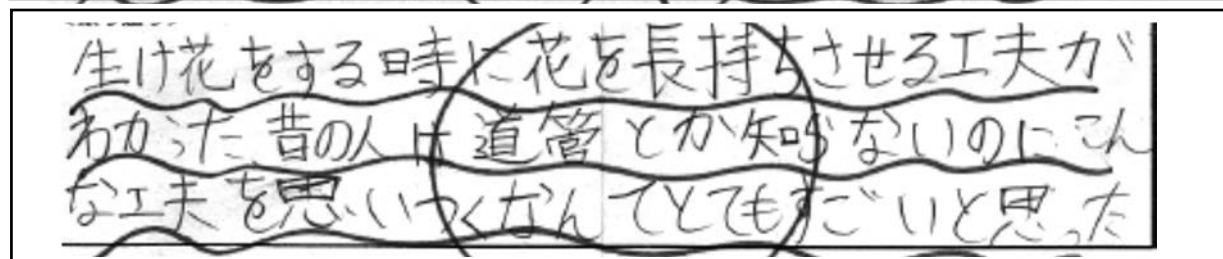
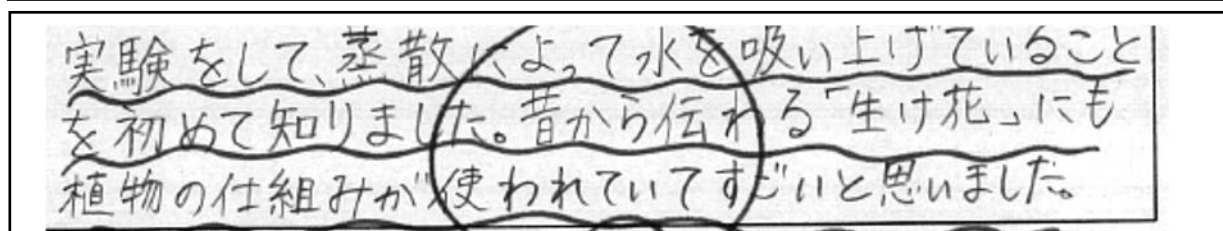
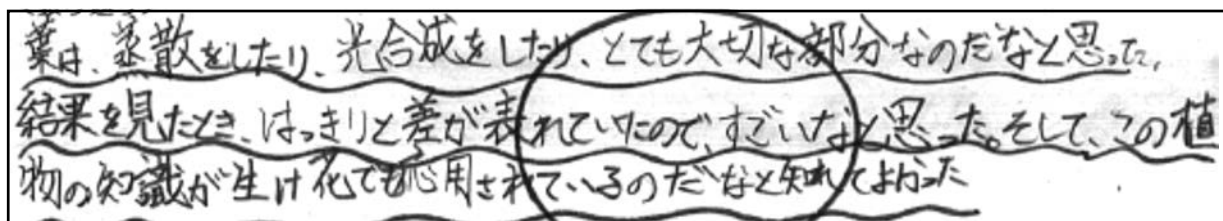
～生徒の記述より～



蒸散することによって水が引き上げられ、根から葉まで水がつながっているという知識を活かして説明している。



～生徒の振り返りより～



生徒の振り返りの中には、「昔から植物の仕組みや知識をいかしていたのがすごい」という内容の記述が多く見られた。理科の授業では、伝統文化に関わる内容を導入やまとめの場面で用いることが多いが、今回のように知識を活用する場面で用いることで、より科学的な側面からの理解が深まるのではないかと考えられる。

< 2 年生 >

「日本の四季」単元の冬の天気では、冬の日本海側に雪が多く降る仕組みを考えさせた。導入で伝統保存食を扱い、日本海側では「漬物」などの発酵食品が多く、一方で太平洋側では干物などが多いということを示した。ここで、伝統保存食を提示した意味としては、日本海側と太平洋側とでの気候の違いに気付かせることに加えて、気候の違いが生活に大きく影響しているということにも気付かせたいと考えたからである。本時では、気候の違いが生じる仕組みを考える上で、あらかじめ生徒にいくつかの材料を用意した。具体的には、金沢市・新潟市の冬の天気とその時期の気圧配置、日本海の水温、大陸側の気温、中央高地の地形図などである。気圧配置の読み取りや雲・霧のでき方に関しては既習事項であり、それらを基に科学的に考える力を養った。

また、授業の終盤には雪国の生活の工夫で「かんじき」や「雪囲い」「雪つり」などを紹介したが、生徒からは「融雪道路」などの意見も出された。また、「金沢の氷室」なども紹介した。以下に生徒の書いた振り返りの一部を示す。

なぜ西向き、気圧配置により、陸と海に差が
あると説明できるのか。夏と冬、季節別の気候
が異なる理由が、よく分かった。また、気候が
土地の気候にも関係があるということが分
かった。気候の差が、食文化の違いにつなが
ることも分かった。

日本海側で雪が降る理由と、太平洋側で晴れた日が続く理由を、しっかり
理解することができました。また、日本海側では湿度が高いため、漬物や
干物を保存食としていると分かりました。生活の工夫として、玄関囲いや消雪、雪囲
いなど、初めて聞いたこともあり、勉強になりました。それぞれの地域の気候
などによって、色々な工夫がされていることを改めて感じました。

北陸地方に住んでいると、融雪や雪がりに慣れている
ので、ないと困ると思うけれど、これも、日本海らしいものの一つ
だと思いました。雪が、地域でしか、体験できない
こともあると思うので、日本海側の気候の特徴を
よく考えて、北陸の文化を大切にしたいです。

生徒からは、「雪国ならではの生活の工夫があることがわかった」という記述が多くみられたが、授業の中で知識としての紹介が多かったためと考えられる。「①日本の伝統や文化に関する理解」が中心であるが、生徒の記述に「北陸の文化を大切にしたい」という記述があることから、伝統に関する理解だけでなく、それを尊重する態度も育成できればと考える。

<3年生>

3年では、「酸・アルカリと塩」において、酸・アルカリの生活の中での利用に興味・関心を持たせることを目的として、灰の利用に焦点を当てて授業を行った。灰を用いた理由は日常生活で利用されているものであり、他教科との連携も考えられる題材なので、目的に適した題材だと考えたからである。

また、灰は江戸時代にも多くの使い道に利用されており、育成したい資質・能力「①日本の伝統や文化に関する理解」にもつながられると考え、授業を行った。

～生徒の振り返りより～

江戸時代の人々は灰がいろいろな用途で使えることを知っていて灰を買い取り、生活に役立てていることが分かった。なぜ灰が江戸時代の中であんなにかいよふからないか、灰の性質がこれのことか、と不思議なところだ、ということを知っていたのか、と少し不思議に思った。灰以外にもアルカリの物質ならこれのことか、と可能だ、というが、何かアルカリの物質でいいものはないか、とこのように使っているのではないかと、灰は普通は捨ててしまうもので、それを生活の中で活用できるのだから、今問題の可燃ゴミの灰もこんな用途で使っているのではないかと。

昔から草木灰というものを使い、農業や造り酒屋など様々なところに使われていることが分かった。草木灰はアルカリ性で、雨が降く、火山活動が活発で（ササガ台地や関東ローム）ある日本にとっていい物なものであ、た、と、思、い、ま、し、た。アルカリ性は、灰でこぼしたなどのよこしまを取るだけ、た、ら、ま、以、外、に、も、農、業、に、も、使、わ、れ、て、い、る、の、で、興、味、深、い、な、と、思、い、ま、し、た。昔の技術が現在の日本に活かされていることが沢山あると思うのでまた調べたり、実験を行ってみたいと思いました。とても楽しい授業でした。

日本では江戸時代から酸、アルカリの性質が日常生活に利用されてきた、ということが分かった。生活で出る廃棄物を再使用する、非常に合理的なシステムだ、と、思、い、ま、し、た。また、農業でもその土地の性質や気候に合わせてアルカリの性質が利用されていることが分かった。現代の日本ではプラスチックを使うことによる二酸化炭素の排出やゴミの不法投棄などが問題になっているが、それだけでなく江戸時代の生活はなんて地球にやさしいだろう、と思う。今の生活の中で、このように酸、アルカリの性質を利用しているものはあるのか調べてみたい、と、思、い、ま、し、た。江戸時代の日本人の生活についてももっと詳しく知りたいと思った。江戸時代にタイムスリップしてみたい、...

上記の生徒の書いた振り返りから、酸・アルカリの生活の中での利用への興味・関心や「①日本の伝統や文化に関する理解」の向上が見られるので、灰は目的達成に適した題材だと考えられる。

ただし、今回は灰を学習内容と関連付けて紹介するだけになっていたもので、本年度目標としていた伝統文化を科学的な知識を用いて説明する、知識の活用場面で扱うためには扱い方を検討する必要がある。

実践事例

理科

学年 1 年	関係・連携の考えられる教科等 家庭
授業内容 ・植物モデルを用いた実験を行うことで、蒸散によって水の吸い上げが促進されていることを科学的に考察する。本時では、発展課題として日本の伝統文化の一つである生け花で行われている水切りを取り上げる。	
教科等で身に付けたい力（本時について） 実験の結果をもとに、蒸散と水の吸い上げの 関係について科学的に説明することができる。 【科学的な思考・表現】	育成したい資質・能力 ① 日本の伝統や文化に関する理解
授業のポイント・流れ - 前時の授業の内容を確認する（５分） - 前時の課題を確認する。 蒸散によって、水は上昇するのだろうか？ - 実験結果を確認する（５分） - 各班で行った実験の条件を確認する。 - 前の時間に準備した試験管を各班に持って行き、結果を確認する。 - 考察を書く（１０分） - ワークシートに考察を書く。 - 発表を行う（１０分） - 本時のまとめ（８分） <まとめ>蒸散を行うことで、根から吸い上げた水が上に引き上げられるため、高いところまで水を上昇させることができる。 - 発展課題に取り組む（１０分） - 水切りの動画をみる。 「生け花で水切りを行うとき、なぜ水の中で茎を切るのだろうか？」 蒸散によって水が吸い上げられる仕組みと関連させ、水の吸い上げのための水切りを水の中で行う理由について科学的に説明する。 - 振り返りを書く。 - ワークシートに振り返りを書く。 水が吸い上げられる仕組みは生け花などの伝統文化の中でもいかされているんだなあ。	



実践事例

理科

学年 2 年	関係・連携の考えられる教科等 保健体育
授業内容 前時までに、天気を予報するためには雲の材料である水蒸気が空気中にどれだけ含まれているかを知る必要があると考えた。そこで、実際に調べる方法を考えて、教室内の水蒸気量を調査し、その気温での飽和水蒸気量と比較することで、空気がどれだけ湿っているか（湿度）を調べた。 本時は、乾湿計を使った、より行いやすい湿度の求め方を確認した後に、雲ができるためには空気が上昇する必要があることに注目し、自然の中でどのようなときに空気が上昇するかを考える。	
教科等で身に付けたい力（本時について） 気象観測の方法を知り、器具を正しく使って観測し、結果を記録することができる。 【観察・実験の技能】 上昇気流や下降気流の例とその原因を理解し、知識を身につける。 【自然事象についての知識・理解】	育成したい資質・能力 ① 日本の伝統や文化に関する理解
授業のポイント・流れ 1. 前時で天気予報をするために必要だと考えて、教室内の湿度を調べたことを復習する。（5分） 2. しかし、前時のような方法では、調べるのに時間がかかってしまうので、より湿度を調べやすい方法として、乾湿計を紹介する。（5分） 3. 実際に、乾湿計の実物を観て、その特徴をつかませる。（5分） 4. 乾湿計を観て気づいたことを生徒に挙げてもらう。（5分） ・ 2つある温度計のうち、片方は水で湿ったガーゼでおおわれている。 5. 乾湿計で湿度をはかれる仕組みについて確認する。（5分） Q. 「くみ置きの水をつかっているから水の温度は気温と同じはずなのに、水でぬれたガーゼがまかれた湿球温度計の方の示度が低いのは何で？」 A. 「ぬれているから水の蒸発が起こっている。1年生の状態変化で学習した、水が液体から気体へと状態変化するとき熱が必要だからその分示度が低くなる。」 Q. 「湿度が低いときと、高いときだと示度の差はどちらが大きくなると考えられる？」 A. 「湿度が低い方がたくさん蒸発できるから、示度の差が大きくなる。」 6. 実際に、乾湿計を使って、今の教室の湿度を求める。（15分） ・ 蒸発するときに熱を奪う性質を利用している例として、打ち水・冷却アイテム・熱中症対策・汗などを紹介する。 7. 雲の材料がどれだけあるかはわかるようになったが、材料だけあれば雲ができるわけではない。雲ができるためには空気が上昇し、冷却される必要があったことを復習する。（5分） 8. 自然の中でどのようなときに空気が上昇するかを考える。（5分） ・ 空気が山の斜面を上昇するとき ・ 温度が異なる空気がぶつかるとき ・ 空気が熱せられたとき ・ 低気圧	



実践事例

理科

学年	関係・連携の考えられる教科等
2 年	社会・家庭
授業内容 冬の天気の特徴を知り，日本海側には雪が多く降り，太平洋側は晴れの日が続く原因について考える。また，その中で昔からどのような生活の工夫があるかを知る。	
教科等で身に付けたい力（本時について） ・日本海側に雪が多く降るしくみを資料分析を基に考え，表現している。	育成したい資質・能力 ① 日本の伝統や文化に関する理解
授業のポイント・流れ 1. 日本海側と太平洋側とで発達した保存食文化の違いや，北陸の玄関囲いや雁木など日本海側特有の生活の中の工夫について知る。 ・日本海側では冬に雪が降ることに気付かせる。（8分） 2. 課題の提示 なぜ冬の日本海側は雪が多く降るのか。 また，なぜ冬の太平洋側は晴れの日が続くのか。 （2分） 3. グループで気象データを分析し，日本海側に降雪が多い仕組みの仮説を立て表現する。（ホワイトボード使用）（15分） 4. グループで考えた仮説を発表する。（8分） 5. 演示実験ですじ状の雲の発生を確認する。（7分） ドライアイスの冷気とぬるま湯は，それぞれ何のモデルになるのかも考える。 6. <まとめ> シベリア気団からの冷たい季節風は，暖流の日本海上で多量の水蒸気を含み雲を作る。この雲は，日本列島の山脈にそって上昇すると，雲がさらに発達して，日本海側に雪を降らせる。水蒸気の少なくなった大気は，冷たく乾燥した風になって太平洋側に吹き下りる。よって，太平洋側は晴れて，乾燥することが多い。（5分） 7. 伝統文化との関わり 日本海でも太平洋側も，昔からその気候にあった生活や暮らしの工夫（建築や融雪装置）などがあることを理解する。 「昔から行われている兼六園の雪吊りは，今では金沢を象徴するものになっていますね。」（5分）	

実践事例

理科

学年	関係・連携の考えられる教科等
3 年	家庭・国語
授業内容 月の満ち欠けの規則性を知り，昔から和歌や俳句などに詠まれてきた月はどのようなものだったのかを考える。	
教科等で身に付けたい力（本時について） 地球から見える月の形や位置の変化を，月の公転と関連付けて捉えることができる。 【科学的な思考・表現】	育成したい資質・能力 ① 日本の伝統や文化に関する理解
授業のポイント・流れ 1 平安時代の人々の生活について触れる。 「電気も無い暗い中，どんな気持ちで月を見上げていたのだろう。」 昔の人はどんな時間帯にどんな月が出ているのかを知っていて，それを心情と重ね合わせて詠んでいたことを伝える。 「和歌の中には何と呼ばれる月が出てきたか」（８分） 2 課題を提示する <u>昔の人が歌に詠んだ月はどんな月だったのだろうか？</u> （２分） 3 月の形と位置の変化について，各自で模型を用いて観察を行い，観察シートに記入させる。（１０分） 4 各班の観察結果を確認する。（１０分） 5 和歌に詠まれている「有明の月」「夜半の月」はどんな形の月だったのかを考える。 「百人一首に詠まれている〇〇の月はどんな月なのだろうか？」（８分） ・昔の人たちも満ち欠けする月を見てそこに感情を重ね合わせていたことに気付かせる。 <u>＜まとめ＞太陽との位置関係から時間ごとに変化する月の形を歌に詠んでいた。</u> 6 学習内容をもとに，今日の月はどんな月なのかをモデルを用いて予測させる。（５分） 7 ２年時に生徒たちが詠んだ短歌を提示する。 「この歌に詠まれている『月』はどんな『月』なのだろうか？」（５分） 8 伝統文化との関わり 「昔の人が大切にしてきた自然とのつながりを私たちも大切にしていきたいですね。」（２分）	

実践事例

理科

学年 3 年	関係・連携の考えられる教科等 社会・技術・家庭・美術
授業内容 江戸時代の灰の使い道を根拠に灰（本時は草木灰を扱う）のどんな性質が利用されているのかを考え調べる。 また、他にも生活環境の中で灰が上手く利用されていることを、焼畑農業を例に考える。	
教科等で身に付けたい力（本時について） ・身のまわりの酸やアルカリの利用に興味を示し、生活の中でどのように利用できるのか進んで調べようとしている。	育成したい資質・能力 ① 日本の伝統や文化に関する理解
授業のポイント・流れ 1. 江戸時代に灰屋という職業があったことを知る。（5分） ・問題形式「次のうち、江戸時代にあった職業をすべて選びなさい。」 2. 灰（草木灰）の使い道を知る。（5分） 農家…土壌改良のため。 造り酒屋…酸っぱいお酒ができないようにするため。 染物屋…藍や紅花による染色では、色調を多彩にあやつるため。 和紙製造…繊維に入った余分なものをとりのぞき、繊維をやわらかくするため。 洗濯…油污れや、垢、食べこぼしを洗い流しやすくするため。 課題の提示 共通して草木灰のどんな性質が利用されてきたのか？ 3. 2の使い道から草木灰はどんな性質をもっているか考える。（5分） ・酸っぱいのは酸の性質でそれを防ぐから灰はアルカリ。 ・加えて色調が多彩に変化するのにはpHの変化によるのではないか。灰はアルカリか酸。 ・繊維をやわらかくするのは、アルカリ性の水溶液だから、灰はアルカリ。 ・石鹼はアルカリ性だから。 4. 草木灰がアルカリなのか、酸なのか調べる実験を行う。（15分） ・水溶液を作って、pH試験紙を使用する。 ・フェノールフタレイン溶液、BTB溶液、リトマス紙でもできる。 5. 結果を共有し、結果から草木灰（主に炭酸カリウム）がアルカリであることを知る。（5分） ＜まとめ＞ 共通して草木灰がアルカリであることが利用されてきた。 6. 土壌改良と関連付けて、焼畑農業の利点を理解する。（10分） ・焼畑農業は多雨地域で伝統的に行われている農業形態。 7. 本時を振り返る。（5分）	

音楽科

鏡 千佳子

共同研究者 篠原 秀夫（金沢大学）

1. 伝統文化教育を進めるに当たって

本校は平成 29 年度から「伝統文化教育を中心とした教科等横断的なカリキュラムの開発ーグローバル社会に生きるために必要な資質・能力の育成を目指してー」を主題に、研究を進めてきた。本校音楽科では、伝統文化に関する授業を通して、他教科とどのように関連し、どのような力を育成できるのかという視点から今までの授業を捉え直し、音楽の授業で伝統文化を扱う意味を考えて研究を進めてきた。

伝統文化教育の研究初年度の平成 29 年度は、三年生の雅楽の授業の取り組みにおいて「②伝統文化への理解に基づいた多様な文化を尊重する態度」を重視した授業実践を行った。雅楽「越天楽」の特徴から、自分が思う「日本らしさ」について考える実践を行った。「日本らしさ」を感じる部分は、人によって異なる。明確な答えは出せないかもしれないが、自分が日本らしいと感じるところはどういうところなのか、何が日本らしさを感じさせているのかを考える良い機会となった。ただ、オーケストラと雅楽の違いやどこに日本らしさを感じるかということは考えることができたが、西洋と日本それぞれのよさを尊重するとともに、西洋とは違った日本ならではの美しさへの愛着をより一層図れるようなところにはまでは踏み込めなかった。本校が目指している資質・能力の育成にはやや届かなかったように感じる。研究の 2 年目に当たる平成 30 年度には一年生の民謡の授業の取組において「①日本の伝統や文化に関する理解」を重視した授業実践を行った。今まで歌ってきた歌と民謡の歌い方の違いについて体験を通して学び、曲種によって歌い方が違うのはなぜなのかについて考えた。様々な曲種による歌い方の特徴をわかりやすくするために、アニメの曲・合唱曲・日本歌曲・民謡を比較することにし、それぞれの曲の場合、どんな声で、どんな歌い方をしているのかについてグループで意見交換をし、次になぜそのような歌い方をするのかについて話し合った。生徒の多くが、曲種に応じた発声があることに気付くことができたように思う。また民謡を実際に歌ったり、様々な地域の民謡の背景を学習したりしながら、さらに課題に迫っていった。今まであまり歌い方を意識したことがなかったという生徒が多かったので、歌い方の違いについて考える良い機会になったと感じた。

中学校の音楽の授業で「伝統文化」を扱うということは、そこには必ず意味がある。それは単にその伝統文化に詳しい人材を育てるということではない。その伝統文化が自分の感情やイメージ、生活と結びついたとき、自分にとって価値のあるものとして、何か意味のあるものとして、存在するものとなることが望まれる。中学生という多感な時期の生徒が、伝統文化をどう自分の生活と結び付けて考えていくかに迫れるような授業を構築していきたい。また、新学習指導要領に示されている音楽科の目標、「表現及び鑑賞の幅広い活動を通して音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力の育成」を目指しつつ、伝統文化教育を通して、伝統文化そのものだけでなく、それらを取り巻く様々な背景や文化、人、そしてこれからの未来を見据えていけるものの見方や考え方ができる生徒を育てていきたい。

2. 能力・態度の育成に当たって

(1) 学校全体として育成する資質・能力について

本校の研究副題「グローバル社会に生きるために必要な資質・能力の育成を目指して」を受けて、今年度は三年生の「多様な音楽」の授業の取組において「②伝統文化への理解に基づいた多様な文化を尊重する態度」を重視した。様々な音楽が影響し合ったり、融合したりして生まれている身の回りの音楽に着目し、音楽の多様性を理解できるような授業を目指した。

(2) 関連・連携を図った教科等について

現代にはクラシック、オペラや歌舞伎などの総合芸術、ジャズやロックといった様々なジャンルの音楽が存在する。どのジャンルの音楽にしても、それぞれの音楽が生まれた背景や地域の特徴などが大きく関連してくる。「多様な音楽」の学習では、社会科で様々な地域や歴史を学んだ内容が音楽科の授業につながってくると考えられる。

2. 成果と課題

今回の授業では、「融合」をテーマに実践を行った。新学習指導要領との関わりとしては、B 鑑賞のア（イ）生活や社会における音楽の意味や役割、イ（イ）音楽の特徴とその背景となる文化や歴史、他の芸術との関わり、イ（ウ）我が国や郷土の伝統音楽及び諸外国の様々な音楽の特徴と、その特徴から生まれる音楽の多様性を考え実践を行った。

今回取り上げたジャズやロックなどのポピュラー音楽は、様々な音楽様式の融合により成立し、また発展をしている。しかし、多くの中学生はジャズやロックは融合してできた音楽だと認識していない。そこでまず、ジャズ、ロック、ボサノヴァなどの音楽を鑑賞し、異なる人種がそれぞれの文化を取り入れるという歴史的社会的事実や、他の音楽様式と融合することで、新しい音楽が生まれ、発展できるということを学んだ。次に、歌舞伎や能も様々な音楽文化と融合している例を挙げ、「なぜ異なる音楽は融合するのだろうか、また、あなたは融合することに対してどう思いますか」という設問をした。

<生徒の記述から>

- ・ その時代に合わせて形を変えるために融合するのだと思いました。例えば歌舞伎はできた時は流行の芸能だったけど、今はもう昔の文化になっています。それを今の文化にするため、スーパー歌舞伎や超歌舞伎に形を変えたのだと思いました。これに対して私は、すごく自然なことだと思ったので、どんどん融合して新しい文化ができていくと面白いなと感じました。今、私たちが楽しんでいる文化も何十年、何百年後にどう変わっているかを考えると、すごく興味が湧きました。
- ・ 融合することによってそれぞれの音楽のよさを引き出せるから、このような形で様々なジャンルの音楽に深い関心を持つ人が増えることはいいことです。私は融合することに賛成です。伝統的な音楽だけでなく、その時代のニーズに応えた音楽を作り出していくべきだと思うからです。しかし、融合した音楽だけでなく、伝統的な音楽も受け継いでいくべきです。昔の人の心に触れることで、人生が豊かになるからです。また、融合する前は片方の音楽にしか興味がなかった人も、融合した曲を聴くことで、もう片方の音楽にも関心を持つ人が増えると思うからです。
- ・ 融合するのは良いことだととる人もいるが、良くないと思う人もいます。初音ミクを取り入れた

超歌舞伎も、そういうコンテンツがわからない人には受け入れがたいと思う。だから私は融合するにあたり、そもそもその芸能はどのようなものを尊重し、新しいものはあくまでも付け足しとして入れるべきだと思う。

- ・異なる文化が融合することにより、時代の変化によって形を変えながらも、双方の文化を伝承していくことができるから融合するのだと思いました。ボカロと歌舞伎が融合するなどで、片方のファンがもう片方に興味を持つことによって、知る人が増えて、文化の継承につながると思いました。このことについて僕は、伝統的文化の継承、理解者を増やすことができ、とても良いと思いました。

これまで、歌舞伎や能といった我が国の伝統文化の授業を通して、それぞれの良さや魅力を考えてきた。生徒の中には、「超歌舞伎は歌舞伎の良さが半減している」という意見や、「能とクラシックの融合は正直やりすぎだ」といった意見もあった。これは、融合に対する批判的な意見というより、それぞれの文化の良さを理解しているからこそ出た意見と言える。現にこのような意見を持った生徒たちも融合には賛成という意見であった。ほとんどの生徒は、融合に賛成という意見であったが、ただ融合するというのではなく、元の音楽の要素を残したままで融合するべきだ、本来持っている良さが失われない程度に融合するべきだという意見が多かった。歌舞伎や能といった伝統文化の学習が、これから生きる生徒たちの新たな見方・考え方につながっているのだと実感した。これからも、様々な授業を通して、伝統文化そのものだけでなく、それらを取り巻く様々な背景や文化、人、そしてこれからの未来を見据えていけるものの見方や考え方ができる生徒を育てていきたい。

実践事例

音楽

学年 1 年	関係・連携の考えられる教科等 社会・体育・英語・家庭
授業内容 様々な歌を歌ったり，それらの背景を学んだりしながら，曲種に応じた発声があることを知り，曲にふさわしい歌い方を探る。	
教科等で身に付けたい力（本時について） 様々な曲種の雰囲気を感じながら曲種に応じた発声により，言葉の特性を生かした音楽表現を工夫し，どのように歌うかについて思いや意図を持つ。 【音楽表現の創意工夫】	育成したい資質・能力 ①日本の伝統や文化に対する理解
授業のポイント・流れ ○3～5人のグループを作り，イントロクイズをする。（10） ・ここで使う曲は小さい頃に歌ったことがある歌，合唱曲，民謡など。 ・楽しめて歌える雰囲気づくりを心掛ける。 ・それぞれの曲種で歌い方が変わること気付かせる。 ○本時の課題を知る。 どうして曲種によって歌い方が違うのだろう ・小さい頃歌っていた歌と合唱コンクールの歌を比べてなぜ歌い方を変えたのか尋ね，それぞれの背景や特徴から分析する。また，合唱での歌い方で小さい頃歌っていた歌を歌ってみる（合わないことに気付かせる）。（20） ○民謡はどんな歌い方か，再度歌ってみる。 ・合唱の時の歌い方などとはまた違った歌い方であることに気付かせ，なぜこのような歌い方なのかを民謡の作られた背景を基にグループで探る。（10） ○考えを発表する。（8） ○次回はゲストティーチャーをお呼びして，民謡の歌い方を学ぶことを伝える。 （2）	

実践事例

音楽

学年 3 年	関係・連携の考えられる教科等 国語・社会
授業内容 能と歌舞伎の違いを理解し，能の魅力を探る	
教科等で身に付けたい力（本時について） 能の音楽と歌舞伎の音楽の特徴を比較することでそれぞれのよさや美しさ，特徴をその背景となる文化・歴史や他の芸術と関連付けて理解して，解釈したり価値を考えたりし，鑑賞する。【鑑賞の能力】	育成したい資質・能力 ②伝統文化への理解に基づいた多様な文化を尊重する態度
授業のポイント・流れ ○本時の課題を知る。（５） ～観能教室に向けて～ 能と歌舞伎の違いを理解し，能の魅力を探ろう ○能と歌舞伎の音を比較する。（１０） ・♪その時義経～の戦いの部分を音だけ流す。 ・使われている楽器，声の音色，テクスチャ，その他聴こえてくる音に集中するよう言う。 ○気づいたこと，聴こえたことを発表する。（１０） ○能と歌舞伎を視聴する。（５） ○能と歌舞伎の音楽の特徴から能の魅力を探る。（１０） ・能と歌舞伎のどちらが気に入ったかを音楽の諸要素を用いて書くよう言う。 またその際，選ばなかった方のよさも書くことで，両方の魅力に気づかせる。 ○考えを発表する。（５） ○まとめ 振り返り（５）  太鼓 大鼓 小鼓 能	

実践事例

音楽

学年 3 年	関係・連携の考えられる教科等 国語・社会
授業内容 曲に込められた思いを汲み取り，ふさわしい歌唱表現を考える。	
教科等で身に付けたい力（本時について） 音色，旋律を知覚し，それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら，歌詞の内容や曲想を味わって曲にふさわしい音楽表現を工夫し，どのように歌うかについて思いや意図を持つ。【音楽表現の創意工夫】	育成したい資質・能力 ③文化の伝承・創造への主体性など
授業のポイント・流れ 1. 「花」「花の街」を歌う。 ・前時を思い出し，難しい旋律やリズムに注意して歌う。 2. 曲に込められた思いを汲み取る。 ・前時のアンケートから様々な考えを紹介し，なぜ「心の歌」を歌うのかに迫る。 ・「花」の歌詞を読む。 ・リズムの違う「花」を聴き，春の美しい情景だけでなく，ワクワクした気持ちがリズムで表されていることをつかむ。 ・特徴的なリズムを感じながら歌う。 ・「花の街」の歌詞を読む。 ・前奏や歌の旋律からどんな印象を受けるか考える。 ・「花の街」のつくられた背景を知る。 ・戦時中，戦後の日本の様子も考えながら，軍歌と「花の街」とを聴き比べる。 ・「花の街」に込められた思いは何か，なぜ教科書に載っているのかについて考える。 3. これまでに学んだことを生かし，「花の街」をどのように歌いたいと考え，歌う。	



実践事例

音楽

学年 3 年	関係・連携の考えられる教科等 社会
授業内容 様々なポピュラー音楽の成り立ちを知り、「融合」により新しい音楽が生まれ、発展することを学ぶ。	
教科等で身に付けたい力（本時について） 音楽を形づくっている音色，速度，テクスチャを知覚し，それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら，我が国の伝統音楽及び諸外国の様々な音楽の特徴から音楽の多様性を理解して，解釈したり価値を考えたりし，鑑賞している。【鑑賞の能力】	育成したい資質・能力 ②伝統文化への理解に基づいた多様な文化を尊重する態度
授業のポイント・流れ 1 ポピュラー音楽を鑑賞する (1) ジャズの成立 ・ジャズ《聖者の行進》を聴く。 ・南北戦争終戦による吹奏楽器普及やヨーロッパの楽器と黒人の音楽の融合によりジャズが成立したことを知る。 (2) ボサ・ノヴァの成立 ・サンバ《ブラジル》を聴く。 ・サンバの速度を遅くし，打楽器とギターの音色を変えたデータと比較聴取する ・変化した音楽の諸要素について考える。 ・ボサ・ノヴァ《イパネマの娘》を聴く。 (3) ロックにおける融合 ・クイーンによる《We will lock you》を聴き，使われている楽器に気付く。 ・ビートルズがロックと融合した音楽様式を予想する。 ・《Yesterday》を聴く。 融合することで発展していく ことに気付かせる 2 「融合」している音楽について話し合う ・「越天楽」も「越天楽今様」や「黒田節」などのように形を変えたものもあることを知る。 ・能や歌舞伎も様々なものと融合していることを知る。 なぜ異なる音楽は融合するのだろう ・授業を通して考えたことをワークシートに書く。	

美術科

西澤 明

共同研究者 鷺山 靖（金沢大学）

1. 伝統文化教育を進めるに当たって

（1）伝統文化教育の目的の確認

教育基本法、学校教育法では、伝統と文化について以下のように示されている。

伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと。

（教育基本法 第1章「教育の目的及び理念」、第2条「教育の目標」、5）

我が国と郷土の現状と歴史について、正しい理解に導き、伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛する態度を養うとともに、進んで外国の文化の理解を通じて、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと。

（学校教育法 第2章、第21条、3）

また、中央教育審議会の報告では以下のようにまとめられている。（下線部は筆者）

グローバル化する中で世界と向き合うことが求められている我が国においては、日本人としての美徳やよさを備えつつグローバルな視野で活躍するために必要な資質・能力の育成が求められる。言語や文化に対する理解を深め、国語で理解したり表現したりすることや、さらには外国語を使って理解したり表現したりできるようにすることが必要である。こうした言語に関する能力を向上させるとともに、古典の学習を通じて、日本人として大切にしてきた言語文化を積極的に享受していくことや、芸術を学ぶことを通じて感性等を育むことなどにより、日本文化を理解して自国の文化を語り継承することができるようにするとともに、異文化を理解し多様な人々と協働していくことができるようになることが重要である。

また、日本のこととグローバルなことの双方を相互的に捉えながら、社会の中で自ら問題を発見し解決していくことができるよう、自国と世界の歴史の展開を広い視野から考える力や、思想や思考の多様性の理解、地球規模の諸課題や地域課題を解決し持続可能な社会づくりにつながる地理的な素養についても身に付けていく必要がある。

（中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会『教育課程企画特別部会における論点整理について（報告）』平成27年8月26日）

すなわち伝統文化教育の目的は、

- ① 自らの国や郷土の伝統や文化についての理解を深め、尊重する態度を養い
 - ② 外国の文化や歴史についても理解を深め、尊重する態度を養うことで
- 国際社会の平和と発展に寄与する資質、能力を育むことにあると言えるだろう。

（2）美術科と伝統文化教育の関連

伝統文化教育で育成を目指す資質・能力については、美術科の目標や学習内容と直接結び付く点が多い。前述の中央教育審議会の報告では、「伝統や文化についての理解は、他者や社会との関係だけ

ではなく、自己と対話しながら自分を深めていく上でも極めて重要である」とした上で、美術科について、

音楽、美術、工芸、書道など、芸術文化に親しみ、自ら表現、創作したり、鑑賞したりすることが、伝統や文化の継承・発展に重要であることは言うまでもない。特に、伝統的な文化にかかわっては、音楽科や図画工作科、美術科では、唱歌や民謡、郷土に伝わる歌、和楽器、我が国の美術文化などについての指導を充実し、これらの継承と創造への関心を高めることが重要である。

と記されている。（下線部は筆者）

また、令和三年四月から施行される新しい学習指導要領では、教科の目標に「生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質・能力の育成」が掲げられており、内容には「身近な地域や日本及び諸外国の文化遺産などのよさや美しさなどを感じ取り、美術文化について考える（1年生鑑賞）」「日本の美術作品や受け継がれてきた表現の特質などから、伝統や文化のよさや美しさを感じ取り愛情を深めるとともに、諸外国の美術や文化との相違点や共通点に気づき、美術を通じた国際理解や美術文化の継承と創造について考える（2・3年鑑賞）」「日本及び諸外国の作品の独特な表現形式、漫画やイラストレーション、図などの多様な表現方法を活用できるようにする」「国内外の児童生徒の作品、我が国を含むアジアの文化遺産についても取り上げる（指導計画の作成と内容の取扱い）」と示されている。

（3）教科の思考力・判断力・表現力と伝統文化教育

美術科の学習活動は、作品の制作意図のよりよい実現のために表現の方法を発想・構想し、創意・工夫を試みる繰り返しであり、まさに思考力・判断力・表現力が求められる。美術科ではこれまでの実践研究で、教科の思考力・判断力・表現力を「学習活動における課題を、さまざまな方法を用いて考え、伝える力」と捉えており、その力の基盤になるのは個々の「感性」だと考えている。それは、学習指導要領に示された教科の目標「豊かな感性や情操の育成」に合致すると同時に、伝統文化教育で育成を図る「異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ」の基盤でもあると考えられる。さらに、今後の大きな課題である Society 5.0 において求められる力についても、自分で考える力、情報を読み解く力、自らの考えを表現し伝える力、科学的・論理的に思考する力、好奇心・探求力などと並んで、「価値を発見する感性」が挙げられている。

（4）伝統文化教育で育む感性

感性、とりわけ日本人としてのアイデンティティを支える感性については、日本の季節の変化と、そこで生活する人々の思いから生まれ、育まれるものだと考えている。

例えば「四季」には明確な節目があるわけではなく、自然の姿や色彩は常に微妙に変化し続けている。日々、姿や色彩が変化する季節の中で暮らす日本人が、その繊細な変化に気付く感性を高めてきたことは間違いないだろう。また、秋になり葉を落とす木々、冬の白い雪に覆われた風景や、そこに黒々と立つ木々の姿は、侘び寂びの精神や余白に対する美意識を育み、明るく柔らかな風景に対するあこがれを育んできただろうことも想像に難くない。

こうした考察から、**伝統文化は、単に「古くから伝わる事柄」を指すのではなく、その背景にある「日本の四季の変化」と、そこで暮らす人々の「日本人の繊細で豊かな感性」と捉えることにした。**

2. 能力・態度の育成に当たって

(1) 学校全体として育成する資質・能力について

本年度、本校の研究では、学校全体として目指す「伝統文化教育を通じて育成する資質・能力」について、以下の三つとしている。

- ① 日本の伝統や文化に関する理解
- ② 伝統文化への理解に基づいた多様な文化を尊重する態度
- ③ 文化の伝承・創造への主体性など

これまで、伝統文化に関わる授業として、いくつかの計画、実践を行ってきた。その内容について、上記①～③の目指す資質・能力と照らし合わせてまとめると、以下のように分析できる。

「樂茶碗」の制作

桃山時代から今日に至るまで続く樂茶碗を題材として取り上げた。ろくろによる均一な成形の碗にはない武骨な形と、刷毛で塗られた釉薬の濃淡や、焼き加減によって偶然生まれる色を楽しむ文化は、日本が潜在的に持ち、大切にしてきた侘び寂びの心である。学習内容としては、樂焼きの伝統や文化、歴史についての知識理解を図った上で、実際に手捏ねによる造形と釉薬掛けを行った（①日本の伝統や文化に関する理解）。技能の差ができていく素朴な作業は、多くの生徒が関心を持って取り組むことができ、主体性や積極性の育成が期待できると考えられる（③文化の伝承・創造への主体性など）。

「金沢のポスター」の制作

新幹線の開通以来、金沢にはたくさんの人が訪れている。県外からの来訪者に金沢の伝統や文化を紹介するポスターを題材として取り上げた。自分達が暮らす身近な地域のよさについて考え、再確認、理解すること、その表現に伝統的な和の色や模様を取り入れることで、我が国の伝統に対する理解が深まると考えた（①日本の伝統や文化に関する理解）。また、ポスターという表現方法は世界共通の伝達手段であり、グローバル社会におけるコミュニケーションの方法であることの理解も、伝統文化教育の目的に合致していると考えられる（②伝統文化への理解に基づいた多様な文化を尊重する態度）。

「落ち葉のスケッチ」「柏葉のスケッチ」の制作

校地内に植えられた木々の葉をスケッチすることで、季節とともに変化する自然の美しさに気づき、味わうことを狙った（①日本の伝統や文化に関する理解）。1年生で取り上げた「落ち葉のスケッチ」では、美しく紅葉した桜の葉を描き、3年生で取り上げた「柏葉のスケッチ」では、校章でもある柏の葉を描いた。紅葉の多様な色彩はもとより、緑色一色の柏の葉にも日本人は繊細な色の違いを大切に、様々な色名をつけて楽しんできた。その知識を学び、表現活動に活かす活動は、先に述べた「日本の四季の変化」と、そこで暮らす人々の「日本人の繊細で豊かな感性」の育成だと考えられる。

「日本手拭のデザイン」の制作

古くから日々の生活で使われ、現在も使われ続けている日本手拭を取り上げた。さらに、伝統的な道具をテーマにすることで、他教科からのつながりがしやすくなることも狙った。

「日本手拭」についての基本的な知識学習を踏まえたあと（①日本の伝統や文化に関する理解）、「日本らしさ」をテーマに単位ユニットのデザインを考え、消しゴムハンコを作った（③文化の伝

承・創造への主体性など)。単位ユニットのハンコが完成後、ユニットが連続するパターン「和の模様」や、「和の色」、「余白の美」などについて学習を行い(①日本の伝統や文化に関する理解)、その知識を活かしたハンコの押し方を考えた(③文化の伝承・創造への主体性など)。教科の学習事項としては、ユニットデザインの「事物の単純化」、連続するユニットのパターンの「レイアウト構成」、消しゴムハンコ作成の「凸版・彫刻刀の基本的知識」、和の色の再現の「混色による色の使用」等が考えられる。

(2) 関連・連携を図った教科等について

前述のように、美術科としては、伝統文化は単に「古くから伝わる事柄」を指すのではなく、その背景にある「日本の四季の変化」と、そこで暮らす人々の「日本人の繊細で豊かな感性」と捉えており、今後も「日本の四季の変化」や「日本人の繊細で豊かな感性」といったテーマで他教科との関連・連携を図りたいと考えている。しかし本校研究では「伝統文化」をどう捉えるかについての共通理解が弱く、教科のつながりは、伝統文化に対する「古くから伝わる事柄」といった漠然としたイメージで行われているように思われる。

美術科の学習における表現活動の目的は、発想・構想の能力や創造的な技能の育成であり、具体的な題材やテーマは、各学校の実情や教師の判断にゆだねられ、設定される場合が多い。そのため、他教科等の教科書や年間指導計画に示された題材名や学習事項とつながりを持ちやすいが、逆に他教科が美術科の題材からつながりを見つけることは難しいようだ。

そうした状況を踏まえ、今年度は「日本手拭」という具体的な事柄を題材とすることで、他教科との関連を見出しやすくしようと考えた。可能性としては、手拭が盛んに使われるようになった江戸時代の、綿花の栽培や粋の文化についての学習を社会科の視点で、手拭を使った物の包み方や服飾との関わりについての学習を家庭科の視点で等を考えていたが、実際には関連・連携の実現を図ることは難しかった。

3. 成果と課題

「日本手拭のデザイン」の単元は、前後半、大きく二つの学習活動から成り立っている。生徒が学習活動において主題を考える際の基本のテーマについては、伝統文化教育と美術教育、それぞれの学習目的を踏まえ、以下のように設定した。単元前半の、連続する単位ユニットのデザインを考えて消しゴムはんこを作る活動では「日本らしさ」をテーマとし、単元後半の、手拭の柄のデザインを考えてはんこを押す活動では「和の意匠」をテーマとした。

作品完成後に生徒からとった記述式アンケートでは、前半の「日本の四季や文化」というテーマについて、以下のような記述が見られた。

- ・最初、テーマが「日本らしさ」だったので、どんなものにするかすごく悩みました。
- ・この授業では、日本らしさをイメージするということで、「日本らしいって何だろう?」と思っていましたが、日本で作られたもの、日本にしかないものと考えた時、色々なものが浮かんできました。
- ・「日本らしさ」をテーマに掲げることで、日本らしさとは何かについて考えることができました。
- ・あらためて日本らしさを考えることで、日本のイメージを実感することができました。古くから伝わる模様を学習しましたが、これからもその模様は伝えていきたいです。
- ・日本らしさについて考え、友達と話し合い、自分では思いつかなかった日本らしさをたくさん発見

することができてとても楽しかったです。

「日本らしさ」というテーマについてのこうした感想からは、考えることで、意識が高まったり、あらためて発見があったりしたという成果も見られるが、同時に「日本らしさ」とは何かを考えるのは難しかったという意見もあり、教師側が感じている「日本の伝統文化」とは何かという前提の不明瞭さに通じるものがあるように思う。すなわち、今後の伝統文化教育における課題としては、活動や研究の前提として「日本らしさ」や「伝統文化」についての共通理解を図ることが重要だと考えられる。

本校における「伝統文化教育」をテーマにした研究は今回でいったん終了になるが、今後の方向としては、やはり「日本の四季の変化」と「日本人の繊細で豊かな感性」をテーマに、他教科との関連・連携を図ることが重要だと考えている。例えば「日本の四季の変化」については、社会科や理科の学習事項と直接つながりがありそうだし、英語科の学習活動で「日本の四季の変化」をテーマに発表や会話を行えば、つながりが生まれるだろう。「日本人の繊細で豊かな感性」についても、例えば美術科における余白の美は、国語科における俳句や短歌の数少ない言葉の奥にある世界や、音楽科における雅楽の音階やリズムが持つ幽玄さ、保健体育科の武道や踊りにおける動きや精神といった事柄と共通の、日本人ならではの感性であると考えている。

実践事例

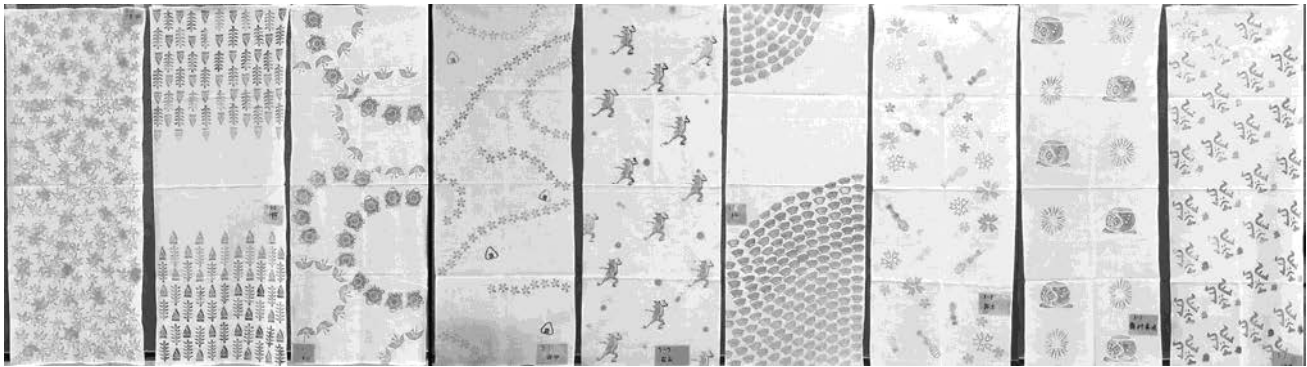
美術

学年 2 年	関係・連携の考えられる教科等 国語・書写・社会・理科・技術・家庭
授業内容 我々が日常生活で使用する器は、左右対称で破たんのない、文字通り美しく整った形が多い。今回は手づくねによるいびつで歪みがある器の美しさを学習する。 学校で扱う焼き物の活動において、子どもたちの未熟さから現れる“意図しない面白さ”を評価する視点も大切だが、中学生の発達段階としては物足りない。今回の授業では、「意図しない未熟さ」から一歩抜け出し、樂茶碗に代表される、歪みや破たんのある形や釉薬の偶然の色彩の美しさやよさを“意識・意図”させ、日本人が持つ「わびさび」に代表される繊細な価値観を育てることをめざしている。	
教科等で身に付けたい力（本時について） ・ 樂茶碗の学習を通して、そのよさや美しさを感じ取る感性。【鑑賞の能力】 ・ 手づくねの制作技法の理解と、実際に制作する技能【創造的な技能】	育成したい資質・能力 ① 日本の伝統や文化に関する理解 ③ 文化の伝承・創造への主体性など
授業のポイント・流れ 1. 動画で樂家の茶碗制作についての動画を視聴する。（1時間） 十五代に及ぶ樂家について知ると同時に、樂家と千利休との関わり、侘茶の美について学ぶ。 2. 陶土を練る。（0.5時間） 練らずに使える教材用陶土だが。あえて土をこねる感触を体験し、味わわせる。 3. 樂茶碗の作り方の動画を視聴（0.5時間） 手づくねの手順について理解する。 4. 制作に入る（3時間） ① 輪積みではなく手づくねで立ち上げていく。 できるだけ薄く作ること、次の削りの量を減らす。 ② かきとりべらを使って表側を整える。 ③ できるだけ薄くなるように内側を削っていく。 壊れやすい作業を通して、心をこめた丁寧な取り組みを促し、自分の作品を大切に扱う気持ちを育む。 ④ 高台の削り出しを行う。	



実践事例

美術

学年 3 年	関係・連携の考えられる教科等 国語・書写・社会・技術・家庭
授業内容 江戸時代に入り，綿花が国内でも栽培されるようになったことで，庶民の生活に欠かせない存在になった日本手拭いは，現代においても広く使用されており，生徒にとってもよく知った生活道具である。その歴史や，粋を楽しむ文化を知ることは，日本人の感性の理解につなげたいと考える。さらに，和の模様や和の色について学ぶことで，単純化されたユニットや連続するパターンの美しさ，彩度を抑えた色の美しさを知り，自分自身で意匠をデザインすることにより，日本の美術文化の伝承，創造の意識を高めることを目指している。	
教科等で身に付けたい力（本時について） - ハンコ（凸版）制作の知識・技能 【創造的な技能】 - テーマの事物の単純化と連続パターンの美しさを理解し，自ら構想する力 【発想・構想の能力】	育成したい資質・能力 ① 日本の伝統や文化に関する理解 ③ 文化の伝承・創造への主体性など
授業のポイント・流れ - 日本手拭いの基礎的知識の理解。（0.5時間） 材料や歴史を踏まえ，江戸時代から今に至る粋の文化について考える。 - テーマを考える。 日本の四季，日本らしさを表現するテーマを考え，テーマを表す事物を単純化した，単位ユニットのデザインを考える（1.5時間） - ユニットデザインの下絵をゴム板に転写し，彫り進める（3時間） 下絵を削り取ってしまわないように，彫刻刀の使い方を考える。 - 版を彫り終わったところで，連続したパターンの配置，配色を考えながら，手拭いと同サイズの紙に試し押しする。（1時間） - 本番。手拭いの布にハンコ押し。（3時間） 伝統的な和の模様を参考にしながら，ユニットを様々な並べ方で押してみる。ユニットの彫りが雑になっても，パターンができることで美しいデザインになっていくことを実感する。	
	

保健体育科

廣瀬 尋理

金子 真鈴

共同研究者 横山 剛士（金沢大学）

1. 伝統文化教育を進めるに当たって

本校は「伝統文化教育を中心とした教科等横断的なカリキュラムの開発ーグローバル社会に生きるために必要な資質・能力の育成を目指してー」をテーマに一昨年度から研究を進めている。このテーマを受けて、保健体育科ではどのようなことができるか模索してきた。これまで大切にしてきたことは、生徒が伝統文化に触れることと教科の目標を達成すること。そして、同時に研究の副題にもある、グローバル社会に生きるために必要な資質・能力の育成を目指すことである。

さて、学習指導要領の保健体育科の目標は、「体育や保健の見方・考え方を働かせ、課題を発見し、合理的な解決に向けた学習過程を通して、心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成することを目指す。」となっている。

特に豊かなスポーツライフという目標に近づけるために、体育ではそれぞれの運動の特性や魅力に応じて、その楽しさや喜びを味あわせることはもちろんのこと、「公正に取り組む」、「互いに協力する」、「自己の役割を果たす」「一人一人の違いを認めようとする」などの態度を育てる必要があり、そのような態度は後述の学校全体として育成する資質・能力にもつながる能力だと考えている。以上のことを意識しながら授業づくりをしていく。

2. 能力・態度の育成に当たって

（1）学校全体として育成する資質・能力について

学校全体として育成する三つの資質・能力（①日本の伝統や文化に関する理解、②伝統文化への理解に基づいた多様な文化を尊重する態度、③文化の伝承・創造への主体性など）について保健体育科ではどのように関連させていくか記述していく。

伝統文化教育を行うに当たって、体育で最初に思い浮かぶのが武道である。武道については武技、武術などから発生した我が国固有の文化である。武道には単に試合の勝ち負けを決めるだけでなく、技能の習得などを通して相手を尊重する礼法を重んじたり、柔道でいえば受け身を取りやすいように投げたりするなど相手を思いやる態度や相手を尊重し合うための独自の作法がある。このような考え方や伝統的な行動の仕方は我が国固有の文化であり、武道を学ぶことは、「①日本の伝統や文化に関する理解」につながる。

また、ダンスではフォークダンスがあり、そこでは日本の民謡や各国のフォークダンスの歴史や由来などを理解させたり、比較させたり、実際に踊ってみたりすることで、それぞれのダンスの良さをより味わうことができる。そのような授業の中で「②伝統文化への理解に基づいた多様な文化を尊重する態度」につながっていくのではないかと考えている。また、伝承されてきた民謡がなぜ、これまで伝承されてきたのか、これからも伝承されていくにはどうしたら良いのかを考えるような授業を行うことで「③文化の伝承・創造への主体性」につなげていきたい。

(2) 関連・連携を図った教科等について

本校では陸上競技、器械運動、球技での技能を高めたり、自他の課題を解決したりする場面において、どのように体を動かしたら効率のよい動きになるか思考させる場面を多く設けている。その際、理科の「運動とエネルギー」にある「力の方向性」と関連が大きくなる。例えば、加える力の大きさが同じでも、力がはたらく場所（点）や力を加える向きによって、力のはたらきが異なり、物体の動き方は違ってくことを生徒が理解することで、技能の習得に役立ったり、課題解決の手助けとなったりする。また、武道においては、柔道着の着方や帯の締め方に着目すると技術・家庭科（家庭分野）と関連が強い。さらには、民謡や各国のフォークダンスの歴史に着目すれば、社会科との関連が考えられる。また、民謡は音楽科でも取り扱うので音楽科との連携も図ることができる。

3. 成果と課題

男子においては今年度、3年生で柔道の実践を行なった。その理由は3年生の彼らは1年前の2年次にも柔道を行っており、2年生の学習内容がどれくらい定着しているのか、またその彼らがこの3年次に同様に①の資質・能力の育成を図った時にどの程度高まるかを見る為である。また2年間を通してみることで、その高まりや課題もより見とることができるのではないかと考えたからである。

実施前のアンケートでは「柔道で学んだ礼法・作法を覚えていますか？」という質問に対し、75%が「覚えている」「だいたい覚えている」と回答し、25%が「あまり覚えていない」「覚えていない」と回答している。また、「覚えている」「だいたい覚えている」と回答した生徒に「礼法・作法を行う中でどのような事を心掛けますか？」という質問に対し、「しっかりと立つことを心掛ける」「立ち方、座り方に決まりがある」という記述が見られた。

さらに「学んだことを生活の中で生かそうとしましたか？」という質問に対し、26%ができたと回答し、74%が出来なかったと回答した。出来たと回答した生徒に「それはどんな時ですか？」と質問すると「授業開始時の挨拶」「正座をする時の姿勢」という記述が見られ、出来なかったと回答した生徒に「それはなぜですか？」と質問すると「そういう場面がなかった」「生活の中で使うものがなかった」という記述がみられた。

以上の結果から、礼法・作法については多くの生徒が覚えているものの、形式的な内容にとどまっている事や、理解したことを日頃の生活に生かすことにはつながっていない生徒がいることが分かった。そこで3年次には柔道を通して学ぶ、礼法・作法を始めとした伝統文化について形式的な部分にとどまらず、その礼法・作法に含まれる心の部分を今まで以上に強調し、指導する事とした。

実践後のアンケートでは「柔道の学習を通して、日本の伝統や文化に関する理解ができましたか？」という質問に対して「理解できた」「だいたいできた」と回答した生徒が94%、「あまり理解できなかった」「理解できなかった」と回答した生徒が6%であった。

また、「柔道の学習を通して2年次より考えが深まったことは何ですか？」という質問に対して「相手を思いやる心」「相手に敬意を払うこと」「切磋琢磨しながら成長すること」という記述が見られた。

さらに、「柔道の学習を通して学んだことを今後の生活に生かそうと思いますか？」という質問に対して、「思う」と回答した生徒が93%、「思わない」と回答した生徒が7%であった。「思う」と回答した生徒に「それはどんな場面ですか？」と質問すると「相手の意見を尊重する」「ラ

イバルであってもアドバイスを送り合うなどし、自他ともにレベルアップすること」という回答があり、逆に思わないと回答した生徒に「それはなぜですか？」と質問すると「生かす場面が考えられない」という回答があった。

上記の結果から2年間柔道を学習する中で、柔道を通じて日本の伝統や文化を多くの生徒に理解させることができた。また2年間学習する中で、生徒の記述にもあるように、形式的な礼法・作法だけでなく、柔道を通じて学んでほしい心の部分の理解もより深まっていくことが示唆された。さらに今後の生活に生かそうという生徒も93%おり、今回①の資質・能力の育成を図ったが、同時に生徒は「③文化の伝承・創造への主体性」の資質・能力に関わる意識も高まったことが伺える。しかしながら、6%は理解できなかったと回答し、そのように回答した全ての生徒が今後の生活に生かそうと思わなかったと回答している。そう考えると①と③の資質・能力は相互に関係していると考えられる。

また、今年度①を重点的に行ったが、①をより効果的に育成するためには「②伝統文化への理解に基づいた多様な文化を尊重する態度」も大切であると感じた。それは、生徒が日本の伝統的な生活様式である、畳で生活したり、正座をしたり、礼法・作法を理解することと、他国の文化を尊重する態度をもちながら、他国の生活様式や他のスポーツでの礼の違いなどを比較することで、より日本の伝統文化の良さに気づくことができ、①の育成の強化にもつながると思ったからである。このように①と②が相互に関連させていくなかで、③の資質・能力が効果的に育成できるのではないかと実践を通して感じた。

今後の課題としては上記のような関連性を意識しながら、指導計画を立てること、さらに保健体育だけでなく他教科との連携を図りながら、より効果的な学習を計画していくことである。また柔道を専門に教えている外部人材も活用しながら、生徒にとってよりよい学習になるようにしていきたい。

女子は2年生のダンスで実践を行い、フォークダンスとして「ジェンカ」、「マイムマイム」、そして「YOSAKOI ソーラン」を扱った。2年生女子73名のダンスへの意識としては、ダンスを「あまり好きではない・苦手・やりたくない」と消極的な生徒が38%、「好き・どちらかと言えば好き」と肯定的にとらえている生徒が62%と、ダンスに対して意欲的にとらえている生徒が多かった。しかし、消極的な生徒も、肯定的にとらえている生徒も、共に「フォークダンスや日本のダンス（ゆっくりな踊り）はあまりやりたくない」と感じている生徒が多かった。

単元の導入として、まずはフィンランドのフォークダンスである「ジェンカ」を扱った。「ジェンカ」は振り付けを容易に覚えることができ、曲も聴いたことのある生徒が大半であり、近くにいる人たちと笑顔で踊る姿が見られた。次に、イスラエルのダンスである「マイムマイム」を踊った。さらに「創作マイムマイム」として、「開拓地で水を掘り当てた喜びを表現した踊り」だという意味を込めて表現するダンスを、生徒たちで創作した。この2つを通し、外国のフォークダンスの踊りには意味が込められていることを伝えた。

「YOSAKOI ソーラン」は、高知県の「よさこい」を基として、北海道で発祥した踊りである。「YOSAKOI ソーラン」は2つの条件（鳴子を持って踊ること、曲にソーラン節のフレーズを取り入れること）を満たせば振り付け等は自由に決めて踊ることができる。そのため、振り付けを生徒が自分たちで決めて踊ることができるので、生徒たちの発想力や表現力を発揮できるのではないかと考えた。そして、振り付けを考える過程で様々な話し合いがなされ、協力する姿が見られるのではないかと期待した。

単元終了後の生徒たちからの感想には、「最初の方は意見が合わなかったりして、なかなかまとまら

なくて大変だったけれど、みんなで色々な意見を出し合って、より良くて、自分たちだけの踊りを創れたのが楽しかった」や、「自分だったら思いつかないことを誰かが思いつくところがすごい」、「1人ではなく、複数人でやるからこそ楽しむことができるので、みんなで協力する力がついたと思う」という感想が多く、保健体育科の目標としての、「互いに協力する」ことや、「一人ひとりの違いを認めようとする」態度が育成できたのではないかと考える。

また、「なぜフォークダンスは踊り継がれているのか？」という問いに対しての意見として、「伝統として大切にされているからだと思う」という生徒もいれば、「ダンスはその地域に合ったものだと思うし、伝統的なもの。だから踊り継いで未来の人たちにダンスを知ってもらい、その地域の特色や魅力を知ってもらうためだと思う」、「その国にしかない昔からのものだから。昔の人の知恵、思い、表現が組み込まれているから」という感想があった。生徒たちは、現在にも伝わっているダンスが、ただ単にダンスの振り付けを覚え踊り継がれてきただけでなく、込められた意味・歴史も把握して、踊り継いでいくことが必要だと感じていた。今回、生徒たちの完成させた「YOSAKOI ソーラン」には、どのグループも漁の動きを取り入れていた。「ソーラン節」はニシン漁の歌だという起源や意味を捉えたことで、全グループの振り付けの中に、漁の動き（網を投げる、引く、ニシンを見つける、仲間に伝えるなど）が取り入れられたのではないかと考える。このことは、資質・能力③を育成しようとしていく上で、まずは資質・能力①の育成を通しての基礎固めが必要となることを示している。また、そのためには、我が国と外国との比較（資質・能力②の育成）、国内でも地域で文化が違うことの理解ができるからこそ生まれる考え方なのではないかと考えた。

上記から、ダンスの単元は、資質・能力①～③それぞれの育成に寄与できる単元であると考え。また、今回の「YOSAKOI ソーラン」では、保健体育科の目標の「互いに協力する」、「一人ひとりの違いを認めようとする」態度の育成もできると考えられる。自己を表現する楽しさや、生徒の思考の流れを考えた単元計画、ダンスが伝わってきた地域の歴史や文化、特徴的な動き（今回は漁の動き等）を体験するなどすると、さらに動きも洗練されていくのではないかと考え、今後の課題としていきたい。

男子アンケート記述

「柔道を通して学習以前より（2年次より）考えが深まったことは何ですか？」

柔道の大切な考え方である自他共栄の精神と、
精進善用の精神の大切さを深く知ることができ、
授業中も相手を思いやりながら言式合をするこ
うができた。

相手を思いやる心を改めて実感することができ尊重することの
大切さを深めることができた。

柔道をする中で他人に対する敬意を表せることで、良い関係が築けること。

相手に敬意を払うこと・相手を思いやること

お互いに尊重し、切磋琢磨しながら
成長することの大切さ、自他共栄の
大切さを感じました。

「柔道の学習を通して学んだことを今後の生活に生かそうと思いますか」の問いに「思う」と回答した生徒に「それはどんな場面ですか？」

スポーツをするときに、例えば自分の対戦相手でライバルたっ
たりしてもアドバイスを送り合うなどし、自他共にレベルアップ
がすることができればいいと思う。

意見が相手と食い違ったときに相手の意見も尊重する。

初めて会った人と話す時や、正式な場では礼儀に気を付けてです。
また、普段の日常、学校生活では、相手を思いやる心を活かしています。

◎なぜダンスは踊り継がれているのだろうか？

伝統として大切にされているからだと思う。

・ダンスはその地域に合ったものだと思うし、伝統的なものです。だから踊り継いで未来の人たちにダンスを知ってもらい、その地域の特色や魅力を知らせてあげたいと思います。それを続けていくことが土地の魅力を発信することにつながると思うし、ダンスという形で特色を残していく方法だと思います。

その国にしかない昔からのものだから。
昔の人の知恵、思い、表現が組み込まれているから。

◎「よっちょれ」を踊っての感想

みんなで創り上げる時に楽しかった事は自分だったら思いつかない事を誰かが思いつくところです。振り付けを決める時に、「この部分はイメージが分からない」と思った所がありました。しかし、みんなは様々なアイデアを出していて、素敵だなと思いました。

1人ではなく、複数人でやるからこそ楽しむことができるので、みんなが協力する力がついたと思います。

実践事例

保健体育

学年 1 年	関係・連携の考えられる教科等 社会・音楽
授業内容 ・ 様々な国の民謡（フォークダンス）をしよう ・ 民謡（フォークダンス）を自分流にアレンジしてみよう	
教科等で身に付けたい力（本時について） ・ 踊りの特徴を捉え、様々なステップや隊形を考え、組み合わせている。 【思考・判断】	育成したい資質・能力 ②伝統文化への理解に基づいた多様な文化を尊重する態度
授業のポイント・流れ 2つのフォークダンスの歴史や意味を理解しながら、それぞれの良さやそのダンスが大切にしていることに気づき、それを意識しながら自分流にアレンジしていく。 1. ジェンカを知る（歴史や踊りの意味を知る）（5分） 2. ジェンカの様々な踊り方を知る（少しずつ変化していることを伝える）（5分） 3. ジェンカの踊りの何を残し、何を変化させていくか考え、創作する（10分） 4. マイムマイムを知る（歴史や踊りの意味を知る）（5分） 5. マイムマイムの様々な踊り知る（5分） 6. マイムマイムの踊りの何を残し、何を変化させていくか考え、創作する（10分） 7. それぞれの踊りの特徴や面白さなどについて感想を述べる（10分） マイムマイムを踊る様子 ジェンカを創作している様子	

実践事例

保健体育

学年 1 年	関係・連携の考えられる教科等 社会・音楽・家庭
授業内容 ・ 現代版こきりこ節を創ろう	
教科等で身に付けたい力（本時について） ・ 踊りの由来を理解しながら、踊りや隊形を変化させることができる。 【思考・判断】	育成したい資質・能力 ③文化の伝承・創造への主体性
授業のポイント・流れ 1. 本時の課題を知る（5分） ・ 各班で創った現代版こきりこ節を中間発表し、各班から意見をもらうことにより、よりよい現代版こきりこ節にすることを伝える 2. 中間発表をする（15分） ・ 各班の発表を見て、何を伝えよう（表現しよう）としているのかを見る。 3. 各班の意見を参考に考える（5分） ・ 意見を参考にしながら、自分たちが考えた部分が伝わっているのかを確認する。 4. 自分たちの踊りをより進化させる（20分） ・ 踊っている自分たちや見ている人にも楽しさが伝わるように進化させていく。 ・ 自分たちが残したい（大切にしたい）部分を意識しつつ、楽しく踊れるように工夫する。 5. まとめ（5分） ・ 各班の意見を参考にどのような工夫をしたか互いに共有する。  グループ内での話し合いの様子  話し合い後こきりこ踊りを創作している様子	

実践事例

保健体育

学年 1 年	関係・連携の考えられる教科等 家庭
授業内容 ・柔道ってどんなもの？ ・柔道着を着てみよう	
教科等で身に付けたい力（本時について） ・柔道の成り立ちや精神について理解することができる。【知識・理解】	育成したい資質・能力 ①日本の文化に関する理解
授業のポイント・流れ 1. 柔道ってどんなイメージ？（5分） ・怖い、痛い ・礼儀正しい ・難しい 2. 柔道とは…（10分） ・1882年（明治15年） ・嘉納治五郎 ・自他共栄 ・精力善用 3. 柔道衣を着る（15分） ・前襟の重ね方 ～右？左？どっちが上～ ・帯の締め方 ・着方をマスターしよう 4. 柔道衣を着て動こう（15分） ・横転がり ・前まわり ・後ろまわり ・ほふく前進 ・手押し車 ・おんぶ ・ペアを両手で持ち上げる 5. 柔道衣をたたむ（5分） ・きれいにたたんで、袋の中へ	
	

技術・家庭科（技術分野）

服部 浩司

共同研究者 岳野 公人（滋賀大学）

1. 伝統文化教育を進めるに当たって

（1）伝統文化教育とグローバル人材の育成との関わり

本校は、昨年度までの2年間、国立教育政策研究所から研究指定を受け、伝統文化教育に関する研究を行ってきた。本年度は、伝統文化教育に関する研究の3年目として、これまでの実践を踏まえたまとめを行う。

本校では、伝統文化教育の目的を「グローバル人材の育成」と捉え、研究を行ってきた^{1, 2)}。そのよりどころとなる資料の一つに、文部科学省「教育課程部会におけるこれまでの審議の概要：教育内容に関する主な改善事項（3）伝統や文化に関する教育の充実」がある³⁾。そこには「世界に貢献するものとして自らの国や郷土の伝統や文化についての理解を深め、尊重する態度を身に付けてこそ、グローバル化社会の中で、自分とは異なる文化や歴史に敬意を払い、これらに立脚する人々と共存することができる。」との記載がある。超少子高齢社会に突入した日本が、経済成長を続けるため対策の一つとして、外国人労働者とその家族を受け入れることなどが考えられる。このことより、本校生徒だけではなく、日本に住む全ての人がグローバル化社会を生きることになる。そのため、伝統文化教育は今後より重要なものになると考えられる。

（2）技術分野を通じた伝統文化教育

昨年度までの調査・研究により得られた技術分野と伝統文化教育との考察は、次の三つである。

①学習指導要領解説における伝統文化に関する記述の記載数について

平成30年4月1日より、次期学習指導要領（平成29年告示学習指導要領）への移行措置が行われている。それに伴い、次期学習指導要領解説技術・家庭編技術分野⁴⁾の中に、伝統や文化に関する記述がどの程度記載されているのかを調査した（表1）。その結果、「材料と加工の技術」と「生物育成の技術」、「情報の技術」の内容において伝統や文化に関する記載を見ることができた。その中でも「材料と加工の技術」の内容は、他の内容と比較し、伝統や文化に関する記載が多く見られることより、伝統文化教育を行いやすい内容であると考えられる。また、現行の学習指導要領解説⁵⁾と次期学習指導要領解説の伝統や文化に関する記載数を比較した結果、先述した三つ内容において記載数が増加していることより、伝統文化教育の実施が促されていることが分かる。

表1. 伝統文化に関する記載数の比較

内容 (表記は次期学習指導要領)	学習指導要領に記載されている伝統文化に関する記載数	
	現行学習指導要領	次期学習指導要領
材料と加工の技術	5カ所	9カ所
エネルギー変換の技術	0カ所	0カ所
生物育成の技術	1カ所	2カ所
情報の技術	0カ所	1カ所

②伝統文化に触れる機会の提供

昨年度までに実施した生徒アンケートより^{1, 2)}, 生徒は日本の伝統的な技術に興味はあるが、私生活では学ぶ機会が少なく、学校が伝統的な技術を学ぶ機会となっていると考えられる。科学技術の進展により、ものづくりに関する様々な加工が自動化されている中、鉋を用いた仕上げに代表されるような、機械で行うことのできない緻密な加工の技を、知識だけではなく実際に体験できることは、技術教育の意義であると考えられる。

③伝統技術に関する知識・理解の不足

昨年度、伝統技術に関する授業実践前後に実施した生徒の意識調査票を分析した結果²⁾, 「日本の伝統技術はすごいと思う」、「日本の伝統技術を受け継ぐことは大切だと思う」、「日本の伝統技術を日本人に説明できると思う」、「日本の伝統技術を日本語の分かる留学生に説明できると思う」という項目に関して、授業実践による有意な意識の向上は見られなかった。その要因として二つのことが考えられる。一つ目は、生徒と教師の間で「伝統技術」という言葉の意味を共通理解できていないことが考えられる。「伝統技術」という言葉は広義に解釈できるため、生徒が授業内で学んだ「木材の変形を考慮した組み立て方」などの伝統的に受け継がれてきた知識の学習では、「伝統技術」を理解したと捉えられていないと考えられる。二つ目は、「伝統」ということに対する先入観であると考えられる。生徒の多くは「伝統は大切なので、受け継がなければいけない。」という先入観があり、「なぜ伝統は大切なのか」や「なぜ受け継がなければいけないのか」といったと本質に考えが及んでいないと思われる。昨年度の事前調査からは「伝統技術は、手仕事だからすごい」や「木だけで建物を作るからすごい」などの表面的な表現が多く見られた。以上のことより、中学生には、広義に解釈できる「伝統技術」という表現よりも、「具体的にどのような伝統技術がなぜ優れているのか」を理解させることが必要であり、学習効果を検討する際も、生徒が学んだ具体的な内容が意識を変化させたかどうかを検討する必要があると考えられる。

(3) 伝統文化教育と思考力・判断力・表現力との関係

日本産業技術教育学会「21世紀の技術教育」⁶⁾では、技術教育で育むべき固有の能力として技術的課題解決能力をあげている。技術的課題解決能力とは「ものづくりに関わる問題を技術的視点で認定し、課題化して、一定の制約条件のもとで最適化を図りつつ解決する能力」であると記載されている。技術分野では、ある課題に対して学習者がおかれた状況により生じる制約条件の中で、「社会的側面」、「環境的側面」、「経済的側面」の三つの側面から多面的・総合的に評価し、最適解を導き出すことが技術分野の思考力であると考えられる。

伝統文化教育は、「日本や郷土の伝統や文化についての理解を深め、尊重する態度」を身に付けることが役割の一つであると考えられるため、それが直接「思考力・判断力・表現力」とつながることは考えにくい。しかし、「グローバル化社会の中で、自分とは異なる文化や歴史に敬意を払い、これらに立脚する人々と共存する」³⁾ためには、自国と他国をただ比較するだけではなく、自国や他国の伝統文化に対する歴史的背景や、それを継承してきた人々の思いなどを多面的・総合的に判断することが必要になると考えられる。そのため、伝統文化教育の中でも技術分野の思考力・判断力・表現力は活用されることが考えられる。

2. 能力・態度の育成に当たって

(1) 学校全体として育成する資質・能力について

本校では、伝統文化教育を通じて学校全体として育成する資質・能力（以下、伝統文化の資質・能力）を三つあげている。

- ①日本の伝統や文化に関する理解
- ②伝統文化への理解に基づいた多様な文化を尊重する態度
- ③文化の伝承・創造への主体性

技術分野では、これまでの調査・研究より「①日本の伝統や文化に関する理解」を育成する資質・能力を重点項目と定め、授業実践を行っている。しかし、平成29年度まで本校が行っていたESDの研究より、ESDの視点に立った学習指導で重視する態度「進んで参加する態度」は、知識・理解の育成をねらいとした授業実践においても育成されることが示唆されている⁷⁾。この「進んで参加する態度」とは、「集団や社会における自分の発言や行動に責任をもち、自分の役割を踏まえた上で、ものごとに自主的・主体的に参加しようとする態度」であり、本校の学校全体として育成する資質・能力の「③文化の伝承・創造への主体性」に相当するものであると考えられる。そのため、「③文化の伝承・創造への主体性」においても、伝統文化への知識・理解の育成をねらいとした「①日本の伝統や文化に関する理解」の授業実践で育成されることが考えられる。そのため、技術分野では、「①日本の伝統や文化に関する理解」を育成することねらいとしながらも、「③文化の伝承・創造への主体性」が同時に育成されることも視野に入れ、授業実践を行っていく。

(2) 関連・連携を図った教科等について

学習指導要領解説技術・家庭編（技術分野：材料と加工の技術）⁴⁾には、「緻密なものづくりの技が、我が国の伝統や、木の文化、和の文化を支えてきたことに気付かせるようにする。」という記載が見られる。柳宗悦「手仕事の日本」⁸⁾には、次のような文章がある。「日本は南北にとっても細長い国であります。北は北海道という冠を頂き、大きな本州はその体であり、四国や九州の島々はいわば手足に当たるような部分であります。千島の果から沖縄の先まで見渡すと氷りついている寒い土地から雪を知らない暑い国にまで及びます。（中略）寒暖の二つをともに有するこの国は、風土に従って多種多様な資材に恵まれています。例を植物に取ると致しましょう。柔らかい桐や杉を始めとし、松や桜や、さては固い^{けやき}樺、栗、^{なら}櫨。黄色い桑や黒い黒柿、^{まだら}斑のある楓や^{まさめ}柂目の^{ひのき}櫨。それぞれに異なった性質を示して吾々の用途を持っています。この恵まれた事情が日本人の木材に対する好みを発達させました。こんなにも木の味に心を寄せる国民は他にないであらうでしょう。」このことから、日本における木の文化は、地理的な要因と大きく関係していることが分かる。また、日本の伝統産業が誕生する背景の一つには、雪が多く外で農作業ができない期間の副業として工芸品を作ったことが始まりのものがある。このことから伝統文化教育では、地理的な要因や歴史的な要因が関係していると考えられる。そのため、技術分野における伝統文化教育では、地理や歴史を学習する、社会科と連携する必要があると考えられる。

3. 成果と課題

本研究は、技術分野「材料と加工の技術」の内容において、伝統文化の資質・能力「①日本の伝統や文化に関する理解」を育成する授業を開発することを目的としている。また、昨年度までの研究より得られた課題として「伝統文化という言葉の捉え方に対して、教師と生徒の間に差が生じている」ことや、「生徒は『伝統は大切なものであり、受け継がなければならない』という先入観を持っており、『なぜ伝統は大切なのか』や『なぜ受け継がなければならないのか』といったと本質にまで考えが及んでいない」ことがあげられている。これらに対しても授業改善を図り、実践を行った。その結果、下の三つことが得られた。

(1) 資質・能力①を高めさせる授業の開発

伝統文化の資質・能力「①日本の伝統や文化に関する理解」を育成する授業実践として二つの授業を開発した。

①鉋に込められた工夫や歴史的背景を読み取り、鉋の使い方を理解する授業実践

現在、様々な加工機械が登場し、鉋がけを行う機械も存在する。機械を用いた加工は、正確で作業スピードも速い。しかし、鉋がけを行う機械で加工した木材の木肌を見ると、一見きれいに加工されているように見えるが、ナイフマークという回転する刃の跡が残っている。手加工による鉋がけを行った木肌と比較すると大きな差があることに気が付く。生徒の身の回りには、大量生産されて安価で販売されている「もの」が多く存在するが、日本人の職人が伝統として引き継いでいる技には、現在の加工機械では再現できない技術があることに気付かせる。また、鉋は、中国や朝鮮半島より伝わったと言われている⁹⁾。平鉋の原型になった鉋には、取っ手が付いていたが、江戸時代に描かれた絵巻を見ると、鉋に取っ手が見られない。このことに関して「考古学の散歩道」という文献の中では⁹⁾、工業デザイナーの秋岡芳夫の文章を紹介したのちに「日本人は、道具をつかうときにも、手のひらのはたらきを重要視したため、把手や部品を取り去ってしまったのだ。」とまとめており、手のひらの感覚を大切にする日本人は、手と刃との距離を短くするために、鉋から取っ手を取り除いたと解説している。このように鉋の使い方を理解させる授業実践においては、鉋の歴史と技能の両面から伝統や文化に関する授業実践を行うことができると考えられる。

②日本のものづくりの強みである「緻密さへのこだわり」への理解を促すための授業実践

技術の急速な進展により、ものづくりの様々な作業が自動化されている。そのため、自動化の進む製造業においては、同じ加工機械を導入した他の企業から差別化を図り、顧客から求められる製品を製造するような強みが必要になると考えられる。そして、その強みとなるものの一つに、日本の職人が古くから大切にしている「緻密さへのこだわり」があると考えられる。そのため、加工を有する授業に入る導入実践として、ペリーが書いた「日本遠征記(四)」¹⁰⁾を紹介することが効果的であると考えられる。「日本遠征記」とは、江戸時代にペリーが日本に來航し、実際に日本人の生活や風習などを見て、感じたことをまとめた本である。この本には、日本のものづくりのことも書かれており、その中には「实际的及び機械的技術において日本人は非常な巧緻をしている。そして彼らの道具の粗末さ、機械に対する知識の不完全を考慮するとき、彼らの手工の技術の完全なことはすばらしいものようである。日本の手工業者は世界におけるいかなる手工業者にも劣らず練達であって、人民の発明力をもっと自由に発達させるならば日本人は最も成功している工業国民にいつまでも劣ってはいないことだろう。他の国民

の物質的進歩の成果を学ぶ彼らの好奇心、それを自らの使用にあてる敏速さによって、これら人民を他国との交通から孤立せしめている政府の排外政策の程度が少ないならば、彼らは間もなく最も恵まれたる国々の水準にまで達するだろう。日本人が一度文明世界の過去及び現在の技能を所有したならば、強力な競争者として、将来の機械工業の成功を目指す競争に加わるだろう。」と書かれている。ここに書かれている日本の手工技術のすばらしさや、日本開国後のものづくりを予測したことが、現実となったことを解説することで、これからの日本のものづくりが大切にしなければならない「緻密さへのこだわり」に気付かせることができると考えられる。

（２）調査票の作成

昨年度の研究より得られた課題の一つに「伝統文化という言葉の捉え方に対して、教師と生徒の間に差が生じている」ことをあげた。昨年度行った質問紙調査では「日本の伝統技術はすごいと思う。（伝統技術とは、ものづくりに用いられるものを指す。例えば、釘を使わずに木を組み合わせる木組みの技術や、のこぎりなどの昔から日本にある道具を用いたものづくりの技術などである。）」に対して、「はい」、「いいえ」の二件法で回答を求めた。その結果、99%の生徒が「はい」と回答したが、その理由には「手作業だから」や「エコだから」といった明確な理由になっていないと思われる表面的なものが多くあった。このような結果になった要因として二つのことが考えられる。一つ目は、「伝統技術」という言葉が広義に解釈できること。二つ目は、二件法であったため、表面的にでも「すごい」と思えば、肯定的な意見を選択しなければならない状況であること。この二つが考えられる。そのため、本年度は、伝統技術という言葉は用いず、より学習内容に焦点を当てた具体的な質問になるように改善を行った。また、三件法を採用するとともに、肯定的な意見を回答した生徒にのみ、その理由を書かせることで、表面的に肯定的な回答を行うことのないようにした。作成した調査票と「材料と加工の技術」の内容に入る前に実施した調査結果を図1に示す。昨年度の同時期に実施した調査結果と比較すると、新たに追加した項目である「よく分からない」が48%を示している。これに、「ある」と「無効」を足すと94%となり、昨年度と同等の値になる。このことより、昨年度と比較して生徒の状況を正確に把握できる調査票を作成することができたと示唆される。今年度は、「材料と加工の技術」の内容における伝統文化に関する実践が終わっていないため、事後調査を行うことはできていない。授業実践終了後、事後調査を行い、事前調査と比較することで、実践の効果を検討していきたい。

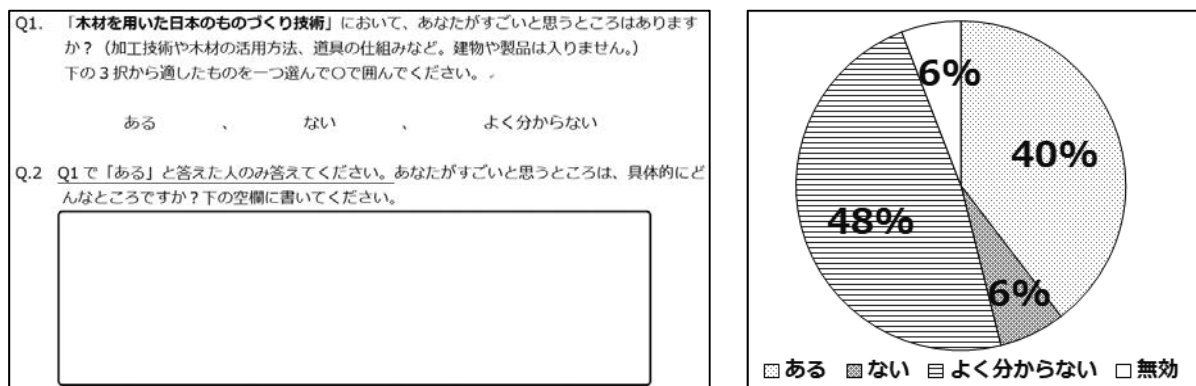


図1. 作成した調査表と事前調査結果

（３）伝統や文化を批判的に捉える授業実践の試み

昨年度の課題にあげられた「なぜ伝統は大切なのか」や「なぜ受け継がなければならないのか」

といったと本質にまで考えが及んでいないことに関して、伝統や文化を批判的に捉える授業実践を2年生の「生物育成の技術」の実践において試みた。本年度、2年生では伝統野菜を栽培する実践を行った。この実践の発展課題として「日本を社会的、経済的に捉えたとき、伝統野菜の栽培を続けることは必要か？」という投げかけを行った。技術分野で学習した伝統野菜の知識や、社会科で学習した日本の現状に関する知識などを踏まえ、個人の意見を基にグループ内での議論や学級全体を通した議論を進め、伝統や文化に関して思考が深まるような対話的な実践を行った。授業自体は、「正しい知識を身に付け、一人ひとりが多面的・総合的に伝統や文化を捉えて判断しなければならない。」というオープンエンドな形でまとめを行った。実践後の生徒の感想には「私は『伝統は守り続けなければならないもの』という固定概念がありました。でも、この学習で『伝統だからといって守り続ける必要があるのか？』という問いがあり、伝統文化の本当の意味について考えさせられました。」や「私は『何のために伝統文化を学ぶのか』という問いに対して、自分の考えがまだ完成していないので、伝統文化の本質的なところがまだ分かっていないと思う。これからの学習で自分なりの答えを見つきたい。」、「説得力を増やして、相手に納得してもらうためには、知識をつけなければいけないということを学びました。僕たちは、想像で反論したりしますが、ちゃんと知識を持って意見を言おうと思いました。」などの意見が見られた。このことから、この試みは、昨年度著者が感じた「伝統」に関する先入観を生徒自身が感じ、批判的に捉えるきっかけを与えられる可能性があるとし唆される。また、最後の感想文では、国語科との関係性が高いことより、国語科との教科連携も考えられる。

まとめ

グローバル化が進む現在、自分とは異なる文化や歴史に敬意を払い、これらに立脚する人々と共存するためには、まず自国の伝統や文化に関する理解を深めた後に、その成り立ちと同じような伝統や文化が他国にも存在することに考えを広げなければならないと考えている。3年間の研究で、技術分野の見方で伝統文化教育に取り組み、いくつかの実践を行った。最終年である今年度は、原点に戻り「緻密なものづくり」に焦点を当てることで、技術の進展が著しい今日だからこそ大切にしなければいけない、日本人の職人がもっている緻密な加工へのこだわりを第三者の視点から客観的にとらえることで、伝統文化への理解を深めさせることができたと考えられる。

参考文献

- 1) 金沢大学附属中学校：研究紀要第60号，pp. 92-95(2018)
- 2) 金沢大学附属中学校：研究紀要第61号，pp. 103-108(2019)
- 3) 文部科学省：「教育課程部会におけるこれまでの審議のまとめ」，p. 56，アクセス日：2020. 1. 5，
URL：http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/_icsFiles/afieldfile/2014/04/23/1265449_001.pdf
- 4) 文部科学省：中学校学習指導要領（平成二九年告示）解説 技術・家庭編，pp. 25-59(2018)
- 5) 文部科学省：中学校学習指導要領解説 技術・家庭編，pp. 14-37(2008)
- 6) 日本産業技術教育学会：「21世紀の技術教育」，日本産業技術教育学会誌第41巻3号別冊，p. 5(1999)
- 7) 服部浩司，岳野公人，奥野信一，中川隆政：ESDに関する技術科設計の学習を中心としたカリキュラムの開発，滋賀大学環境総合研究センター研究年報第13巻1号，pp3-9. (2016)
- 8) 柳宗悦：手仕事の日本，岩波文庫，p. 22(1985)
- 9) 田中琢，佐原真：考古学の散歩道，岩波新書，
- 10) ペルリ：日本遠征記（四），岩波文庫 pp. 126-131(1955)

実践事例

技術

学年 1 年	関係・連携の考えられる教科等 社会
授業内容 木材を切る方法は、「のこぎり」や「電動丸のこ」、「バンドソー」など様々なものが存在する。工作機械を用いると素早く、一見きれいに切ることができる。しかし、加工面をよく見ると、ナイフマークという波打った跡が残る。それを無くするためには、鉋を用いて表面を仕上げる必要がある。本授業実践では、鉋を用いて木材の表面を仕上げる方法を理解させ、実際に鉋がけを行う活動を通して、日本の伝統建築に見られる緻密な加工の素晴らしさを感じさせたい。	
教科等で身に付けたい力（本時について） ・木材の性質に適した鉋のかけ方を理解する。 【生活や技術についての知識・理解】 ・鉋を用いて木材を削ることができる。 【生活の技能】	育成したい資質・能力 ①日本の伝統や文化に関する理解 ③文化の伝承・創造への主体性
授業のポイント・流れ ○ 図面を基に、正確なものづくりを行うためには「削りしろ」を考慮した加工が必要となる。生徒は、前時までに「材料取り寸法線」上をのこぎりで切断している。本時は、その切断面から「仕上がり寸法線」までの「削りしろ」を鉋で削ることを伝える。(5) ○ 鉋の仕組みを伝える。(10) 鉋は、「鉋台」「鉋身」「裏金」から構成されていることを知る。 木が削られて出る「鉋くず」の厚さは、「したば」から出る刃の量で決まる。その調整には、長年の経験と道具の手入れが必要であること知る。 ○ 法隆寺をテーマに、鉋の歴的背景を紹介する。(10) 鉋は、中国・朝鮮半島から日本に伝わったものであり、法隆寺には「やりがんな」の跡が現在も残っている。「台鉋」の使用は、江戸時代頃から確認されている。日本に伝わった際の「台鉋」には取っ手がついていたが、手の感覚を大切にする日本人は、刃先から手までの距離をなるべく短くするために、取っ手を無くしたという説があることを知り、緻密なものづくりへの日本人のこだわりを知る。 ○ 鉋の使い方を伝え、鉋がけをさせる。(15) 材料を切断した面は、加工機械で切断した一見きれいに見えるものであっても、ナイフマークが残っている。そのため、ナイフマークを消し、仕上がり寸法線までの削りしろを鉋で削ることを知る。鉋で木材を削るときは、ならい目方向に鉋を引いて削ることを知る。鉋で木材を削る。 ○ 掃除と後片付けをさせる。(10)	



実践事例

技術

学年 1 年	関係・連携の考えられる教科等 社会・数学
授業内容 差し金^{さしがね}の技術的な仕組みを学習した後に、緻密な加工に必要な罫書き^{けがき}の方法を知り、罫書きを行う。	
教科等で身に付けたい力（本時について） ・ 差し金を用いた罫書きの方法を理解している。 【生活や技術についての知識・理解】 ・ 図面にあった罫書きができる。【生活の技能】	育成したい資質・能力 ①日本の伝統や文化に関する理解 ③文化の伝承・創造への主体性
授業のポイント・流れ ○ 前時の振り返り。（８） ・ 製図がミリメートル単位なのは、緻密な加工を行うためであることを確認する。 ・ ペリーの「日本遠征記」の一部を示し、細部までこだわる緻密な加工が日本の強みであることを共有する。江戸時代の日本とイギリスの都市を比較し、当時の技術力を比較させ、ペリーの予想が現実になったことを確認する。 ・ 機械化が進み、大量生産が進む中、差別化を行うことが必要であり、その際日本の強みとなるものの一つが「緻密さへのこだわり」であると考えられることを伝える。 ○ 差し金の仕組み。（７） ・ 材料に「加工に必要な線」をかく作業のことを罫書きということを伝える。 ・ 差し金には、様々な目盛りがあるが「丸目」「角目」は特殊な目盛りなため、使用しないことを伝える。 ・ 「丸目」「角目」の説明をする。 ・ 差し金は、基準面に対して直角な線にかくだけではなく、様々な角度の線にかくことができることを伝える。ことわざ「差し金無くては雪隠（せっちん）も建たぬ」より、差し金は大工にとって必要な道具であったことを伝える。 ○ 差し金の使い方。（15） ・ 緻密な加工を行うためには、緻密な罫書きが必要であることを伝える。 ・ 拡大した定規のイラストを用い、「10mmは、どこからどこまでか」を考えさせる。 ・ 差し金を用いた罫書きの実演を行う。 ○ 材料（座板）への罫書き。（15） ・ 材料を配付し、図面をもとに罫書きをさせる。（木裏側に罫書きをすることを伝える。理由は後日伝える。） ○ まとめと片付け（５）	

技術・家庭科（家庭分野）

橋本 正恵

共同研究者 綿引 伴子（金沢大学）

1. 伝統文化教育を進めるに当たって

（1）本校の研究との関連

本校では、平成 26 年からの 3 年間 ESD に関する教育研究に取り組んだ。ESD に関しては、多くの学校がその実践や研究に臨んでいるが、本校の取り組みの特色は各教科の学習において主に取り組むということである。総合的な学習の時間などで扱われることの多い ESD に、各教科等がそれぞれの学習内容の中で取り組むことを中心として全教科等で行った。更に、全教科等の学習で取り組むことに加え、それらを教科等横断的に連携させてカリキュラムマネジメントを行ったことも。本校の研究の特色であると言える。

教科等を横断した学習や複数の教科で連携した学習を構築する時、技術・家庭科の役割の特性は、生徒の生活と様々な教科等で学習した内容を結びつけることができることにある。資質・能力の育成に関わって、学んだことを社会で生かす能力の必要性が重視されて久しいが、技術・家庭科はその学習内容そのものが、一人一人の生徒の生活に即したものであるから、その特性をより生かして他教科等の学習内容と各生徒の生活の橋渡しとなることができる。

技術・家庭科の各学習内容は、生徒の生活そのものを扱う学習であり、各教科等で学習した内容が現在や将来の生活と関わっていく中継ぎとなる。そのような教科の特性を生かして、技術・家庭科の学習では常に個々の生徒の生活の中にある課題や疑問を見取り、その解決に向けて思考をすることをねらった題材計画を工夫していくことを重視している。

以上のような本校の研究の方法や体制と教科の特性を踏まえ、技術・家庭科家庭分野は、学校全体のカリキュラムマネジメントがより円滑にすすめられるよう、様々な教科等を結びつける要となることができると考えている。また、学校で獲得した知識や技能、その他の様々な能力が生徒の生活の中で活用される際の仲介の役割を果たしたいと考えている。

（2）新学習指導要領に向けて

これまで、家庭分野の学習では、特に衣食住に関する学習において、和食や和服、和の住まいなどについて扱ってきており、伝統文化教育に関しての実践は以前より取り組まれてきた。

新学習指導要領では、技術・家庭科（家庭分野）の目標について、「生活の営みに係る見方・考え方を働かせ、衣食住などに関する実践的・体験的な活動を通して、よりよい生活の実現に向けて、生活を工夫し創造する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。」としている。そして、その解説には「生活の営みに係る見方・考え方を働かせとは、家庭分野が学習対象としている家族や家庭、衣食住、消費や環境などに係る生活事象を、協力・協働、健康・快適・安全、生活文化の継承・創造、持続可能な社会の構築等の視点で捉え、生涯にわたって、自立し共に生きる生活を創造できるよう、よりよい生活を営むために工夫することを示したものである。」とある。つまり、家庭分野の学習内容全体に共通する視点の一つとして「生活文化の継承・創造」があげられており、家庭分野の学習と伝統文化教育の関連の深さが分かる。取り扱う題材構成によってどの視点を重視するかを定めることが必要ではあるものの、家庭分野の学習全般にわたって、これまで受け継がれてきた生活文化を創造し伝

えることを意識することが必要であると思われる。

以上のような新学習指導要領の内容を踏まえて、家庭分野の学習では以下の二点を意識している。

- ・家庭分野の全ての学習において、生活文化の継承・創造の視点を意識する。
- ・特に衣食住に関わる題材において、これまで継承されてきた生活文化と自分の生活との関連に気付き、よりよい生活について考えようとする態度の育成を目指す。

2. 能力・態度の育成に当たって

(1) 学校全体として育成する資質・能力について

前述の通り、家庭科の学習の目標は、「家族や家庭、衣食住、消費や環境などに係る生活事象を、協力・協働、健康・快適・安全、生活文化の継承・創造、持続可能な社会の構築等の視点で捉え、生涯にわたって、自立し共に生きる生活を創造できるよう、よりよい生活を営むために工夫すること」である。伝統文化教育に取り組むにあたっては、まずは衣食住に係る生活事象を、生活文化の継承・創造の視点で捉えることを基盤にして学習を構成した。また「協力・協働」の視点で生活事象を捉えることも教科としての目標であり、このことを踏まえて、学校全体で育成する資質・能力①～③との家庭科の学習との関連を以下のように捉えて実践を計画している。

① 日本の伝統や文化に関する理解 →日本の生活文化を継承する視点で学習内容を捉える。

② 伝統文化への理解に基づいた多様な文化を尊重する態度

→ 協力・協働の視点で学習内容を捉える。

③ 文化の伝承・創造への主体性など →日本の生活文化を継承・創造する視点で学習内容を捉える。

一年生5月に行った食事の役割に関する学習（実践事例 p 104）では、6つの食事の役割についての理解をした後、日本での食事のマナーについて生徒自身の生活を踏まえて考えた。学習のまとめの部分では、それぞれの生徒が、受け継がれてきた文化を踏まえて、自分自身の生活をどのように工夫したらよいのか、ということ考えた。①日本の伝統や文化に関する理解を踏まえて、③文化の伝承・創造への主体性などの育成をねらった授業である。

一年生10月に行った衣生活に関する学習（実践事例 p 105）では、和服の着用を取り入れ、生徒一人一人が生活の中で、どのように衣服を選択するのかについて考える学習とした。先述の実践同様に、「①日本の伝統や文化に関する理解」を踏まえて、「③文化の伝承・創造への主体性」の育成をねらった。衣服のはたらき（社会生活上のはたらき・保健衛生上のはたらき・生活活動上のはたらき）を踏まえて、日常の生活の中で、和服を着用する機会が少ないのはなぜかについて考えを持った。衣服の構成や、和服の着用について理解を深め、これからの生活で、和服をどのように活用すればよいのか、各自が考えを深められる題材を設定した。着用する前には、和服について「めんどくさい」「動きにくい」「着ていく場所がない」などの意見が多く見られたが、実際に自分の手で着用をすることで、「意外と簡単に着られた」「リラックスできる」「花火大会に着ていきたい」など、積極的に和服の着用の場面を考える姿が見られた。このよう生徒の様子より、「③文化の伝承・創造への主体性」が育まれたものと考えている。

これらの実践のように、生活の中にある日本の伝統的な文化に関する理解を深め、自分自身の生活にどのように取り入れたり、継承していったりするのかについて考えることは、家庭科の学習において、取り入れやすい学習の流れと言える。

(2) 関連・連携を図った教科等について

家庭科の学習は一人一人の生徒の生活を中心としたものであり、他教科等の学習と生徒の生活とを結びつけることができることが、教科の特性であると考えている。E S D 研究の実践を生かして、学校での学習を生活で生かすために、より多くの教科等をつなぐ役割を担いたいと考えている。

前述の実践（実践事例 p 90）では、社会・英語の学習と関連を図りたいと考えた。社会の地理分野の学習では、地域ごとの食文化について学習をしている。今回の実践では、家庭科では、特に日本の食文化に関する学習を重点的に行い、異文化に関する理解は、社会の学習で習得されることを期待した。昨年度の同様の授業では、異文化との比較に関する内容も含めて学習を行ったが、今年度は、技術・家庭科（家庭分野）で重点的に扱う内容により重点を置いた実践とした。このように、他教科等と連携することで、技術・家庭科（家庭分野）で扱うべき内容の精選をすることができ、さらなる連携をすすめることで、学習計画の改善につなげることができると考えている。

3. 成果と課題

今年度の実践について、先述の「1. 伝統文化教育を進めるに当たって」の「(1) 本校の研究との関連」で挙げた2つの目指すところに沿って、今年度の実践を振り返る。

① 教科等の連携を取り持つ学習となることを目指す。

各教科等が伝統文化に関わって計画する実践に関して、その都度、家庭分野の授業での連携の可能性を考えた。昨年度の実践と同様に、英語や社会などの教科とは連携した授業を構築することができた。また、それ以外にも家庭分野の授業について検討をする時には、常に他教科等との関連がないか、連携の可能性はないか等、常に意識をして題材を計画することができた。これまでの課題として、意識をしてきていた複数の教科等を結びつける要となることに関しては、今年度も、複数の教科が連携して一つの題材の学習に当たる教材の開発を試みた。実践事例（p 133）は、三年生の国語と理科、家庭分野が連携して昨年度、開発した題材である。「日本人の暮らしと自然の関り」をテーマとして学習を構築した。昨年度に続き、家庭分野では、これまでの住生活の学習の中の伝統的な日本の住居に関する学習に関して、国語・理科と連携して取り組むことで、生徒の興味・関心が高まる結果が得られた。

他教科と連携することで、教科の学習に関する興味・関心が高まったり、理解が深まったりしたと思われる例。

社会で地域ごとの食文化のつくりかを知り、家庭での食材とつくりかを知ることができた。これによって、食文化のつくりかを知ることができた。これによって、食文化のつくりかを知ることができた。

「食文化のつくりか」という事実だけでなく「なぜ」を知ることができたので、学習がより深くなった。

科目がつながることで、互いの理由・原因がわかるようになった。(例) 家庭の保存食品と理科の食文化と社会の文化。

社会や理科で習ったことが、この保存食の家庭で使われている。これによって、理解が深まった。これによって、理解が深まった。

② 教科等で学んだことと生徒の生活とを結ぶ役割を担う。

授業で伝統文化を扱うに当たって、各学習の導入部分では常に一人一人の生徒の経験や生活を踏まえることを大切にしている。それぞれの生徒は、各自が異なった生活文化を持っているが、その中に潜んでいる日本の伝統文化に改めて目を向けることから始め、教科の学習を経た後にその知識や技能を生活の中で活用できる仕組みを意識して学習計画を行っている。昨年度は、各生徒の生活の中の伝統文化に目を向けることに関しては、多くの生徒が達成できていた。このことは、「学校全体で育成する資質・能力の①日本の伝統や文化に関する理解」の育成につながっている。一方、将来の生活も視野に入れ、どのように伝統文化と関わっていくかについてや、伝統文化を継承・発展させていく担い手として、どのように生活を創造するのか、といったことについて考えることが課題として残った。今年度は、この点について、特に意識をして題材の開発に当たった。「学校全体で育成する資質・能力③文化の伝承・創造への主体性など」の育成を特にねらって、学習を構成した。文化を継承していく主体性が育まれた様子が生徒アンケートの記述などから読み取ることができた。

学校全体で育成する資質・能力③文化の伝承・創造への主体性などの変容が見られた記述の例

昔から受けつがれた調理方法などを知り、今の技術で保存料や甘味料、香料を使わずに長持ちしたりおいしくたりする食品を生み出し、今まで残っているという文化がずっと残るようになりました。	伝統に関しては関心があるようになった。伝統を残していきたいと思うようになった。色々な人に伝統文化の良さや、加賀野菜（とくに五郎島金時!!）への愛も語った。 家族とよく伝統についての話をするようになった。 →毎日の料理によく活かすようになった。 日本の伝統文化って良いなと1人1人考えるようになった。伝統文化を見つけるのが得意になった。
伝統文化は昔から形がいろいろ変りながらも、原形をたもていよと思った。 醤油→醤油ソフワリ〜とか	保存食に興味を持った。 昔の人たちのことは、今の私と全然違うためそこから学ぶことも多く、今までの生活もよりよくすることができると思うようになった。 （乾燥させたり）してみたいけれど、できていない。

今年度は、より多くの教科と連携した学習の実践を持つことができた。資質・能力の育成をねらって、年間指導計画を改善し続けることや、他教科等との効果的な連携を検討することは、伝統文化教育を中心とするか否かに関わらず重要なことである。家庭科の学習は、学校での学びと生徒個人の生活とを結びつなげるものものであることを生かして、よりよい学習・授業の開発に当たりたい。

実践記録

家庭 1 年

授業者 橋本 正恵		授業日 5月 10日(木)
授業クラス	1年 1～4組	関係・連携の考えられる教科等 社会・英語
授業内容 ○食事の役割に関する学習の発展的な学習内容です ○日本の食事作法について知るとともに、今後自分がどのようにその文化を伝承・創造していくのかを考えます。		
教科等で身に付けたい力（本時について） 知識：食事が果たす役割について理解する。 関心：毎日の食生活に関心を持つ。		育成したい資質・能力 ①日本の伝統や文化に関する理解 ③文化の伝承・創造への主体性など
授業のポイント・流れ 題材計画（全8時間） 1次 1：食事の役割（6つの役割） 2：食事の役割（食事の作法） （本時） 3：食事点検 2次 1：食品に含まれる栄養素 2：6つの基礎食品群 3：食品群別摂取量のめやす 4：食品の概量 5：一日分の献立作成 前時の学習 ・宇宙飛行士の若田光一さんが宇宙食について紹介した動画を視聴し、食事は栄養摂取のためだけではないことを確認する。他国のクルーと会話を楽しんだり、互いの国の食事を紹介したりしている場面など。 本時の流れ 1）6つの食事の役割について確認する。 2）食事のイラスト「孤食」と「共食」を提示し、それぞれの良さ・理由について考える。1孤食にもそれなりの理由があることをおさえるのがミソです。 3）普段の生活にある「日本の食事作法」について考える。 4）「和食の配膳の仕方」について確認をする。 近年は特に、必ずしも守られていない場面があることを知る。1ここポイントです！！ 5）これからの生活について考える。 <u>自分の生活と照らし合わせて、どのように文化を継承したり、形を変えたりしていくのかを考える。</u>		

実践事例

家庭 1 年

授業者 橋本 正恵		授業日 11月 8日（木） 1限～ 4限	
授業クラス	1年 1～4組	関係・連携の考えられる教科等 体育・音楽	
授業内容			
○不要な衣服を利用して、裂き織の布を製作する。			
○「こきりこ」の踊りに活用できる作品を考える。			
教科等で身に付けたい力（本時について）		育成したい資質・能力	
知識：布の組織（平織・綾織・編物・不織布）について理解する。		①日本の伝統や文化に関する理解	
関心：資源や環境に配慮した製作について、関心を持つ。		③文化の伝承・創造への主体性など	
授業のポイント・流れ			
題材計画 （全8時間 本時2時間目） <衣服の選択と手入れ> 1. 繊維の観察 2. 糸・布の観察 3～4. 本時 裂き織で、織りにトライ 3. 布や衣服の文化 4. 作品の活用 5. 繊維・布の性質 6. 衣服と環境のつながり 7. 衣服と社会のつながり		1 織物と編物の組織について、確認する。 1 1：持ち寄った布（不要な衣服等）で、織りにトライすることを確認する。 2：体育の授業の「こきりこ」の小物として、活用するための製作の計画を立てる。 3：厚紙とタコ糸を使い、織物を作る方法を理解する。 「南部裂き織（青森）」に関する動画をタブレットで視聴。 4：持ち寄った布を裂いて、糸玉を作る。 5：「こきりこ節」や「踊り」について、語らいながら、イメージを広げつつ、作業を行う。	
		・日本では、布をはじめとした「もの」を大切にしてきた「生活の工夫」について、理解を深める。 ・自分たちの生活にどのように取り入れられるかを考え、実践につなげる。	

実践事例

家庭 2 年

授業者 橋本 正恵		授業日 1月 10日（木）
授業クラス,	2年 1～4組	関係・連携の考えられる教科等 社会・数学
授業内容		
○日本の伝統的な行事食であるお雑煮について理解する。 ○自分たちがお雑煮（和食）をどのように継承していくのかについて考える。		
教科等で身に付けたい力（本時について）		育成したい資質・能力
知識：様々な行事食について、地域や家庭によって、工夫があることを知る。 工夫：行事食について、自分の生活にどのように取り入れていくのかを考える。		①日本の伝統や文化に関する理解 ③文化の伝承・創造への主体性など
授業のポイント・流れ		
題材計画（冬休み課題＋1時間） <わが家のお雑煮> 1：「わが家のお雑煮」レポート 正月の「お雑煮」について調べてレポートを作成する。 ・よく食べるもの ・由来 ・食べない理由 など 2：データにまとめよう 各自が調べたお雑煮について、全体でデータをまとめる ・餅の形・加熱方法・具材 今後、どのような雑煮を継承していきたいか。または、していきたくないか。		5人グループ×8 で活動。 1：作成した「わが家のお雑煮レポート」をもとに、相違点を話し合う。 2：全体でまとめたい項目をあげる。 餅の形・加熱方法・だしの材料・具材・調味料・由来 など 3：違いはどのようなことから生じるのか考える。 社会の学習（地域の特色）が関連しているよ！ 4：今後、自分自身はどのようにお雑煮を継承していきたいのか、またはしていかないのかについて、考えを持ち、共有する。

実践事例

家庭 3 年

授業者 橋本 正恵		授業日 10月 29日(月)
授業クラス	3年 1～4組	関係・連携の考えられる教科等 国語・理科
授業内容 ○住まいの基本的な機能を理解する。 ○和の住まいについて、理解する。		
教科等で身に付けたい力（本時について） 知識：住まいの働きには、精神的な働きと機能的な働きがあることを知る。 関心：自分や家族の住空間と生活行為とのかわりについて関心をもって学習活動に取り組んでいる。		育成したい資質・能力 ①日本の伝統や文化に関する理解 ③文化の伝承・創造への主体性など （次時で中心により組む）
授業のポイント・流れ		
題材計画（全2時間） <住まいの工夫> 1：和の住まいを知ろう（本時） 和の住まいの長所・短所について理解する。 （機能的な面・精神的な面） 2：季節の設えを取り入れよう 季節や行事の設えの取り入れ方を考える。		5人グループ×8で活動。 1 これまでの学習「和食」「和服」を振り返る。 思い浮かぶキーワードを10ずつあげる。1共有 2 「和の住まい」と聞いて、思い浮かぶワード10をあげる。例：畳・障子・縁側・床の間・寛ぐ・正座1共有 3 和の住まい（和室）の例を提示する。 4 和の住まい（和室）の長所・短所を考える。 5 「和の趣」・「和の設え」には、「四季」や「自然」との関りが欠かせないことを知る・ 7 身の回りにある「季節（行事）の設え」を探してくる。 日本人が行ってきた住まいの工夫には、自然や四季との関りが重要であったことを理解する。 理科・国語の学習とのつながり 自分の生活をどのように工夫するのかを考える。
		次時へ 

英 語 科

上野 郁子

渡村のりこ

研究協力者 滝沢 雄一（金沢大学）

1. 伝統文化教育を進めるに当たって

生徒たちがこれから生きていく社会においては、情報通信や交通等の手段の発達により、様々な文化を背景とした諸外国の人々と共存することがこれまで以上に求められる。そのため、お互いの文化への理解が不可欠となるが、単に異文化について個別の知識を身に付けることにとどまるのではなく、日常文化やその根底にある価値観など直接目で見ることができない側面についても理解を深め、相互に尊重していく態度が必要となる。文化の背景となる価値観を共感的に理解することは、異文化に属する人と、実際にコミュニケーションをとることを通して可能になると思われる。一方、相互に理解を深めるためには、生徒が自文化や価値観などについても自ら説明できる力も求められる。そして、それらの力は、異文化に触れ、異なる価値観などとの共通点や相違点などを理解する過程で、より客観的に自文化を捉え直し、理解を深めながら育成されるものと考えられる。

新学習指導要領の外国語の目標は、外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせることの重要性に言及している。外国語によるコミュニケーションにおける見方とは、「外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え」ることであり、「外国語で他者とコミュニケーションを行うには、社会や世界との関わりの中で事象を捉えたり、外国語やその背景にある文化を理解するなどして相手に十分配慮したりすることが重要である」。また、学習指導要領の「教材選定の観点」には、「英語の学習を通して、我が国の文化と、英語の背景にある文化との共通点や相違点を知るようになるとともに、そうしたことに関心を持ち、理解を深めようとする態度を育成することが大切である」、「複数の文化に触れることが、我が国の伝統文化についての理解を深め、文化の多様性に対してより寛容になることに資するとともに、英語によるコミュニケーションの中で我が国の文化を発信することにもつながっていくことが考えられる」と記されている。これらは先述の考えと軌を一にするものである。

2. 能力・態度の育成に当たって

（1）学校全体として育成する資質・能力について

学校全体として育成する資質・能力として、①日本の伝統や文化に関する理解、②伝統文化への理解に基づいた多様な文化を尊重する態度、③文化の伝承・創造への主体性など、の3つが設定されている。これらの資質・能力の育成は、前節で述べた考え方に基づく外国語科として求められる資質・能力の育成を目指した指導によって可能となると考えられる。そこで、伝統文化教育を進めるに当たり、英語科においては、（1）異文化を背景とする他者を意識しながらコミュニケーションを取ること、（2）扱う題材として異文化や自文化を取りあげ様々な文化に触れること、さらに、（3）自分の思いや考え、文化について発信することを重視する。

新学習指導要領には、外国語科として求められている資質・能力は、言語活動を通して育成すると明示されている。そこで、指導においては、言語活動の設定が極めて重要になる。そこで、次の点を考慮した言語活動を行うこととする。

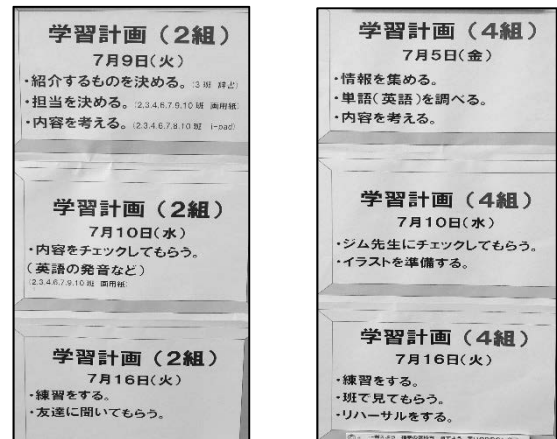
①目的、場面・状況、相手の具体的な設定

言語活動とは「実際に英語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合うなど」である。すなわち、英語によるコミュニケーションを行うことと言える。実際にコミュニケーションが行われる場合には、常に、コミュニケーションを行う目的があり、具体的な相手が存在し、場面・状況が伴う。そして、これらに応じて、適切な内容や言語材料を選択する必要がある。目的、場面・状況、相手の具体的な言語活動を設定することにより、生徒が内容、言語材料を自ら考え、取捨選択しながらコミュニケーションができる機会を与えることが可能になる。特に異文化を背景とした他者とのコミュニケーションを促進する観点から、相手意識をより高めることができるように考慮する。

②主体的に学習に取り組む態度を育成するための工夫

まず、生徒が「知りたい」「伝えたい」と思えるような題材や言語活動の設定を目指す。また、言語活動のゴールに向けて学習計画を生徒と一緒に立てることにより、学習の見通しを持つことができるようにする。

(右写真は1年生の例)



③技能の統合(表現と理解の組み合わせ)

「話す活動(即興)」→「聞く・読む活動」→「話す活動」→「書く活動」の段階を踏んだ指導過程を組む。最初に伝えたい内容をマインドマップに書き、それを基に即興で話す。即興で話すことによって、言えない表現や内容として不足している点などに気づくことが期待できる。何度か即興で話した後、聞く活動あるいは読む活動を通して、内容面、言語面で学ぶ機会を設け、さらに、学んだことを活かして話す活動を行う。誤りに気づいたり、新たな英語表現を学ぶなどの言語面だけでなく、最初に伝えた内容を目的、場面・状況、相手などに応じて広げたり、深めたりできるような視点を生徒に与えられるようにする。表面的な事実の理解にとどまらず、その背後にある価値観や考え方などに迫ることができるよう、題材や発問などの工夫を行う。活動の最後は話したことをふり振り返りながら、書く活動を行う。話したときの英語の誤りなどに自ら気づき訂正し、友達同士でお互い読み合う機会となる。

(2) 関連・連携を図った教科等について

本校での伝統文化教育の研究を進めるに当たり、「題材」や「内容」でつながりを持ちながら、各教科の連携を図ってきた。今年度、英語科では以下の新学習指導要領の内容を受けて、「題材」や「内容」のつながりと同時に、「資質・能力」のつながりでも各教科と関連・連携を図っていくこととした。

指導計画の作成に当たっては、小学校や高等学校における指導との接続に留意しながら、次の事項に配慮するものとする。

- (オ) 言語活動で扱う題材は、生徒の興味・関心にあったものとし、国語科や理科、音楽科など、他の教科等で学習したことを活用したり、学校行事で扱う内容と関連づけたりするなどの工夫をすること。
- ・題材には、他教科等でこれまで学んできた、あるいは現在学んでいることを積極的に活用するなど、カリキュラム・マネジメントの観点から、教科間で学びのつながりや広がりがあるものとなるように工夫が求められている。
- ・国語科との関連については、言語能力の向上の観点からのカリキュラム・マネジメントを実現できるよう、(中略)国語科での言語活動を想起させ、外国語でのスピーチや意見交換などの活動に生かすなど、同じ種類の言語活動を通して指導することも考えられる。

新学習指導要領「指導計画の作成と内容の取扱い(3) 指導計画の作成上の配慮事項」

3. 成果と課題

(1) 第1学年の成果と課題

①Program 5 「国際フードフェスティバル」

本単元は「国際フードフェスティバル」を題材としており、韓国料理やインド料理など諸外国の食べ物について知識を得たり、日本の食文化と比較したりすることができる。本単元の学習を通して、諸外国の食文化についての理解を深めると同時に、我が国の伝統的な食事に関心を持ち、それらを英語で発信できるようになってほしいと願い、本単元のゴールを「日本の食事や料理を留学生に紹介しよう」と設定した。

今回の学習では、「相手意識を明確にする」ことを特に意識して活動を行った。まず1時間目にマインドマップに紹介したい日本の食事や料理に関するキーワードを書かせ、そのマインドマップを基に、即興で話をさせた。生徒たちが選んだ食事や料理は、自分が知っているものや紹介しやすいものが多く、この段階では相手を意識した内容にはなっていなかった。

そこで、2時間目に紹介する留学生の写真を見せた。その結果、相手意識をより明確にし、内容を変更して伝える生徒が見られた。例えば、お好み焼きを紹介しようとした生徒は「豚肉を食べない国（宗教）があるのではないかと考え、その場合は、違う種類のもの（キムチやシーフードのお好み焼き）を伝えようとした。また、食文化に気づき、食べ方の違いがあるのではと考えた生徒は、「食べ方も伝えた方がいいのではないかとマインドマップに食べ方に関するキーワードを書き足していた生徒もいた。

3時間目にはモデルとして、日本に長く滞在しているALTのお勧めの日本の食事や料理について聞かせた。ALTの話を聞き、内容面だけでなく、言語面についても参考としている生徒が見られた。また、再考したマインドマップを基に、何度かペアを替えて伝え合う活動を行うことによって、さらに自分にはなかった視点や表現に気づく機会になった。

留学生との交流授業では、日本の食事や料理を紹介するだけでなく、留学生の国の料理や食事を英語で説明してもらった。その時の生徒の感想を以下に示す。日本のものと比較することで、自国、他国の（食）文化の理解を深めることができた。また、相手や目的を明確にすることで、自分の伝えたい内容だけでなく、相手の文化や生活に配慮した内容を伝えることを意識した活動ができた。

- ・ マケドニアでは豆を焼いて食べたり、鯉を食べるたりすると聞いてとてもびっくりした。
- ・ 日本のことをより深く知ることができたと思いました。会話と字をそのまま読むのとは全く違うことが分かりました。
- ・ 自分の調べた日本食に興味を持ってもらうことができて良かったです。自分の知らない国の文化や食べ物を知ることができて良かったです。
- ・ 「どうやったら興味を持ってもらえるかな」「どうやったら伝わるかな」と考えて準備・練習をした。
- ・ 紹介する食べ物を知っている人、知らない人で伝える内容を変える力が必要だと感じました。



②Program 8 「Origami」

本単元では日本の伝統的な遊びであり、誰もが一度は体験したことのある「Origami」が題材となっている。「Origami」はすでに世界でも知られており、この技術を産業的に応用しようという取り組みが国内外で進行中でもある。本単元の学習を通して、折り紙の発想、技法は宇宙開発、ファッション、人工血管まで、幅広く活用されつつあることを理解してほしい。また、日本の伝統的な遊びにある、伝統工芸技術に関心を持ち、日本の伝統や文化に関する理解を深めてほしいと願い、本単元のゴールを「日本の伝統的な遊びやおもちゃを留学生に紹介しよう」と設定した。

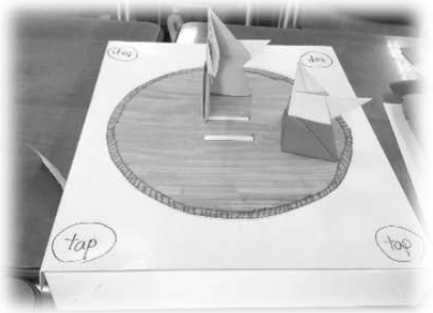
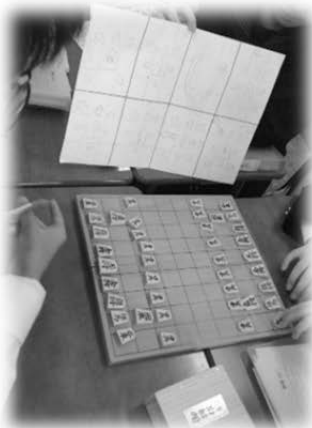
今回の学習では「他教科等との連携」を意識し、主体的に学習に取り組めるよう、学習計画の工夫を行った。生徒たちは社会科で平安時代の貴族の遊び（すごろくやけん玉）を学習しており、そこで学んだ知識や情報を基に、遊び方だけでなく、その物の歴史や背景などを伝える生徒の姿が見られた。また、「日本の時代の特徴を踏まえて、説明することができた。」「その文化がいつごろにできたかなどを勉強することができて、知識がより深まった。」という生徒の感想も見られた。

本単元の学習計画を立てる際に、前単元でやってみてよかったことや、足りなかったことなどを振り返る時間を設定したところ、より細かい学習計画を立てることができていた。例えば、前単元では、生徒から「友だちに聞いてもらう」活動が上らず、教師側からその活動を提案した。生徒同士で読み合ったり、話し合ったりすることによって、新たな情報や表現に気づくことができた経験を生かし、本単元の学習計画には「友だちに聞いてもらう」という活動を取り入れていた。

活動が行われた授業では、以下のような生徒の感想が見られた。生徒の感想を以下に示す

- 私にはなかった表現の方法で友達が説明していたので、真似してみようと思いました。私の知らなかった、思いつかなかった表現をどんどん身につけていきたいです。
- 今日は友達と紹介し合って、「なるほど」と思ったところや「いいな」と思ったところを自分のところに加えられ、よりよくできたので良かったです。
- たくさんの友達に聞いてもらって、アドバイスがもらえたからよかった。紹介する人が同じ人がいたけど、表現の仕方違った。
- みんなで紹介し合っているときに、自分では思いつかなかったことがわかったので、人から情報を得るということは大切だと思った。
- いろんな人の話を聞いて、どう表現すればわからなかった文も作ることができた。

留学生との交流授業では、前回の日本の食事や料理を紹介する活動とは違い、実際にやって見せたり、一緒に活動したりすることができたので、用意された原稿に頼ることなく、本物のコミュニケーションの中で自然と英語を使う場面が生まれた。生徒たちはその活動を通して、うまく自分の思いが伝えられない悔しさや、相手の言っていることが聞き取れないもどかしさなどを感じ、今まで学習してきたことの意義を改めて知り、これからの学習に対しての意欲が高まったと感じられた。



③Program 9 「A New Year's Visit」

本単元では年始のあいさつと正月にお雑煮を食べるという日本の文化を扱いながら、日本人を妻とするジムとその子供たちを登場させることによって、日本文化を客観的に捉えることができる題材である。日本の伝統的な年末年始の食事や遊び、行事などを現代のものと比較することで、日本の文化の価値や意義について考えるきっかけを与え、自国の文化を尊重する態度を育てたいと考え、本単元のゴールを「日本の伝統的な年末年始を留学生に紹介しよう」と設定した。また、諸外国の年末年始の過ごし方を知る機会を設け、他国の多様な文化背景を尊重する態度も育成したいと考えた。

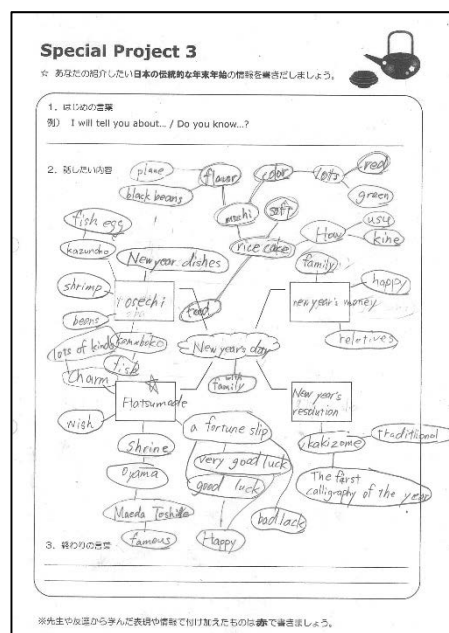
今回の学習では、「技能の統合」を特に意識して活動を行った。まず、単元の始めに、一度日本の伝統的な年末年始を英語で紹介させた。その中で、生徒たちはうまく伝えられないことに気づき、これからの学習で自分に必要な情報や英語表現などを学ぶ意欲を高められるようにした。

生徒たちは単元末に行う「日本の伝統的な年末年始を留学生に紹介しよう」という明確な目標のもと、**Program 9**の学習の過程で出てくる年末年始に関するキーワードに意識を高めていた。そのため、今回はマインドマップの作成の際に、以前より多くのキーワードを書くことができていた生徒が多く見られた。マインドマップを基にした即興対話(**Speaking**)の後、留学生からビデオメッセージを見ること(**Listening**)で、相手が何に興味があり、何を知りたがっているのかなど相手意識を持たせる機会とした。ビデオを見た後に加筆したマインドマップを基に再度ペアを替えて即興で対話を行った。さらに、留学生から諸外国の年末年始について書かれた手紙を読むことで(**Reading**)新たな英語表現を学べるようにした。最後に、マインドマップを基に、話した。内容の構成を再度見直し、情報を取捨選択しながら、相手に伝わるように工夫をしてまとめ、書く活動を行った。

また、生徒たちが書いたものを廊下に掲示することで、同じものを紹介していても違う表現を使っていたり、違う視点で紹介していることに気づいたりして、新たな視点を当てるよう工夫した。

以下に生徒の感想を示す。

- 他の国の人と過ごし方が全然違っていて、「そうなんだ～」と思うことがたくさんありました。友達のともし全然違うことが書いてあって、面白かったです。
- 外国でお正月にすることの紹介文と、友達との会話を通して、マインドマップのキーワードを増やすことができた。
- 友だちの説明を聞いて、私にはなかった表現の仕方がたくさんあったので、参考にしたいと思います。私の知らない表現がまだまだたくさんあるので、もっと知りたいです。
- 今日は金沢大学の人たちの方からの手紙やメッセージを基に、新しく情報を付け加えたりしました。前と比べて英語の文を考えられるようになりました。
- 留学生に日本の年末年始について紹介する文を考えました。なぜ食べるのか？なぜそうするのか？の意味を調べて英語にできたらいいと思いました。



赤で加筆されたマインドマップ

今年度1学年では学校全体として育成する①日本の伝統や文化に関する理解 ②伝統文化への理解に基づいた多様な文化を尊重する態度 ③文化の伝承・創造への主体性などの3つ資質・能力の育成を、留学生に日本の伝統的なものを紹介する言語活動を通して行ってきた。

11月に行ったアンケートでは、「日本の伝統や文化について勉強することは大切である」という項目について、「当てはまる（どちらかという当てはまる）」と答えた生徒は全体の93%であった。その理由を以下のように述べている。

- 他の国の文化を知るうえで、自国の文化は理解しておかないとだめだと思うから。
- 伝統や文化を知ることによって、新しいことができると思うから。
- 昔のことを生かして、今のことに応用できるから。
- 伝統や文化を知ることによって、これからの文化に影響を与えて、新しい文化が生まれるかもしれないから。
- 昔のことを知れば、新しいものにも活用することができるかもしれないから。
- 外国の人の文化を理解するためにも、自国のことは知っておいた方が良くと思う。



図書「英語で日本を紹介しよう」展示

中でも多かったのは「自分たちの代で日本の伝統文化を絶やしてはいけない。」という意見であった。その理由はアンケートでは明確にはならなかったが、③「文化を伝承」していかなければならないという意識は高いと感じられる。

今回の留学生との交流授業（3回）を通して、実際に留学生に伝えることで、自分が日本の伝統文化について知らないことや、それを英語で表現できないことに気づいた生徒が見られた。授業で行った伝統や文化に関するアンケート「日本の伝統や文化についての英語の知識がある」という問いに対し、4月では「当てはまる（どちらかという当てはまる）」と答えた生徒は45%であったが、11月では40%に下がっていた。

また、様々な国からの留学生の英語は、アクセントやイントネーションが普段のCDで聞く英語とは違い、理解できず、何度も聞き返している姿が見られた。留学生との交流授業において、自分が話している英語が正しい発音ではなく、相手に伝わらない経験をする中で、様々な母語を持った人が英語を話していることや、英語を話しているつもりでいたが、正しい発音ではないと相手には伝わらないということを知るよい機会となった。異なる英語に触れる機会を持つことは大切であり、生徒が自分の英語に対して堂々と使っていけるようになるとよいと感じた。



マインドマップを基に即興対話



「日本の年末年始紹介文」掲示



「日本の伝統的な遊び紹介」けん玉

(2) 第3学年の成果と課題

3年生では、伝統文化をテーマにして、即興で相手に自分の考えを伝える力と表現力豊かにプレゼンテーションする力の育成を図ることを目指した。自分が紹介したいことを紹介するだけでなく、生徒一人一人に、紹介したい相手を意識し、相手が知りたいことや相手のニーズに応えることができるプレゼンテーションをさせたいと考え、2つの授業実践を行った

① Program 2 「日本の世界遺産を Jim 先生にプレゼンテーションしよう」

本単元では、日本の生活が長く、日本文化についてもよく知っている ALT の Jim 先生が行きたくなるようなプレゼンテーションをすることを最終ゴールとした。まず生徒たちは、自分が紹介したい日本の世界遺産を1つ選び、話す内容を考えた。その際、完全な文章ではなく、キーワードを見て話すことができるよう、スピーチメモを作成することとした。生徒たちは、自分が選んだ世界遺産について知らないことが多くあるため、社会の教科書や資料集など他教科の教材を見て調べたり、タブレット端末を使用して、必要な情報を収集したりしながら、内容を考えていた。

次に、同じテーマのグループを作り、一人ずつスピーキングメモを基にプレゼンテーションを行った。グループでのプレゼンテーションは生徒たちにとって、個人で考えたり、表現したりしたことがお互いに新たな情報になったり、よりよい表現方法を見つけることができる機会になった。また生徒たちは写真をタブレット端末を使って提示することで、よりわかりやすく、世界遺産の美しさや素晴らしさを伝えることができると実感していた。タブレット端末の使用は、よりよいプレゼンテーションの一助となった。その後、グループで、原稿を1つ作成して、Jim 先生へのプレゼンテーションをすることとした。その活動の途中で、昨年度の3年生が行った同じ内容のプレゼンテーション動画（ジム先生がベストプレゼンテーションに選んだもの）を視聴した。内容だけではなく、表現方法や使っている英語表現を参考にすることができ、良い点を取り入れて、さらに自分たちのプレゼンテーションをよりよいものにしようとしていた。プレゼンテーションで行った授業で、生徒たちは以下のように振り返っていた。

<世界遺産プレゼンテーションの振り返り>

自分達の発表は発音はしっかりと意識できていたが、ジェスチャーをつけていない点について、プレゼンテーションという面では課題が残ったと思う。天草地方の杵杵川シゲンの人々について発表にグループは、何も知らない人でも分かるほど内容が濃く、工夫もありとても良い発表だったと思う。また、小笠原諸島について話すグループは写真が多く使われていて、難い英単語も写真で理解することができた。今回の課題を今後の活動につなげていきたい。

自分たちが音声が聞こえなくて、そのほか感じたこと、つまり英語でプレゼンテーションをしたいと思います。しかし、まだまだ改善できるところがいくつかあります。それは、他のグループの発表からも学ぶことがありました。具体的には、ジェスチャーを使ったり、身近な話題から入ったりすることです。そうすることで、さらに分かりやすく、聞いている人の注意を引くことができました。また、オリジナルテーマも出したいです。

今回、屋久島について発表しましたが、本学から来た他のグループもとても良い発表がありました。特に、笑顔や身振り手振りも使っていて良かったと思います。また、先生に聞いてもらって、どう表現すればいいかを教わることができました。今回、学んだことをしっかりとこれから自分の発表や授業で生かしていきたいです。頑張ります。

質問の意味が分からなかったけど、教員が覚えていなくて大変でした。でも、クイズをしたことにより興味を持ってくれたのではないかなと思う。最初は手をあげてくれなかったけど、3回目で手をあげたと言ったことであげてくれる人がたくさん出てくれたので、数字を画像として入れている班もあり、工夫がたくさん見られた。全体的に伝えようとしている人が多かったのではないかな。私自身も内容が分かるものがたくさんあり、英語がわかりやすかったように感じた。

この実践の課題として、生徒たちは Jim 先生にプレゼンテーションすることはでき、Jim 先生の質問にも答えることができていたが、Jim 先生のニーズに応えることができていなかった点が挙げられる。Jim 先生についての情報（「行ったことがない」「家族で行きたい」「〇〇に興味がある」など）を提示し、相手意識をさらに持たせ、相手のニーズに応えることができるプレゼンテーションをさせる必要があったと感じた。

② My Project 8「金沢大学の留学生に“Kanazawa One Day Tour”をプレゼンテーションしよう」

本単元では、「金沢の伝統文化を紹介しよう」とし、金沢の見所や食文化、伝統文化について考えさせる機会とした。総合的な学習の時間においても、「10 年後の金沢」について、自身のテーマを決めて、提言していることから、それを活かしたり、参考にしたりしながら、自分の思いや考えを発信させたいと考え、本単元のゴールを、金沢大学の留学生に、「Kanazawa One Day Tour」と題した金沢観光プランを、個人でプレゼンテーションすることとした。実践①の反省から、生徒たちには自分の考えや思いを提案するだけでなく、伝えたい相手を意識し、相手のニーズに応えることができるプレゼンテーションをさせたいと考えた。また生徒がペアやグループでの対話や Reading 活動を通して、考えを深めたり、新たな表現を学び、取り入れたりしながら、プレゼンテーションを完成させていけるように、授業を展開していくことも目指し、実践を行った。

<“Kanazawa One Day Tour” プレゼンテーションの振り返り>

このプレゼンテーションで自分のプレゼンテーションは相手のニーズに合ったものか、大変だったか、よい経験になりました。また、金沢の有名なところを知らない人にどうやって魅力を伝えるかを考えた。発表するときは緊張したが、同じグループの人の素晴らしい表現を見て、自分の原稿もよくなった。	初めは伝えたいことをしっかりと並べていたけれど、プレゼンをするにあたって相手の気持ちや考えることはとても大切だと思った。文の中に疑問文をいれ、興味をそそけるようにした。今回、自分の住む町の事を深く理解することができた。そして、もっと深く理解し、外国の文化をもっと理解したいと思う。
自分の国の文化は、世界に発信できる大きな魅力があるから、それを伝える機会になった。なぜ、自分がその場所、名物を紹介したいのかという理由についても明確にできるようになった。自分の文化と他国の文化を比べることは、国境を越えて人々を理解し合うことに役立つと思うので、今回の学習を機に、外国の人と文化について話し合う場面を増やしたい。	「Kanazawa One Day Tour」を金沢大学の留学生に向けて、プレゼンテーションをしてみたら、実際に伝える相手も明確になっているから、留学生のためのプレゼンになる、と思うようになった。プレゼンテーションは自分の成長のためにも必要だが、自分一人のためだけではなく、他者のためでもあるのだと気づいた。プレゼンで納得のあるものにするためには、しっかり相手の目（今回はカメラ）を見て、大きな声で、ゆっくり、はっきりと話すことが大切だと思います。「伝道」のためのプレゼンを今後もしっかりしていきたいです。
初め、金沢の有名な場所を紹介しようと思ったが、金沢の魅力を伝えたいと思い、あまり有名な場所には紹介しなかった。どちらか、どちらかの外国の方が、おもしろいところを伝えることができた。また、自分の住む町で伝えたいところがある。だから、金沢の魅力を伝える機会になり、勉強になりました。金沢の魅力を伝える機会になり、勉強になりました。	普通に金沢の観光地を紹介するだけではつまらないので、何か自分ならではの工夫をしようと思った。そして、留学生の希望を受けて、内容を変更することもあった。伝えたい相手やどういった人かによって、プレゼンを変えるのはすごく大切なことだと感じました。これらプレゼンをするときは、これら大切にしたいと思います。

今回の授業の大きなポイントとしては、留学生のニーズをどこの場面で提示するかであった。授業実践①と同様に、最初は、生徒たちは個人で Tour プランを考え、金沢について自分が紹介したい、知ってほしい場所やものについて、話せるようスピーキングメモを作成した。この時点で、たくさんの生徒が、かなり充実した内容のメモを作ることができており、プレゼンテーションへの意欲はもちろん、3 年生としてつけない英語の力がついてきていることを感じた。

生徒たちは自分が考えたプランをグループでプレゼンテーションを行って、新たに表現の仕方や英語表現を学んだり、さらにプランをよりよくしたりするが、そこで 6 人の留学生からきたメール文を読んで、留学生のニーズを知ることとなる。自分の考えたプランを相手に合わせて変えられるか、それ

とも自分が考えたプランに合った相手を選ぶかに分かれた。結果として、生徒たちは留学生のニーズに応えようと意識しながら、臨機応変に対応して、留学生に観てもらうための「Kanazawa One Day Tour」のプレゼンテーション動画を全員が撮影することができた。

課題としては、相手のニーズをどのタイミングで生徒たちに知らせるかをもっと綿密に考え、授業計画に入れなければならないという点が挙げられる。「もっと早く知りたかった」という相手のことを思う生徒の声を大切にして、「どこの国の留学生なのか」「何歳くらいなのか」「金沢についてどのくらい知っているのか」などの基本情報は最初に提示するなど、考えていく必要がある。

生徒たちは3年生になり、英語の表現活動を通して、楽しさだけではなく、伝えられないもどかしさや悔しさ、難しさなどを日々感じながら、一生懸命に英語学習に取り組んできた。4月当初の授業では、間違えることを恐れ、発表や発言をすることを躊躇する生徒が多く見られたが、帯活動で行っている即興対話活動（Today's Free Talk, Ping Pong Discussion）のペアでのやり取りや、ペアやグループでの表現活動に取り組むことで、相手を意識し、相手に合わせた対話の仕方などを身に付け、多くの生徒が話す力・やり取りする力が付いていることを実感できるようになった。またスキットやプレゼンテーションなど、自分たちで創作して、発表をする活動を楽しみしており、3年間の英語学習の中で最も好きな活動に挙げている生徒が多い。「聞いている人に共感してもらいたい」「前回の発表よりも表現や内容をよくしたい」と、質の向上にも努めており、意欲を持って取り組む姿勢は、英語学習意欲の向上につながっていると考えられる。以下は4月と12月に行ったアンケート結果である。

(A:あてはまる B:どちらかというにあてはまる C:どちらかというにあてはまらない D:あてはまらない)

- | | | | | | |
|----|---|--------|--------|--------|-------|
| 1. | 英語の授業に意欲的に参加している。 | | | | |
| | < 4月時点 > | A: 29% | B: 54% | C: 14% | D: 3% |
| | < 12月時点 > | A: 56% | B: 39% | C: 3% | D: 2% |
| 2. | 即興対話活動や Talk & Talk など、英語で対話する力が身に付いた。 | | | | |
| | < 4月時点 > | A: 31% | B: 53% | C: 14% | D: 2% |
| | < 12月時点 > | A: 54% | B: 37% | C: 8% | D: 1% |
| 3. | 自分の気持ちや考えを、英語でうまく人に伝えることができる。 | | | | |
| | < 4月時点 > | A: 11% | B: 61% | C: 23% | D: 5% |
| | < 12月時点 > | A: 37% | B: 56% | C: 12% | D: 4% |
| 4. | 理由をはっきりと明確しながら、自分の考えを英語で書いたり話したりすることができる。 | | | | |
| | < 4月時点 > | A: 14% | B: 55% | C: 27% | D: 4% |
| | < 12月時点 > | A: 24% | B: 64% | C: 9% | D: 3% |
| 5. | 与えられたテーマについて、自分の考えを入れて、英語でプレゼンテーションができる。 | | | | |
| | < 4月時点 > | A: 16% | B: 51% | C: 25% | D: 8% |
| | < 12月時点 > | A: 36% | B: 50% | C: 13% | D: 1% |
| 6. | 相手を意識し、相手のニーズに対応しながら、英語でプレゼンテーションができる。 | | | | |
| | < 12月時点 > | A: 33% | B: 52% | C: 13% | D: 2% |
| 7. | 英語の授業を通して、相手を意識して発表する力が身に付いた。 | | | | |
| | < 4月時点 > | A: 34% | B: 53% | C: 12% | D: 1% |
| | < 12月時点 > | A: 52% | B: 46% | C: 2% | D: 0% |

上記の結果以外にも、「高校生になったら、英語を使ってどんなことがしてみたいか」という質問には、多くの生徒が「日本や金沢の魅力を伝える」「他国の伝統文化・習慣を知りたい。」「留学生と交流・意見交換したい。」「留学やホームステイをして、英語を使っていきたい。」「同世代の外国人とディスカッションがしたい。」と答えている。今年度は、ディベートやディスカッションで意見を戦わせる活動をさせる機会が少なかった。実践的な場面を設定し、議論する力の育成を図り、生徒たちが自信を持って高校英語に進んで行けるようにすることを今後の課題とし、引き続き行っていきたい。

また、生徒が英語学習への意欲を持ち続けることが、英語学習を続けていくモチベーションになり、生徒のコミュニケーション能力や英語力の向上につながると考え、日々の一つ一つの授業、言語活動を大切に実践していきたいと思う。

実践事例

英語

学年	関係・連携の考えられる教科等
1 年	社会・家庭
授業内容 ・おすすめの日本食（作り方，おすすめのお店）を留学生に紹介する。 ・諸外国の食事や料理を知る。	
教科等で身に付けたい力（本時について）	育成したい資質・能力
【外国語表現の能力】 ・聞き手が理解しやすいように，工夫して日本食を英語で伝えることができる。	①日本の伝統や文化に関する理解 ③文化の伝承・創造への主体性など
授業のポイント・流れ 1. Warm Up（7分） ・ B I N G O で語句を学ぶ。 ・ ペアで1つのトピックについて60秒の即興対話活動を行う。 2. 本時の課題を知る（3分） ・ 金沢大学の留学生の写真を見て，彼らが「日本食（日本料理）について知りたい」と言っていることを知る。 3. 紹介したい日本食（日本料理）を出す（5分） ・ 個人で留学生に紹介したい日本食（日本料理）を出し合う。 ・ ペアで情報交換をした後，クラス全体で何を紹介したいかアイディアを出す。 4. 紹介したい日本食（日本料理）の情報を書き出す（10分） ・ 個人で紹介したい日本食（日本料理）の情報をマインドマップに書く。 ・ ペアで出てきたキーワードを基に，即興で日本食（日本料理）を紹介する。 ・ ペアを変えながら紹介し合い，付け足しや修正などを行う。 5. 教師のモデル文を聞く（5分） ・ 「たい焼き」についての紹介を聞いて，伝える内容や使える表現の参考にする。 ・ マインドマップに付け足しをしながら，内容を再構築する。 6. 再考したメモを見ながら日本食（日本料理）を紹介する（10分） ・ 再考したマインドマップを基に，4人グループで紹介を聞き合う。 ・ グループからの意見や質問を参考に，相手が知りたい情報を入れたり，表現を改善したりするなどの工夫をして，よりよい内容になるように考える。 7. 学習計画を立てる（10分） ・ 実際に留学生が来校し，彼らに日本食（日本料理）を紹介することを知り，それまでに必要な授業計画を立てる。	



実践事例

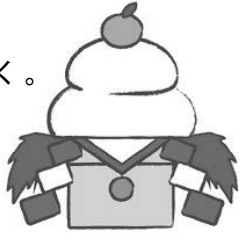
英語

学年 1 年	関係・連携の考えられる教科等 社会・家庭
授業内容 ・ 伝統的な日本の遊びやおもちゃを留学生に紹介する。 ・ 諸外国の伝統的な遊びやおもちゃを知る。	
教科等で身に付けたい力（本時について） 【外国語表現の能力】 ・ 聞き手が理解しやすいように、工夫して日本の遊びやおもちゃを英語で伝えることができる。	育成したい資質・能力 ①日本の伝統や文化に関する理解 ③文化の伝承・創造への主体性など
授業のポイント・流れ 1. Warm Up（8分） ・ B I N G Oで語句を学ぶ。 ・ ペアで1つのトピックについて60秒の即興対話活動を行う。 2. 前時の学習内容を振り返る（5分） ・ Program8で日本の伝統的な遊びである折り紙について学習したことを振り返る。 ・ 折り紙について、知っていることや遊び方などを英語で説明する。 3. 日本の遊びやおもちゃを紹介する〈即興対話①〉（5分） ・ 他の日本の伝統的な遊びやおもちゃをできるだけたくさん挙げる。 例）コマ、お手玉、あやとり、けん玉、おはじき、カルタ、百人一首など ・ 出てきたものからそれぞれ一つ選び、ペアで即興対話をする。 4. 留学生に紹介したい遊びやおもちゃの情報を書き出す（10分） ・ 相手意識を持たせるため、前回来校した留学生の写真を見せ、彼らが日本の伝統的な遊びやおもちゃを知りたいことを伝える。 ・ 再度、何を紹介したいかを選び、情報をマインドマップに書く。 5. 日本の遊びやおもちゃを紹介する〈即興対話②〉（5分） ・ マインドマップを基に、即興で遊びやおもちゃを紹介する。 ・ 即興対話を受けて、付け足しや修正などを行う。 6. 学習計画を立てる（10分） ・ 即興対話を受けて、何が足りないか、どんな情報が必要か考える。 ・ 留学生に日本の遊びやおもちゃを紹介するために必要な学習計画を立てる。 7. 本時のまとめ（2分） ・ 本時で立てた学習計画を基に、次時の内容を確認する。	
次時 8. 教師のモデル文を聞く（5分） ・ 教師の「凧あげ」についての紹介を聞いて、伝える内容や使える表現の参考にする ・ マインドマップに付け足しをしながら、内容を再構築する。 9. 再考したメモを見ながら遊びやおもちゃを紹介する（10分） ・ 再考したマインドマップを基に、ペア・班で紹介文を伝え、相手の紹介文を聞く。 ・ 班からの意見や質問を参考に、相手が知りたい情報を入れたり、表現を改善したりするなどの工夫をして、よりよい内容になるように考える。 ・ 留学生の情報（出身国、日本滞在日数など）を聞き、相手に合った紹介になるように意識する。	



実践事例

英語

学年 1 年	関係・連携の考えられる教科等 社会・家庭
授業内容 ・ 諸外国の年末年始の過ごし方を知る。 ・ 留学生に日本の年末年始の過ごし方を紹介する。	
教科等で身に付けたい力（本時について） 【外国語表現の能力】 ・ 聞き手が理解しやすくなるように、工夫して、メモを見ながら話すことができる。 【コミュニケーションへの関心・意欲・態度】 ・ 相手意識をもって言語活動に積極的に取り組もうとしている。	育成したい資質・能力 ② 伝統文化への理解に基づいた多様な文化を尊重する態度 ③ 文化の伝承・創造への主体性など
授業のポイント・流れ 1. Warm Up（5分） ・ ペアで1つのトピックについて60秒の即興対話活動を行う。 ・ 1ペアがクラス全体で対話を発表する。 2. 前時の復習（5分） ・ 年末年始に何をするか英語で簡単なやりとりを行い、前時の復習をする。 ・ 留学生に「日本の年末年始の過ごし方を紹介する。」という学習ゴールを確認する。 課題 留学生に日本の伝統的な年末年始について紹介しよう。 3. 即興対話①（5分） ・ 前時に作成したマインドマップを基に、「日本の年末年始」についてペアで即興対話をする。 ・ ペアで伝え合い、内容や表現など必要な情報があればマインドマップに付け足す。 4. 「諸外国の年末年始の過ごし方」を聞く（10分） ・ 留学生の年末年始の過ごし方を紹介した動画を観る。 ・ 諸外国の年末年始について知り、日本の過ごし方との相違点に気づく。 ・ 留学生が何に興味があり、何を知りたいのかを知る。 ・ 留学生に伝える内容を再考する。  5. 即興対話②（5分） ・ 再考したマインドマップを基に、ペアを変えて伝え合う。 ・ 内容や表現など、参考になる情報があればマインドマップに付け足す。 6. 「諸外国の年末年始の過ごし方」を読む（5分） ・ 4の動画で観た国やそれ以外の国の年末年始の過ごし方が書かれものを読み直す。 ・ 日本の年末年始を紹介するときに、使えるような英語表現の参考にする。 7. 発表原稿を書く（10分） ・ 次回の「日本の年末年始紹介」撮影のために、下書き原稿を書く。 ・ 「諸外国の年末年始の過ごし方」紹介で使われている表現や、以前行った「日本食紹介」「日本の遊び紹介」で使った表現や内容を振り返り、参考にする。 8. 振り返り（5分） ・ 本時の振り返りを書く。 ・ 次回の内容を確認する。	

実践事例

英語

学年 3 年	関係・連携の考えられる教科等 社会・総合
授業内容 日本の世界遺産の中から，グループで1つ選び，Jim先生に行ってみたいと思ってもらえるプレゼンテーションをする。	
教科等で身に付けたい力（本時について） - 聞き手を意識して，充実した内容のプレゼンテーションをすることができる。 【外国語表現の能力】	育成したい資質・能力 ①日本の伝統や文化に関する理解
授業のポイント・流れ <前時までの流れ> - 本文を読んで，日本の世界遺産（原爆ドーム・知床・日光）についての説明文の組み立て方を理解する。 - 自分が選んだ世界遺産について，知っていることを5文程度で書く。 - Jim先生がぜひ訪れてみたいと思えるようなプレゼンテーションをするため，タブレット端末を使って情報を収集し，紹介文がよりよくなるように英文を作成する。 - タブレット端末で写真を提示しながら，個人の発表をグループで行う。 - 同じ世界遺産を選んだ4人のグループを再結成し，協働で紹介文を1つ作成する。 - プレゼンテーションに向け，役割分担を決め，タブレット端末を使って，練習する。 <本時の流れ> - あいさつの後，グループに分かれて，プレゼンテーションの打ち合わせ，練習する（5分） - 世界遺産を紹介するプレゼンテーションを行う。（40分） 1グループ約3分のプレゼンテーションをする。 - Jim先生が2，3の質問をする。 - 聞いている生徒は，良い表現や印象に残った点などをワークシートに記入しながら聞く。 - まとめをする。（5分） - プレゼンの中から，Jim先生に行ってみたくなった日本の世界遺産ベスト3を発表する。 - 活動全体を通しての振り返りを，ワークシートに書く。	

実践事例

英語

学年	関係・連携の考えられる教科等
3 年	総合
授業内容	
・ 金沢大学の留学生に「Kanazawa One Day Tour」をプレゼンテーションする。	
教科等で身に付けたい力（本時について）	育成したい資質・能力
・ 伝えたい相手を意識し、相手のニーズに対応しながら、プレゼンテーションをすることができる。【外国語表現の能力】	③文化の伝承・創造への主体性など
授業のポイント・流れ	
1. 本時の課題を知る（3分）：インタラクションと課題の確認 ・ 金沢に来たばかりの金沢大学の留学生に、自分がお薦めする金沢観光プランを立て、提案することを確認し、課題に対する意識を高める。 ・ 「Kanazawa One Day Tour」のプレゼンテーションをすることが最終ゴールであることを再確認する。 課題 留学生が行きたくなるような「Kanazawa One Day Tour」にしよう。 2. ペアで即興対話をする（10分） “Please tell me about your plan of Kanazawa One Day Tour.” ・ 前時に作成したスピーキングメモを基に、ペアで紹介し合う。 ・ 対話して気付いたことやわからなかった表現などを、さらにメモに加える。 3. 留学生の手紙を読む（5分） ・ 留学生6人の書いた手紙を読み、留学生が行きたい場所や知りたいことなどのニーズを知る。 ・ 留学生の手紙の中で、わからない単語や見えそうな表現などに線を引く。 ・ 自分がプレゼンテーションしたいと思う留学生を決める。 4. スピーキングメモの再考する（10分） ・ プレゼンテーションする相手のニーズに合わせて、プランの見直しをする。 5. グループで紹介し合う（17分） ・ 同じ留学生にプレゼンテーションするグループになり、修正したスピーキングメモを基に、自分のプランを紹介し合う。 ・ 聞き手は、良いと思う表現や参考にしたい表現、自分にはなかった視点などメモに加える。 ・ グループ発表が終わったら、プレゼンテーション原稿の作成を開始する。 6. 代表者の発表を聞く（3分） ・ グループ発表でプレゼンテーションできていた生徒が全体場で披露する。 ・ 代表者のプレゼンテーションの仕方、内容を参考にする。 7. 授業の振り返り（2分） ・ English Learning Journal を記入して、本時を振り返る。	



学校保健

葛山 友紀

共同研究者 河田 史宝（金沢大学）

1. 伝統文化教育を進めるに当たって

学校保健では平成 26 年度より、E S D の視点に立ち、「コミュニケーションを行う力」と「他者と協力する態度」の育成を重点的に行ってきた。グローバル化する社会において、異なった考え方や生き方を持った人々と関わり合い、協力し合いながら生きていくためには、他者理解を深めるとともに、自己の心の健康を保ち生活を送ろうとする力が必要である。そのため「ストレスマネジメント」と自他尊重のコミュニケーションである「アサーション」について保健指導を実施してきた。

平成 29 年度より伝統文化教育を進めるに当たり、「日本人の心に関すること」を重点的に取り組みたいと考えた。昨年度は日本の精神文化と言われる茶道の「茶の心」を題材とした。茶道の精神性を示す千利休の言葉『和敬清寂』や客人に対する準備について知ること、
「相手を敬い平等に接すること」や「相手を思いやる心」が大切であると生徒は認識できていた。

今年度は、題材を「和菓子」に変え、実施する。和菓子は大切な行事や祝いの際に用いられており、想いを具現化したコミュニケーションツールとなっている。江戸時代から続く和菓子の贈答を通して、想いを伝えてきた日本の伝統文化を尊重するとともに、他者の気持ちを考えて、自己の気持ちを行動で表現できる生徒の育成を目指したい。

2. 能力・態度の育成に当たって

（1）学校全体として育成する資質・能力について

学校全体として育成する資質・能力のうち、学校保健では特に「①日本の伝統や文化に関する理解」を重視した。和菓子に関する知識と理解を深めることが、想いを大切にしてきた日本の伝統文化を知ることにつながる。

和菓子の贈答は非言語コミュニケーションの一種である。非言語コミュニケーションは言語的な情報を補うコミュニケーション手段となっており、意思伝達の様々な面をカバーしている。そのため非言語的なメッセージを捉えることは、他者とより良い関係を維持する上で重要な要素となる。非言語コミュニケーションの重要性を知るとともに、気持ちを表現する方法を考えさせ、それを実践する意識を持たせたい。

（2）関連・連携を図った教科等について

関連・連携を図ることができる教科は、「思いやり」と「和菓子」を扱うものとなる。

「思いやり」に関しては、体育科での「柔道」（自他共栄の精神を取り扱う）と国語科での「盆土産」、道徳の「心に寄りそう」「愛」と関連・連携を図ることができる。

「和菓子」に関しては、家庭科での「衣食住の生活」、数学での「1 次関数」（事例で使われる和菓子）と関連・連携を図ることができる。

3. 成果と課題

(1) 分析方法

本研究では、2年生4クラス(142人)に実施した1時間の授業から成果を検証した。検証の手順は、まず授業のまとめで設問1「実生活において、想いを行動で伝えるには、どんな場面でどんな行動を心がけたいと思いますか」設問2「授業を受けての感想」を生徒に自由記述させ、それをテキストファイル(Excel)の1行に1件ずつ自由記述を入力した。その後、入力ミスや不自然な表現、表記の異なる同義語について、内容を変えずに編集を行った。編集後にKH Coder(Ver. 3)を使用し、テキストから自動的に語を取り出し、総抽出語数(分析対象ファイルに含まれているすべての語の延べ数)、異なり語数(何種類の語が含まれていたかを示す数)頻出語を確認した上で、それらの語の共起関係を探った。最後に視覚化された語の共起ネットワーク図から文章全体を把握し考察した。

(2) 結果

①語の抽出と頻出語の確認

ア、設問1「実生活において、想いを行動で伝えるには、どんな場面でどんな行動を心がけたいと思いますか」についての自由記述

生徒から得られた142件の自由記述データを分析対象とした。KH Coderを用いて前処理を実行し、文章の単純集計を行った結果、420の文が確認された。また、総抽出語数は6,595、異なり語数は664あった。さらに、助詞や助動詞などどのような文章にでもあらわれる一般的な語が除外され、分析に使用される語として2,448語(異なり語数513)が抽出された。これらの頻出語の内の上位30語とその出現頻度を表1に示す。

表1 設問1の頻出

順位	語	頻出	順位	語	頻出	順位	語	頻出
1	思う	141	11	挨拶	33	21	目上	23
2	伝える	125	12	渡す	32	22	態度	22
3	気持ち	102	13	笑顔	29	23	和菓子	22
4	相手	92	14	言葉	28	24	表情	21
5	感謝	72	15	自分	27	25	目	20
6	人	59	16	大切	27	26	気	19
7	行動	56	17	言う	26	27	見る	18
8	心がける	41	18	伝わる	26	28	込める	18
9	想い	40	19	ありがとう	25	29	お礼	14
10	場面	38	20	贈る	24	30	考える	14

イ、設問2「授業を受けての感想」についての自由記述

表2 設問2の頻出語

順位	語	頻出	順位	語	頻出	順位	語	頻出
1	思う	186	11	相手	53	21	今回	29
2	伝える	163	12	大切	43	22	文化	29
3	和菓子	136	13	自分	38	23	物	28
4	気持ち	126	14	考える	37	24	方法	28
5	想い	106	15	授業	36	25	心	25
6	贈る	83	16	渡す	36	26	込める	24
7	行動	79	17	伝わる	33	27	態度	23
8	言葉	75	18	場面	31	28	今日	21
9	分かる	75	19	知る	31	29	言う	19
10	人	55	20	感謝	29	30	色々	19

生徒から得られた 142 件の自由記述データを分析対象とした。設問 1 と同様に文章の単純集計を行った結果、412 の文が確認された。また、総抽出語数は 10,743、異なり語数は 864 であった。さらに、助詞や助動詞などどのような文章にでもあらわれる一般的な語が除外され、分析に使用される語として 3,970 語（異なり語数 668）が抽出された。これらの頻出語の内の上位 30 語とその出現頻度を表 2 に示す。

②語の共起関係の探索と自由記述の要約

KH Coder の「共起ネットワーク」のコマンドを用い、設問 1 と設問 2 の自由記述それぞれの中で、出現パターンの似通った語（すなわち共起の程度が強い語）を線で結んだネットワークを描いた（図 1 及び図 2）。なお、出現数による語の取捨選択は、図 1 については最小出現数を 5 に設定し、描画する共起関係の絞り込みにおいては描画数を 100 に設定した。図 2 については最小出現数を 6 に設定し、描画する共起関係の絞り込みにおいては描画数を 90 に設定した。

以下では、図 1 及び 2 に示した語の共起関係をもとに、分析者が特徴的な記述のまとまりと判断したものを項目として立て、生徒の実際の記述を“ ”内に原文のまま抜粋しつつ要約する。なお、抜粋にあたっては、KH Coder の KWIC コンコーダンスのコマンドを用い、それぞれの語がどのように用いられているのか、文脈を探った。下線を記しているのは、項目ごとに、そのまとまりの中に含まれている語である。

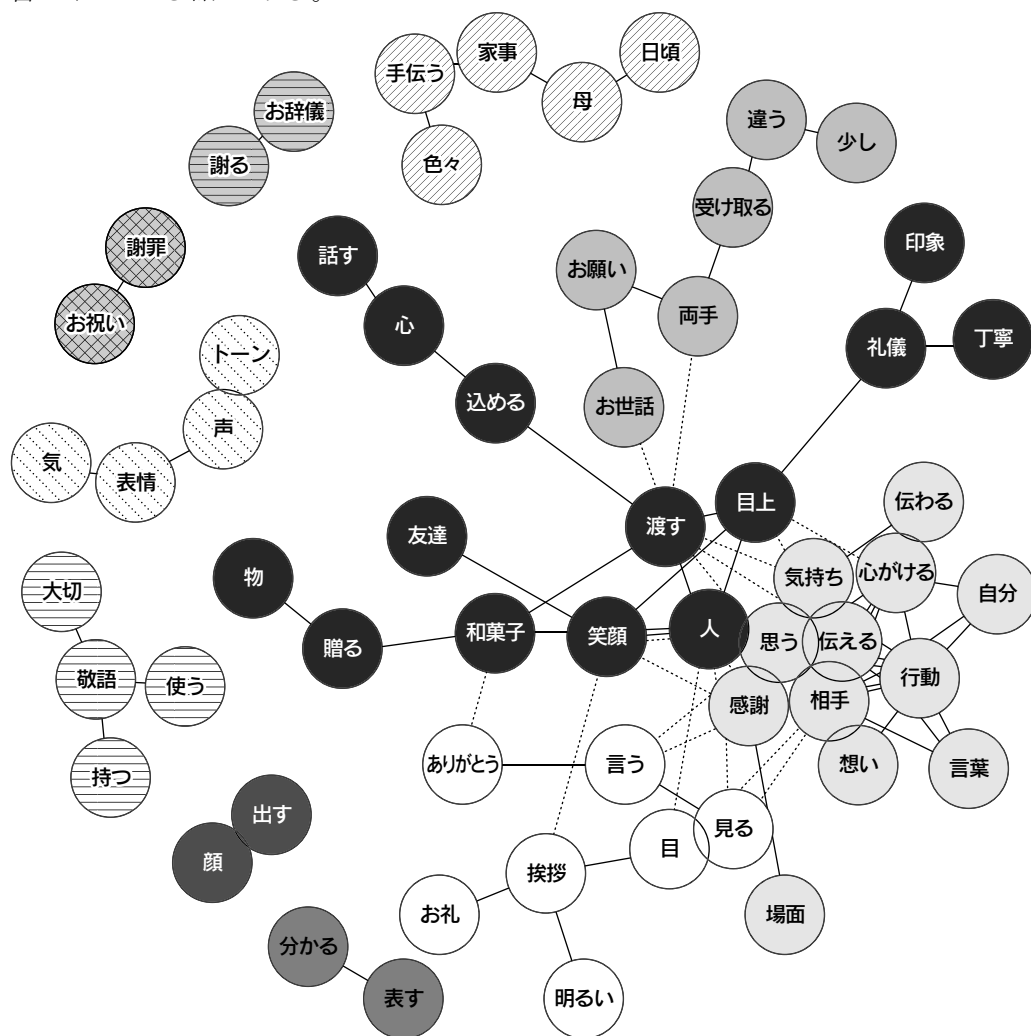


図 1 設問 1 についての自由記述の共起ネットワーク

徒の記述には“目上の人とかに対して敬語、礼儀を大切にする”“友達に何気ない時に笑顔で応答したり、挨拶をすることが大切”“相手に礼儀正しくふるまったり、和菓子を贈ることで敬意を表したり、丁寧な言葉遣いを心がけたい”“目上の人（上司など）や、日頃お世話になっている人（祖父母など）には、特に礼儀正しく何かを渡すなどして、感謝の気持ちを伝えたいと思う”“笑顔など、表情に気を配りたい”“お礼を言うときなど心を込めて話したい”などがあつた。

図1の右上側は、「渡す」ことに関連した語がまとまりとなっている。生徒の記述には“これからお世話になる人に感謝やよろしくお願いします、という想いを伝えるとき【中略】和菓子などを渡す時は、両手で、のしの方向などにも気をつけたい”“プリントもらう時は両手で受け取り、プリント渡す時も両手で”“表情が少し違うだけでも相手が受け取る印象に差が出る”など、日本の物の受け渡しの礼儀について書かれたものがあつた。

(ウ) 目を見て、明るく挨拶やお礼をする

図1の下側は、「挨拶」「お礼」に関する語がまとまりとなっている。生徒の記述には“ありがとうと伝えたいときには、相手の目を見て気持ちを込めて言いたい”“挨拶にしても、暗い顔だと相手が嫌な風に捉えてしまうかもしれないので、明るくすれば良い”“相手の目を見て、ちゃんと気持ちが伝わるように挨拶や、お礼をしなければいけないと思った”“お礼を伝える場面ではしっかり口と態度でありがとうという気持ちを伝える”など、挨拶やお礼をする際の態度について書かれたものがあつた。

(エ) 家事の手伝いをする

図1の上側の「日頃」「母」「家事」「手伝う」「色々」から、「母に日頃の感謝を伝えるために、家事を手伝う」ということが読み取れる。これらの語を含む記述には“洗濯物をたたんだり、掃除機をかけたり、家事の手伝いができる”“いつもありがとうという意味をこめて、色々なことを手伝ってあげたい、優しくしてあげたい”などがあつた。

(オ) その他

上記以外では、図1の左上側から左下側にかけて、「謝る時にお辞儀をしたい」「謝罪やお祝いの気持ちを伝える」「声のトーンや表情に気を配る」「敬語を使うことが大切」「顔に出す」「気持ちを表すのに大切だと分かった」といったまとまりがあつた。

イ、設問2「授業を受けての感想」

(ア) 想いを行動で伝えることについて

図2の左上側には、表2の頻出語上位10語が中心となって大きなまとまりを形成し、その語から他の語が共起していることが見て取れる。生徒の記述には“今回の授業を受けて想いを行動で伝える方法について知ることができた”“感謝の気持ちを伝えたりするのは大切だと思った”“行動や見た目なども大切だということに気がついた”“相手の行動にどのような意味があるのか考えたい”“自分の想いとか気持ちをちゃんと伝えられるようになりたい”“言葉だけでは伝えきれない想いを、物も含めて伝えるのは大切”“言葉だけでなく色々な仕草や表情、声色を使って気持ちを伝える”“言葉の効果を大きくするために、何か行動するということも大切”“和菓子という物で想いを伝えることができるのに驚きました”などがあつた。

(イ) 日本の伝統文化・和菓子について

図2の右上側には、日本の伝統文化・和菓子に関連するまとまりがみられる。生徒の記述には“思いやりの心の大切さが日本金沢の伝統文化である和菓子を通して学ぶことができ良かつ

た”“金沢にはその場の雰囲気にあった和菓子を相手に贈ることで自分の気持ちを伝える伝統があることを初めて知った”“気持ちを形にした和菓子は石川、金沢の伝統文化とも言える”“和菓子を作っている方へのインタビューを聞いて、日本の心そのものだと思った”など、伝統文化の一つである和菓子の役割についての内容があった。

また“感謝・何らかの気持ちを伝える時に、和菓子を使いたい”“和菓子には、人と人とを繋ぎ、感謝などの気持ちを伝える役割もある、江戸時代からずっと続いている習慣だと知り、伝統の1つとして受け継いでいきたい”“国際的な文化が広がってきている今、日本の伝統文化を受け継ぎ、守ろうとしている人がいるという事にありがたみを感じた”“和菓子のみならず、日本の伝統文化や伝統的な工芸品にも、様々な想いが込められている、日本ならではの文化を大切にしていくとともに、沢山のの人に発信していくことが大切だ”など伝統文化の継承に関する記述もあった。

その他に、“和菓子は江戸時代、前田家から江戸にいる将軍に献上品として持っていくことから発展していきましたが今でも贈り物として使われているということが分かりました、金沢は前田家が将軍に目をつけられないために文芸にはげんでいたことにより贈り物をするという文化が強く根づいている地域、言葉だけでなく物や態度でも気持ちを伝えられるようにしたい”など他教科で学習したことを関連付けた記述もあった。

(ウ) その他

図2の右上側から「学んだことを色んな場面で活用したい」「機会があれば気持ちを形にしたい」「言い方で印象が変わる、将来のために覚えておきたい」「生活の中で必要」「思いやりの心」「上司に挨拶」などといったまとまりも見られた。

(3) 考察・まとめ

①非言語コミュニケーションの理解について

自由記述の分析の結果、設問1「実生活において、想いを行動で伝えるには、どんな場面でどんな行動を心がけたいと思いますか」については、「感謝の気持ちを伝える、言葉・行動で伝える」「礼儀や笑顔を大切にする、和菓子を贈る」「目を見て、明るく挨拶やお礼をする」「家事の手伝いをする」の4つの記述のまとまりが見出された。また設問2「授業を受けての感想」からも想いを行動で伝えることに関するまとまりが見出され、日常生活において、自他の気持ちを大切に、言葉だけでなく行動でも想いを伝えたいという意識が高まったと考えられる。また行動内容については、礼儀や笑顔、目を見る、明るい挨拶やお礼、和菓子を贈るなど、具体的な方法が記述されていたため、非言語コミュニケーションについて多くの生徒が理解できたと思われる。その他、家事を手伝いたいという記述からは、授業と実生活を結び付けて、自分を支えてくれている人の存在を再確認し、感謝の気持ちを行動で伝える実践意識を高めることができたと考えられる。

生徒の記述の中には「気持ちを伝えるために物を渡したい」など、想いを形にしたいというものがある。今回は伝統文化に関連した授業を実践するため、非言語で想いを伝える一つの方法として和菓子を取り上げ、形にして伝えることを活動に盛り込んだのだが、非言語コミュニケーションの大きな要素は、聴覚情報（声のトーンや話の早さなど）や視覚情報（表情や見た目など）と言われている。また中学生の実生活において、物を贈り合うことは頻繁にはないと思われる。よって非言語コミュニケーションについての知識の習得や重要性をより実感するためには、本時の前に、非言語コミュニケーションの要素や役割について触れる機会を設けるなどの改善が必要である。

②伝統文化に関する知識理解について

設問2「授業を受けての感想」から、日本の伝統文化・和菓子に関するまとまりが見出され、和菓子についての知識の習得が図られたと考えられる。また伝統文化の継承に関する記述もあった。よって資質・能力①「日本の伝統や文化に関する理解」と資質・能力③「文化の伝承・創造性への主体性など」を育成することができたと考える。

しかし1時間という短い授業の中で、取り扱うことができた内容は限られたため、知識や理解を深めるまでの活動には至っていない。普段どのような場面で和菓子を食べるか、どの程度生活の中で和菓子と触れる機会があるかなど、生徒が和菓子をどのようにとらえているのか、その実態を踏まえた授業にする必要があった。また江戸時代から和菓子が受け継がれている理由や、金沢の和菓子の発展について、さらに将来和菓子が日本の伝統文化として受け継がれていくかどうかについて、個人が考える時間や話し合いの時間を設け、意見を交わすことができれば、資質・能力③について、より育成できたのではないかと考える。

③その他

学校保健は教科ではないため、指導の機会が限られる。また指導内容は生活に直結しており、すぐに成果が出るものではない。そのため他教科との連携は不可欠であり、効果的に指導を継続するためには、カリキュラムマネジメントを行うとともに、評価の方法についても検討していく必要がある。

実践事例

学校保健 2 年

授業者 葛山 友紀	授業日 1 1 月 2 3 日（土）
授業クラス 2 年 3 組	関係・連携の考えられる教科等 保健体育・国語・道徳・家庭・数学
授業内容 和菓子を通して，想いを行動で伝える方法について考える。	
教科等で身に付けたい力（本時について） 他者の気持ちを考えて，自己の気持ちを行動で表現する方法を知る。	育成したい資質・能力 ① 日本の伝統や文化に関する理解
授業のポイント・流れ 1 昨年度の授業の学習内容を確認する。（5分） ・ 自尊尊重のコミュニケーション方法（アサーション（assertion），「DESCAL（デスカル）法）」についての復習を行う。 ・ コミュニケーションには相手を気遣う思いやりの心が必要である。 2 同じ言葉でも態度が違う場合の相手の気持ちを考える。（3分） ・ 意思伝達の際は，非言語コミュニケーションにも目を向ける必要がある。 3 和菓子の文化について知る。（10分） ・ 気持ちを形にして表現しているものが和菓子である。 ・ 江戸時代から和菓子の贈答が続いている。 ・ お店ではお客様の想いに沿ったものを提供している。 4 和菓子に込められた想いについて考え発表する。（22分） ・ 和菓子を贈る場面を設定し，贈る側，贈られる側の想いについて意見を出し合う。 5 実生活において，想いを行動で伝える方法について考え発表する。（10分） ・ どのような場面でどのような行動をとりたいか考える。	

特別の教科 道徳

1. 伝統文化教育を進めるに当たって

本校では、学校教育目標「自由闊達な気風の中で、広い視野と豊かな人間性を持ち、将来、社会的使命を果たす生徒を育成する。」の基に道徳教育の重点目標を「自分を律しつつ、自分に関わる人の思いに気付き、思いやりの心を持ち、他者との相互理解を図りながら、よりよい人間関係を築いて共に生きていこうとする態度を育てる。」としている。

昨年度から「伝統文化教育を中心とした教科等横断的なカリキュラムの開発ーグローバル社会に生きるために必要な資質・能力の育成を目指してー」という研究主題の基に取り組んでいる。「郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度」、「我が国の伝統と文化の尊重、国を愛する態度」の内容項目を教育課程の中で重点的に位置付けている。各学年で共通する教材で実践研究を行いながら、総合的な学習の時間や学校行事等と関連させ、教科等横断的なカリキュラムの開発を目指して取り組んでいる。それらの学習を通して、日本人としての美德やよさを生かし、グローバルな視野で活躍するために必要な資質・能力を育み、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てたい。

2. 能力・態度の育成に当たって

(1) 学校全体として育成する資質・能力について

「考え、議論する道徳」を目指して、生徒の姿を教師が的確に捉えられるように今年度は全校共通のワークシートの型を用い、授業ごとに記録を取ることにした。三つの項目において、当てはまるのか当てはまらないのかを四段階で表す欄と思ったことや考えたことをメモする欄を設けた。項目は「今日の授業は考えさせられた」、「教材や友達・先生の話から、自分の考えを深めることができた」、「学んだことをこれから生きていく中で大切にしたいと感じた」とした。これらの欄を設けたことにより、記述が苦手な生徒でもどのように感じたのかがわかるようになった。

また、今年度は授業者も担任のみが行うのではなく、各学年所属の教師も道徳を行う計画を立てた。全クラスの授業を同じ教師がすることによって、一つの教材の準備にかかる時間が十分に取れることやお互いに授業参観することによって生徒の反応も捉えやすくなるなどという成果があった。

伝統文化教育に関わっては二つの内容項目に全学年で取り組むこととした。地域社会に尽くし、生きてきた先人や高齢者などの先達への尊敬と感謝の気持ちを育み、郷土のために自分ができることは何かを考え、郷土の発展のために自分が寄与しようという意識を高めていきたい。また、日本人として我が国への親しみや愛着の情を深め、他国と自国の関わりについて考え、日本人としての自覚をもって新しい文化の創造と社会の発展に貢献し得る能力や態度を養っていくことを目標としている。それらがグローバル社会に生きるために必要な資質・能力の育成にも関わると考えている。

(2) 関連・連携を図った教科等について

道徳教育としては、全体計画と年間指導計画を作成し、学年ごと、教科ごとの関連を図り、生徒指導や教育相談、学校行事等とも連携して取り組んでいる。

一年生は、英語科の授業で日本の食や遊びについて留学生に紹介する活動を行っている。また、技術・家庭科では日本に古くから伝わる食事の作法などについて学んだり、音楽科で民謡について学んだりしている。それらの学習と関連付けて、教科書の題材である「ぼくのふるさと…伝統的な太鼓や歌」「郷土を彫る…伝統工芸品」「古都の雅、菓子の心…京菓子、茶菓子」を行い、国語科の教員による「石川県が都会に対して誇れるところ」に関する授業実践を行った。

これらの題材を通して、日本の伝統と文化を大切に、地域社会の一員としての自覚をもって、郷土を愛し、進んで郷土の発展に努めようとする態度を養うことをねらいとした。また、育成したい資質・能力としては「③文化の伝承・創造への主体性」とした。

○ワークシートの振り返りより

- ・金沢が都会に対して誇れるものは…伝統工芸を使った現代の商業、美しい駅、歴史的建造物、人の温かさ、自然、食べ物
- ・この先も金沢の良さを残していくために自分たちにできることは…金沢の良さについてもっと知る、地域の人たちとの関わりを深める、他県の人たちに伝える、SNSで発信する。
- ・その他の感想より…他の人の意見を聞いて、新たな金沢（石川県）の良さを知れた。大人になったら東京に行きたいと思っていたけれど、金沢に住むのも良いかなと思った。

二年生は「心でいただく伝統の味」という題材を用いて授業実践を行った。一年時に技術・家庭科家庭分野の学習で、「和食」について、四季折々・旬の食材を使用することや、四季を表現すること等を学んできた。育成したい資質・能力としては、「③文化の伝承・創造への主体性」とし、「和食」を通して日本の良さを考え、それを次世代に伝えていくためにはどのようなことが必要かを考えることをねらいとした。授業の導入として「和食」の画像を見せ、まず、なぜ作り手が見た目に気を遣っているのかを考え、次に「心でいただく」とはどういうことなのかを考えた。その後、日本の良さを次世代や、さらに世界に広めるために、まずは自分たちがどうしていけばよいのかということ考えた。

○ワークシートの振り返りより

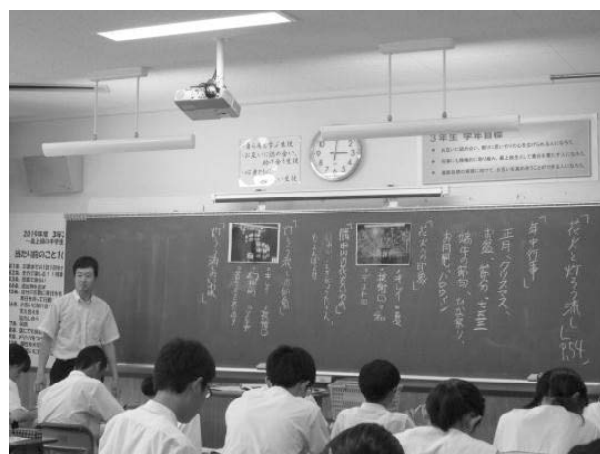
- ・今回の「心でいただく」という言葉がとても和食にあっているなと思った。また、日本の良さについて改めて考えることで、私達には「当たり前」だったことが、日本の民族の良さになっていることがあると気付いた。
- ・私自身も和食は美しいなと思っていたけれど、それ以上は考えたことがなく、「いただきます」も当たり前のようになっていたので、今回考えてみて、今まで見えなかった和食の良さ、日本の良さ、今後の課題が見えてきて、今後、最後に考えたこと（まずは自分が日本を好きになる、なくさないよう受け継いでいく、他の文化も知っていく）を実践してみたいと思います。
- ・日本文化を知るということは、同時に感謝の大切さを知るとのことだなと思いました。

三年生は、総合的な学習の時間で二年時には「金沢」について学び、三年時には「10年後の金沢」に対して提言を行うという取組を行っている。また、国語科と音楽科の授業では「能・狂言」について連携して学習し、金沢市が行っている観能教室をそれらと関連付けて学んでいる。それらの学習と結び付け、育成したい資質・能力としては、「③文化の継承・創造への主体性」とし、「花火と灯ろう流し」に学年全体で取り組んだ。金沢市でも花火大会や灯ろう流

しが行われており、生徒にとっても身近な題材として考えることができた。そこから「先人の作ってきた伝統を受け継ぐとはどのようなことか」を考えることができた。

○ワークシートの振り返りより

- ・単に伝統を受け継ぐのではなく、どのような伝統・行事なのか、何のために生まれたのかなどを考えて理解した上で伝統を受け継いでいくことが大切なのだとよく分かった。
- ・その伝統本来の形を考え、形式を少しずつ変えながらも、後世に伝えていくことが大切だと気づいた。なんか深かった。いつも考えることのないことについて考えさせられるいい機会だった。
- ・灯ろうは本当に大きな意味を担っているということを知った。この内容とは少しそれてしまうが、自分たちは一つ一つの行事の意味を見失ってしまっていることがあるのではないと思う。意味はきちんと理解したい。
- ・今回の授業で受け継ぐとはどういうことなのかよく考えた。形式を守ることが重視しすぎるのもよくないと思うし、形式を変化しすぎて本質を見失うのもよくない。受け継ぐというのはいろいろなことがあってとても難しいことだと思った。



実践事例

道徳

学年 1 年	関係・連携の考えられる教科等 国語・社会
授業内容 大阪が地方都市として独特な存在感を持っている街であることを知り，それをきっかけにして，自分たちの住む街金沢にも首都東京に負けないものがあるかどうかを考える。また，それらを維持・発展させるために自分たちにできることを検討する。	
教科等で身に付けたい力（本時について） ・ 郷土の伝統と文化の尊重，郷土を愛する態度 【C-(16)】	育成したい資質・能力 ① 日本の伝統や文化に関する理解
授業のポイント・流れ 1 本時の課題を知る。 「負けたらだちゃかん。負けたらだちゃかんぞ東京に。」（金沢ことば）（2分） ふるさと金沢が東京に負けないものは何だろう。 2 「道頓堀人情」（天童よしみ）を聴き，「負けたらあかん。負けたらあかんで東京に。」という歌詞が関西人（大阪人）のプライド（意地）を表していることに気づかせる。（5分） 3 東京と大阪の文化を比較し，大阪が首都東京に劣らぬ文化を持っていることを理解させる。（15分） ・ 東京タワー⇒通天閣 ・ 東京スカイツリー⇒あべのハルカス ・ 東京ドーム⇒京セラドーム ・ もんじゃ焼き⇒お好み焼き ・ ジャニーズ事務所⇒吉本興業 ・ 共通語⇒関西弁 ・ T D R ⇒ U S J 4 金沢と首都東京の文化を比較し，東京に誇れるものが何かあるかを考えさせる。 グループを作り，それを維持していくために必要なこと，また，そのために自分たちにできることを話し合わせる。（18分） ・ 金箔 ・ 金沢カレー ・ おでん ・ 兼六園 ・ かに など 「文化」という言葉にこだわらず，自由に考えさせてみる。 5 本時のまとめをする。 金沢が誇れるものとその維持・発展のために自分たちができることを発表する。（10分）	

実践事例

道徳

学年 2 年	関係・連携の考えられる教科等 家庭
授業内容 平成二十五年に，ユネスコ無形文化遺産に登録された日本の伝統的な食文化である「和食」。和食を通して，日本文化の良さに気付き，伝統と文化を継承するとともに新しい文化を創造して，その発展に努めようとする意欲を高める。	
教科等で身に付けたい力（本時について） ・我が国の伝統と文化の尊重，国を愛する態度 【C-(17)】	育成したい資質・能力 ③文化の伝承・創造への主体性など
授業のポイント・流れ - なぜ食べる前に「いただきます」と言うのだろう？(3) - 食材に対する感謝。 - 礼儀。 - 決まり，ルール。 - 作ってくれた人に対しての感謝。 - 和食の画像を見て，感じたことを話し合う(5) - なぜ作り手は，見た目も大切に飾るのだろう？(10) - 食べる人に，見た目でも味わってほしい。 （お腹を満たす前に）目も満たすため。 - おもてなしの心。 - 食べる人への思いやり。 - おしゃれ。 - 範読(5) （心でいただく伝統の味） - 食べ物を「心でいただく」とは，どういうことだろう？(12) - 作り手や食材に感謝を忘れないということ。 - 命をいただいているということを忘れないこと。 - 日本のこのような文化を次の世代や，さらに世界に伝えていくために必要なことは何だろう？(10) - 自分自身が日本の良さをしっかりと知ること。 - そのまま伝えるのではなく，時代の変化に合わせて，よりよいものに変化させていくこと。 - 日本だけでなく，他国の文化の良さや歴史を知ること。 - 感想・振り返り(5)	



実践事例

道徳

学年 3 年	関係・連携の考えられる教科等 社会
授業内容 花火と灯ろう流しについての作者の思いを通して，日本の年中行事について理解を深め，先人たちの想いと現代の社会状況の変化への対応の間で，揺れ動く文化の在り方を考え，伝統の継承と文化の創造に努めようとする心情を育てる。	
教科等で身に付けたい力（本時について） ・我が国の伝統と文化の尊重，国を愛する態度 【C-(17)】	育成したい資質・能力 ③文化の伝承・創造への主体性など
授業のポイント・流れ 導入 1．資料の前提となる知識を得る。（5） ・日本の年中行事と聞いて思い浮かぶものを挙げる。 ・自分の家庭のお盆はどのようなものか問う （金沢の切子の文化の特殊性，多様性にも触れる） 生徒の灯ろう流しの経験や，金沢での墓参りでの風習を知っている生徒に説明してもらう。 展開 2．資料を読む（5） 3．資料について考える。（5） ・「灯ろうを流すという儀式に参加することで人々は悲しみや苦しみの気持ちを新たにしてきた」とはどういうことなのか問う。 4．地域にあてはめて考える。（10） ・金沢の灯ろう流しについて，観光客を呼び寄せている良さと観光化してもととの行事の良さが損なわれているという意見を提示して，元の形へ戻すべきという意見と，より現代風にして若者を呼び寄せるべきという意見のどちらに賛成するか問う。 →立場とその理由をワークシートに記入させて，グループで話し合う。 5．考えを出し合い学びあう（20） 中心発問：先人の築いてきた伝統文化を受け継ぐとはどういうことなのだろう ・多様な考え方で「伝統文化の継承」を考えさせるためにグループで意見を交流させる。 6．振り返り（5）	

総合的な学習

1. 伝統文化教育を進めるに当たって

別紙グランドデザインにもあるように、本校では、総合的な学習の時間で、大きく分けて三つの活動を行う。一つは情報活用力の基礎的・基本的知識と技能を身に付けること、一つは職業に関する学習、そして最後の一つは、地元金沢に関する現状の学習と未来への提言である。この中で、金沢に関する現状の学習と未来への提言は、まさに伝統文化教育に関わる活動である。金沢は古い歴史と伝統をもつ地域であり、例えば金箔や加賀友禅などの伝統工芸、能などの伝統芸能が今も受け継がれている。また、町並みとしては、金沢城を中心として、武家屋敷の跡が残っていたり、寺町と呼ばれる地域には、数多くの寺が今も残っている。さらに、古いものばかりでなく、北陸新幹線が開業したことに伴い、多くの観光客が訪れ、外国人にも配慮したまちづくりが進んだり、21世紀美術館などの建造により、新しい文化を創造していく土壌ができつつある。

この金沢という地域に住む生徒にとって、金沢の現状を知り、地域の未来を提言する活動はまさに伝統文化教育に通じる活動であるといえる。この活動は、総合的な学習が導入された当初から、本校で継続的に実施しており、およそ20年間の生徒のレポートや教員の指導のノウハウの蓄積があり、様々な教科等においても、この活動につながるカリキュラムが構築されている。こういったことを踏まえ、総合的な学習の時間においても、様々な教科等と連携を図りながら、伝統文化教育をすすめていきたい。

2. 能力・態度の育成に当たって

(1) 学校全体として育成する資質・能力について

先述の「金沢の現状を知り、地域の未来を提言する活動」では、①日本の伝統や文化に関する理解、②伝統文化への理解に基づいた多様な文化を尊重する態度、③文化の伝承・創造への主体性など、の三つの資質・能力の育成すべてに関わることができる考える。本校では主に3年生でこの活動を行っていたが、伝統文化教育を進めるにあたって、平成29年度から、2年生でもその一部を行うことにした。

具体的には、2年生で、金沢に関する調べ活動を行い、主に「①日本の伝統や文化に関する理解」の育成を行う。3年生ではその知識を活用して、金沢の未来を提言する活動を行い、主に「③文化の伝承・創造への主体性」の育成を行う。このように、学年の発達段階に応じて育成の中心とする資質・能力を設定することで、さらに活動のねらいが絞りやすくなったと考えている。

(2) 関連・連携を図った教科等について

様々な教科等から、総合的な学習の時間につながる実践が報告されている。例えば社会科の「身近な地域」、家庭科の「郷土料理」、数学科の「旗源平の様々な確率」など、内容に関する学習があげられる。今年度は2年生で「金沢を紹介するパンフレット」製作を行ったが、各教科等の学習内容が、パンフレットの内容にも反映されていた。また、今年度は、各教科等が資質・能力の育成に力を入れていることから、例えば2年生の総合学習では「①日本の伝統や文化に関する理解」の育成を目標に挙げているが、生徒は、今の金沢の現状や課題を鋭い視点で分析するところまで、学習を深めていた。これは、「③文化の伝承・創造への主体性」の育成につながることであり、各教科等が、資質・能力を意識して実践を行った成果であると考えている。

研究同人

校長 端崎圭一

教頭 端名秀雄（国語）

教諭 谷口 仁（国語） 教諭 鏡 千佳子（音楽）

〃 早谷 憲子（国語） 〃 西澤 明（美術）

〃 金田 哲也（社会） 〃 廣瀬 尋理（保体）

〃 水橋 長之（社会） 〃 金子 真鈴（保体）

〃 岡田 哲典（社会） 〃 橋本 正恵（技・家）

〃 北村 悟朗（数学） 〃 服部 浩司（技・家）

〃 戸水 吉信（数学） 〃 上野 郁子（英語）

〃 北室 好章（数学） 〃 田中 里美（英語）

〃 兵地 梓（理科） 〃 渡村 のりこ（英語）

〃 横山 雄介（理科） 養護教諭 葛山 友紀

〃 北村 太郎（理科） 旧職員 折川 司（元校長）

西野 秀子（理科）

野村 菜穂（養護教諭）

研 究 紀 要 第 6 2 号

印 刷 令和 2 年 3 月 23 日

発 行 令和 2 年 3 月 26 日

〒921-8105 金沢市平和町 1 丁目 1 番 15 号

金 沢 大 学 附 属 中 学 校

電 話 (076) 2 2 6 - 2 1 2 1

F A X (076) 2 2 6 - 2 1 2 2

U R L <http://partner.ed.kanazawa-u.ac.jp/futyu/>

印刷所 〒920-0377 石川県金沢市打木町東 1448 番地
田中昭文堂印刷株式会社
